

青綬

清岡美津夫

。 気付けば唐蝸(せみ)が鳴き出しており、夏の盛りの到来を告げていた。

それを内心で自らの高揚に重ね、未だ冠を戴いてない少年は廊を歩く。

ふと雑踏より虫の声が多く耳に入るのに違和感を覚える。ここが京師(みやこ)である雒陽から東南七十里、緱氏縣の中心から東南三十里も離れている山麓だと思出す。

それ等の鳴き声に負けまいと、大股に一步一步力良く足を前へ出し、腰の紳に佩びる玉と衝牙が規則良く音を出させる。

やがて階に行き着き堂に昇り、深い日陰に潜り込む様、さらに舎の奥へと足を運ぶ。初めての場だが、昨日から一言一句漏らさず覚える行き先に在る一室の前へ立ち止まり、深い一呼吸をする。

閉じた戸から視線を下ろすと二対の履(くつ)があり、耳を澄ませると中から二人の声がする。そのため、その場で履を脱ぎ、遠慮なく戸を開け中へ入り戸を閉める。室の奥には、「席」と呼ばれる二つの長い敷物があり、それぞれに座し向かい合う二人が居て、そこへ進み出る。

腰から玉の音が発せられる所為か、共に一周り程年上の二人の男に接近を気付かれる。左の男は良く知った男で、右の男は昨日会っただけの男だった。共に頭を覆う黒い幘をそれぞれ被り、各自の上で前方に角が迫り出す一本の鉄の梁が戴かれ、総じて「一梁進賢冠」と呼ばれる冠が兩人各々の頭に戴かれる。二つの冠を見て自分は惟、黒幘を被るのみだと一瞬だが強く意識する。

一歩手前まで近付くと、跪き右手の上に左手を重ね胸から首の間に持って行き、腰の高さまで頭を下げ、所謂、拝礼を行う。二人の男はそれを見て、同じ動作をする事で拝礼に答える。向かって右で再び座る男が先に話し掛ける。

「確か劉備だったな。その大きく垂れる耳は忘れ様にも忘れられない。その汝自らの特徴に感謝するが良い。突っ立ってないで席に座って楽にすると良いぞ」

照れた笑みを浮かべつつ、男が口にした姓名が正しく、また男の勧めを受け入れる意で返事する。

「唯(はい)」

劉備と言う姓名で呼ばれた少年は、声を掛けた男の向かい側の席、もう一人の男の右隣に座る。それを見届けてから対座する男は再び話す。

「両者とも幽州の涿郡涿縣出身で劉姓なので、同じ宗族なのか」

男は同じ席に座る二人の顔を交互に見た。先に劉備の左に座る男が答える。

「足下の仰る通り、備と身(わたし)は同宗だ。父の援助の元、共にここへ遊学に来た仲だ。見ての通り若齡で加冠を済ませていない程だ。まだこちらに来て間も無く右も左も解らない状態で有るため、公孫伯圭に於かれては宜しくご指導を願いたい」

言い終えた後、立ち上がり公孫伯圭と呼ばれる男に向け拝し、それを横目で見た備も遅れて拝した。面を挙げると整った目鼻立ちを持つ伯圭は微笑みを見せている。

「そう固くなるな。我等は同じ師を持つ門下生だ。劉徳然も劉備も楽にし給え」

劉徳然と呼ばれる男と備は、共に安心した表情を浮かべ席へ座り直す。それを確認し、何かを

思いだしたかの様に再び伯圭は開口する。

「そう言えば汝等の出身と為る涿郡涿縣は我等の師の出身と同じだな」

それを聞いて徳然の顔は綻ぶ。

「我等の師は我が縣の誇りでもある。涿縣では童でも姓名だけで無くその業績も知っている。そうだろ」

徳然は右に顔を向け、備に同意を求めた。「然」と答えそれを受け語り出す。

「師の姓は盧、名は植で、子幹と字(あざな)し、幽州の涿郡涿縣出身であり、若き時より馬季長に師事し、古今の学に精通しておられ、数年前に博士に任命された程でした。そう言った学の道だけで無く執政にも腕を振るわれ、今年の初めには九江郡での蠻族の反乱に対し、文武を兼ねると言う理由で師は太守に任命され、早期に反乱を見事、鎮静化されました」

言い終えた備の視界には、徳然が我が意を得たりと言った笑みを見せていた。「博士」は国の学を支える官職であり、「太守」は郡と言う地方行政の一画の長であった。伯圭の方へ向き直る。

「我等が千八百里も離れた東北からここへ遊学に来た理由は、偏にそんな盧師に仕えるためだ。故郷の恥と成らないように学に励みたい」

声にも力を込める徳然に、伯圭は口の片端を挙げ応じる。

「奇遇だな。我も東北から来た。張り合う訳ではないが、ここから三千三百里以上も離れた幽州遼西郡の令支縣から来た...」

途中、備が感心の声を挙げたため、伯圭は発言を止め眼差しを向ける。

気まずい沈黙の間に居たたまれなくなり、備は説明を加える。

「卿が僕と同じ方言を使っていて同じ幽州の出身だと聞き、納得しつい声を挙げてしまいました。失礼致しました」

「僕」と言う謙称で自らを呼びつつ謝意を示した。伯圭は笑みを浮かべる。そこに安心させ様とする意が見て取れる。

「世の道理に目を向け楽しむのは良い素質だ。何も恥じるべきでは無い。それに学の道を進むにしろ、官吏の途を進み朝廷に仕えるにしろ、どちらかを志す大夫士は天下に共通する言語、つまり凡語を自然と身に着ける。だが、多くの者は一旦、凡語を覚えてしまえば、それ以外の方言を顧みようとしないだろう...」

「大夫士」は備や伯圭等の事であり、庶人と違う、官吏や軍勢を指揮する將士等に為る身分を意味していた。一旦、発言を切っていた伯圭は急に思い付いた様に備へ質問する。

「...ところで汝は盧師の下で学の道を進むのか、官吏の途を歩むのか」

質問に考える間を場に与え、やがて答え出す。

「正直申し上げれば、未だどちらに進むか決めていません。だけど、盧師は学にも官途にも両方に精通するから、どちらに決めるか考える場としても、どちらに決めても十分に学べる場としても最適だと存じます」

備の発言を聞き、補足しようと徳然が口を挟む。

「備は早くから父を亡くし、母と暮らしていた。備の父は郡に仕え、祖父は東郡の范令に着任し

た程だ。そのため、備は遺児として宗族の期待を一身に受け、若輩ながらそれに応えようと言う大成の志を懐いている。門下の先輩としてどうかこれから目を掛けて頂きたい」

徳然の真顔を受け止めたかのように、伯圭はやんわりと微笑む。

「それは約束はできないが、参考までに我が盧師の門下に為るまでの経歴を伝えておこう…」

伯圭の視線は備に向けられており、備は「唯(はい)」と応え先を促す。

「我が家は代々、郡の太守等の青綬の官位を輩出する家だが、私の母は卑賤な身分であったため、その恩恵に授かれなかった。そのため、高官への道を諦め、先ず小吏として遼西郡に仕えていて、幸運にも郡の太守に門下の書佐として迎え入れられ、さらにその妻を娶るに至った。だが、郡の一官吏に留まらず広く天下を見ようと、引いては高官に為る足掛かりにしようと職を辞し京師へ遊学に来た。そこで名声の有る盧師を知りその門下として志願し今日に至っている」

伯圭自身が伝える経緯に対し、まるで自らの半生が重ね合うのではないかと言う感覚が劉備にはあった。「綬」はその色や長さ模様で、官位を標識するために腰の紳から垂らす長く平らな絹を意味しており、「青綬」は二千石程度の俸禄を示していた。本来恵まれている筈の家柄の子が、親の不遇で招いた不利な状況から子自身の努力により身を立てていく。そういった半生の共通する部分を見出した結果、親近感を強く抱き、加えて備自身の将来までも見えた気で居た。

「公孫卿の年は幾つに為られますか」

何の前触れも無く備は伯圭の姓に敬称を付けた形で問うた。不意を突かれたが躊躇わず間を空けず答える。

「今年で年二十五だ」

備は表情に微かな笑みを含ませる。

「『禮記』曲禮に『十年長ずるを以て、則ちこれを兄として事(つか)える』と有ります。備は年十五であるから、ちょうど公孫卿に兄として事え得る年齢差です。どうか備を卿の義弟にして下さい」

その発言を終えた後、備は立ち上がり跪き拝する。徳然は上擦った声を挙げる。

「唐突に何だ。そんな嘆願で公孫卿を困らせてどうするか」

徳然の動じた様子とは裏腹に、伯圭は微笑を浮かべ平静に応じる。

「善いだろう。だが、今から三月間は猶予の期間だ。我が爾(なんじ)を気に入らなければ弟と認めない。だが、何事も無く三月間が過ぎれば、正式に爾を弟と認めてやろう」

その提案に、満面の笑みを浮かべ備は元気良く「唯(はい)」と返した。

掌を返した様に突然に徳然は備を称え出し、自らの同宗である年十五の男を宜しく頼むと伯圭に言付ける。場の様子を見ようともせず、直ぐ様に徳然は別の話題を場に提供する。それに伯圭は嫌な色を見せず応じ、すっかり場から備の兄事の話は消え去っていた。

それでも備の心は達成感で満たされており、師と為る盧子幹の門下としての生活が伯圭の下で約束された様な気に為っていた。眼前の伯圭と徳然との会話に気を向けている素振りを見せていても備は、数年後に自らが博士か高官になる姿を想像し胸を高鳴らせていた。

来降する燕を若い男が思わず流し目で追っていた。

その男は二十代半ばだが鬚(ひげ)が無く、それより両肩まで垂れんばかりの大きな耳が辺りの群衆に強い印象を与えている。他には巾を頭に巻いたり幘(さく)を被ったりする周りの者と違い、男は一梁進賢冠を戴き、さらには帯刀していた。衆目を集めるが目の前の多くの履(くつ)へ一向に関心を向けてくれない、と男は内心で嘆いている。

男の左右や大街を挟んだ向かい側で屋の付いた市肆(みせ)が幾つも並んでおり、各々併せ多様な商品が陳列されている。地に席を敷き座る場で、屋の無い空を見上げ、そのまま視線を下ろし種類の乏しい木綿の履を眺め、自らの市肆の見窄らしさを痛感する。

そんな履の並びに影が覆い、反射的に顔を影の主に挙げると、そこには見慣れぬ同年代で赤幘を被る男が立っている。やや背の低い男で手入れの痕跡が見あたらない髭(ひげ)を有する顔にある口がやがて開く。

「誤っていれば申し訳ないが、汝は涿縣の劉備ではないか」

見知らぬ男から自身の出身縣と姓名を口にされ動揺し、咄嗟に返答する。

「我は加冠し、『玄德』と言う字(あざな)がある。気安く名を口にするなんて失礼ではないか」

履の後に座る劉備と姓名を呼ばれ玄德と字(あざな)を言う男は声にも顔にも不快な色を出していた。立ち対面する男は対照的に悦びの色を出す。

「その口調はやはり劉備だ。吾の顔をよく見ろ。覚えは無いか」

そう言われ、まじまじと劉玄德は相手の顔を見て、やがて顔や声に驚きの色を浮かべる。

「足下は簡雍か」

「然。同年の汝と同じで吾も元服したので、『憲和』と字(あざな)している。最後に会ったのがこの同じ涿縣内であるが十年程前も昔であるので、互いに直ぐには判らないのも無理はないか。だが、吾はその大きな耳で汝を思い出し得た...」

簡雍と言う姓名と自ら憲和と字(あざな)す男は満面に喜色を示していた。そして思いだしたかの様にその場で跪き頭を下げ拝礼し、玄德も咄嗟に答拝する。顔を挙げた頃に再び簡憲和は話し掛ける。

「ところで何故この涿縣の市で履を売っているのか。官吏の任務とは思えないが」

その一つの問いに玄德は決まりの悪そうに眉を顰め、答える。

「我は官吏では無い。母の三年喪が明けたばかりだ。その足掛け三年の間、すっかり底を付いた金銭を稼ごうと、見ての通り市で履を売っている」

冷やかし気分が滲み出ていた憲和の顔が眉根を寄せ悲痛な物へと一変する。

「知らないとは言え大変失礼した。幼き頃から汝を一人で育てていたあの方が亡くなったのか。それはさぞ辛かっただろう」

同情の向かう先を玄德は微笑で受け止める。

「死に対する悲嘆と向き合うために三年喪があるんだ。今はこれからどうするかだけが私の念頭に在る」

何時の間にか市肆で座る憲和は目を細め語る。

「それならば良い。それにしても汝のその姿はとても懐かしい。幼き頃に亡き母と共に汝が今の様に編んだ履や織った席を売っていたのを思い出した。大男大女が物を売る中で元気な児が居たのだから、相当、目を引いていたものだ」

それに対し口を引き締めた後、応じる。

「育ち尽くした今だと、目を引く物はこの一梁進賢冠ぐらいな物だ。当たり前だけど皆、官吏では無いのだから庶人らしく巾や幘を被っているからな。だが、半時も経たずに冠も飽きられて売上には繋がらない」

玄德は苦笑いして見せた。対する憲和は未だ目を細め思い出に浸っている様子だった。

「汝も吾も年十に為り、学ぶために縣の序に入った。吾のと違い汝の家は世々、官吏を輩出しているが、早くから父を亡くし金銭面でも幼き頃から苦勞しており、辛うじて入れたのだったな」

自身の商売を妨げている事実に気付かず思い出話を続ける旧友に、玄德は商うのを諦め暫し話に付き合う決心を付ける。

「然。金銭以外で母の心配を掛けまいとし、我は勉学に励んだ…」

発言を遮るかの様に憲和は語句を被せる。

「それで周りの門生に一目置かれたのであったならば大したものだ。あの頃の汝は『末は博士か青綬か』と持てはやされた程、誰よりも秀でていた」

互いに視線を合わせているものの見られている感覚が玄德には無かった。憲和の言う「青綬」は丁度、一郡を治める太守が帯びる綬であり高官を意味していた。

「年十から四年程、蓄積したその名声が理由と為って我に援助してくれる宗族の者が現れた。そのため、我は京師に遊学へ行けたのだ」

「遊学」の語句を発すると急に憲和からの眼差しが注がれた。

「そこだ。それを最後に汝と別れたのだ。それから今日までの十二年に汝は何をしていたんだ」

まるで心の影に矛を突き付けられた心地になり、玄德は発する語句に詰まる。市の騒がしさが周りからその無音を埋める。その奇妙な沈黙を察し、憲和は再び話す。

「そう言う問いの前に先ず自分の事情を話すべきだったな。吾は官吏を目指し郡下で学び、年十七で学童に為り、初めの試に受かった。その後の試で優秀な成績を残せず、結局、官吏には為れないままだ。かと言って汝と同じく吾は大夫士であるため、庶人の様に年二十を越えれば『正』として兵卒に徴発されない。どうにか食いつないで今に至っている」

まるで笑い飛ばすかのように過去十二年間の己の不甲斐なさを陽気に語った。その様子を目の当たりにし、自らの過去十二年間も語ってしまえば惨めな気持ちから楽に為ると玄德は意を決する。

「十二年前、遊学の際、我の宗族である劉徳然と共に京師から百里程離れた緱氏山に居を構える盧子幹に師事した…」

驚きの表情を見せる憲和にまたも声を重ねられ、結果、発言を止められる。

「盧子幹と言うと、涿縣出身のあの盧子幹か。よく門下に入れたな。汝はやはり大した男だ」

興奮した声と共に憲和は我が事の様喜びを表した。その喜色を消す結果に為ると戸惑ったが

その思いを振り払って話を続ける。

「盧師は一郡の太守に着任されたり、京師の重役に就いたりと居を何度か移転された。劉徳然はその間に郡吏に為り門下を離れたが、我は師に着いて行った。だが、京師での試に何度も挑んだが、その都度に落ち続けた。そのため博士にも高官にも第一歩を踏み出せず終いだ」

左手も右手も駆使し伝えようとする玄德に対し、胸の前で両腕を組み俯き加減に耳を傾ける憲和だったが、眉根を寄せる面を挙げ口を開く。

「京師で学んだからと言って将来が約束された訳では無かったのだな。実の所、郡下で学んだ吾以上に汝は京師で苦労を重ねていたと言うのか」

憲和の表情に悲痛なものが混じるのを玄德は感じ取っていた。それは親身に為っての心からの同情に感じ、玄德は自身の心が揺さぶられる感覚に在った。

「然。それでも我は諦めず盧師門下の雑務に就きながらも勉学を進めていた。だが、長年の苦労が祟ってか母が亡くなり、喪に服するため涿縣に帰郷せざるを得なかった」

二年余り前の出来事を口にすると、玄德の心に二つの大きな喪失感が蘇った。母を失った大きな悲しみだけで無く師の門下生と言う地位を放り投げた悔しさも有った。

「それで今に至ると言う訳か。この足掛け三年は勉学も何もしていないのだな。我はてっきり官吏に為っていて、一昨年は張角の妖賊による反乱の鎮圧に従事していたと思っていた」

憲和の何気無い一言は玄德にとって重く響いていた。憲和の言う「張角」は一昨年春より天下十二州の内、その半分の六州に渡る大規模な反乱を起こした首謀者であり、多くの官吏も百姓も戦災に巻き込まれた。その六つの州に涿郡涿縣のある幽州は含まれないが、隣の冀州から来る多くの流民により涿縣にもその凄惨な様子が伝えられ、玄德でも十分に知り得ていた。後から聞くに、春に生じた張角による反乱に対し皇帝は直ぐ様に軍を送り鎮圧を図り、盧子幹を含め多くの將士や吏卒が各州へ動員され、冬に張角が病死し、その年末には一応の沈静化を見せ、そのため、年号は平静を意味し「中平」と改元されていた。

「天下動乱だと知りながら、結局、我は何も出来なかった。それを考えようとしても心の中で服喪中で何も行動できないと理由を付け、考えるのを止めてしまっていた。だが、『中平』に改号され、その三年に為った今に為って何もしなかった結果に後悔している。しかも天下動乱は完全に終わった訳で無く、依然、各州で張角の残党は横行しているそうではないか」

隠そうとせず玄德は悔しさを表情へ全面に出していた。それは世の中に対するのと何もしなかった己に対する感情だった。その様子を見て取ってか、一旦、曇った表情を見せた後、憲和は勢い良く言う。

「ならば決まりだ。汝はその残党を討伐すれば良い」

その意図を掴みかねて玄德は咄嗟に聞き返す。

「どう言う意味だ」

待ってましたとばかりに、一呼吸置いた後、堰を切ったような勢いで憲和は話し出す。

「汝も吾も今から官吏を目指すと言う手も有るが、政情不安である現状でそれが叶うとはとても思えない。ならば逆に政情不安を利用するんだ。今からでも遅くない。賊を討伐すればその地の治安を取り戻せ、二人の名声も得られ、一挙両得だ。そうすれば官吏への道も開ける。実際、賊

討伐で名を挙げ郡や縣の高官や長吏に為ったと言うのはよく聞く話だ」

興奮を声にも顔にも出さず憲和に対し、玄德は平静を装って落ち着いた様を見せつつ黙考する。周辺の市肆や大街から来る大勢の音が耳に付き始めた頃、玄德は口を開く。

「それだけ聞けば現状を打開する妙案に聞こえるが、討伐を実現するには三つの障壁が在る。先ず我には軍事に携わった経験が無い。次に兵卒を一人たりとも持っていない。終わりに例え軍勢を有していたとしてもそれを維持する軍資や兵糧が無い。それとも汝にはこれらの三つが揃っているとしても言うのか」

憲和は笑みを零す。

「三つのどれも有していない。だが、汝の賢明さと吾の交渉術さえ在れば必ず全部を手に入れられるだろう」

自信に満ちた言動に、それでも玄德は浮かない顔を見せる。何か思い付いたかの様に、再び憲和は笑みを零す。

「それとも汝はこの履(くつ)を売り続け、行く行くは大商にでも為るつもりか」

相手の笑みに玄德は嘲りを感じ取る。

「戯れ言は止せ。若い頃から十年以上も涿縣に居なかった我でもこの縣には南西の隣郡である中山國の大商を知っている。それ等は張世平や蘇雙等であり、幅を利かせている状況だ。一生掛かるどころか孫の代に為っても大商には為れない」

思わず声を荒らげて言い放った。後に辺りの多くの者の視線を感じ悔いる。憲和は顎を前に出し言う。

「では未だ試に合格し官吏へ着任するのを諦めていないのか」

その単純な問いに玄德は語句を詰まらせる。自信を以て「然」と答えられないで居た。

憲和は顎を引きじっと玄德を見て語る。

「では汝は今直ぐに目の前の履を片付け、吾と共に義兵を挙げ賊の討伐に赴こう。何、出兵するまでの汝の食は吾が面倒見てやろう。そのためにもし出兵できなくともまたここで履を売ればよい」

玄德は神妙な面持ちで俯き語り出す。

「我の師である盧子幹は常々、実が有ってこそその学だと仰っていた。つまり行政や制度の役に立ってこそその学問だ。こんな賊の討伐でも何かしら学んだ事を活かせる。それに盧師自身が賊の討伐に従事した経験が有り、何より一昨年、張角の賊を討伐した將の一人として活躍された。ならば、弟子の我が賊の討伐に名を挙げ、それが元で官吏に着任しても可笑しくはない...」

それを承けて憲和は顔を笑みで満たし語句を遮るように言う。

「要は吾の願いに対して『諾(よし)』と言う返事なのだな。では汝が市肆(みせ)を畳んだ後、早速、二人で会合だ」

その呼び掛けに玄德は「諾」と応え、並べた商品の荷造りを始める。

憲和は立ち上がり、視線を虚空へ移し何か考え事をしている様だった。

荷を纏め終えた後、離れ飛ぶ燕を最後まで玄德は目で追っていた。

節三

暖かい陽光が屋を避け射し込む中、共に二十代半ばに在る二人の男は並んで廊を歩いていた。左の男からは玉の音がする。

決して大きいと言えない敷地だからこそ直ぐ到達できる気に為っていた二人だが、複雑な造りであるため、逆に慎重で遅い足取りに為らざるを得なかった。左の劉玄德と右の簡憲和は共に左右に目を泳がせつつ行く先を探っている。玄德はまるで官吏の様に、一梁進賢冠を戴き上から下まで一枚の緩やかな単衣を着て佩玉帯刀する。対する憲和はまるで乗馬するかの様に、赤幘を被り体に密着するように、上に褶、下に袴を纏う。

或る門前に来ると二人は多くの野太い声を耳にする。右の憲和は前を見つつ左に声を掛ける。

「どうやらこの門の向こうに先方が居るようだ」

玄德は右へ不安を隠さない顔を向ける。

「我は汝が言う様に振る舞えば良いのだな」

思わず憲和は見返す。

「もう不安そうな感情が顔に出て居るぞ。汝は言われた通り喜びや怒り等の感情を顔に出さず発言も極力控えるのだ。そうすれば自然と威厳が出て相手は一目置くように為る。これから会う者は何より俠気の有る者を敬う。だが、会っただけでそれを見抜ける者など居ない。そのため、俠気に伴うと信じられる威厳に目が行くからだ。交渉は吾に任せて汝は泰然としてくれたまえ」

表情を真顔に戻し玄德は「諾(よし)」と答える。

憲和は門を両手で押し玄德と共に内へ足を踏み入れる。小さい中庭を挟んだ向こう側、地より僅かに高い位置に狭い堂が在って、その上に数人の男が座って談笑している。皆、両足を投げ出しとても礼儀正しいとは言えず、誰も門内へ入って来た二人に関心を示さない。玄德が見るにどの男も十代半ばで加冠した様には思えず、誰もが巾を頭に巻き上下に袴褶を纏っていた。しかし、各人の手の届く範囲に刀がさり気なく置かれており抜け目の無い所を示す。驚きが顔に出ない様に押し殺して前を向いたまま小声で話し出す。

「これが我等の兵卒と為る豪侠か。力になる者だと思い、門まで出迎えない無礼さに目を瞑っていたが、この若さで本当に役立つのか。賊を前に真っ先に逃げ出しはしまいか」

同様に憲和も顔を動かさず小声で言う。

「若いからこそ御しやすい。虚栄心を満たしてやれば、賊にも臆する事も無いだろう」

二人が堂下に至ると堂上の一人が大声を出す。

「来たか。上がって座ってくれたまえ」

そう言って、他の五人に動くよう合図を送り、間を空けず堂上の男は皆、狭い堂上の東へ動きそこへ陣取る。相変わらず両足を投げ出した、所謂、箕踞をした礼に則さぬ座り方だが、命令する男が堂の手前の端に位置し、そこは礼に則っていると玄德は気に留めていた。

二人は左の階の前で履を脱ぎ、玄德から順に堂の上へ昇り拝礼し、西側の奥から順にそれぞれ膝を曲げ腰を自らの足裏に乗せ礼に則し座る。憲和は開口する。

「呼び掛けに応じてくれ有り難い。同じ涿縣の者として縣下や郡下の治安の悪化を憂う思いは同

じだと存ずる。是非とも足下の力をお借りしたい」

南の端に座る指導する立場の若い男は聴き終え、顎を前に突き出して告げる。

「その返事をする前に、先ずその冠を戴いた者へ己を紹介させてくれ」

憲和は「諾(よし)」と応じる。対する男は玄德の方へ顔を向ける。

「身は張飛だ。この涿縣辺りの若い豪侠を全て取り仕切っている」

そう言っただけで張飛と姓名を名乗る男は丸々とした目で玄德を見つめている。つまり汝も名乗れと言うのか、と玄德は理解する。その考えに至り声を出す前に憲和が先んじて話す。

「今、この國家を統べる皇帝、つまり陛下の姓は何か知っているか」

その問いに張飛は眉根を僅かに寄せる。

「劉だ。そんなの兎でも知っている」

その答えを聞き憲和は僅かに口の端を挙げる。

「ここに居わすお方の姓名は劉備、玄德と字し、景帝の子の中山靖王の流れを汲むお方だ。傍流であるためその恩恵はお受けにならないが、陛下の御膝元の京師で何年も勉学に励まれていた...」

突如、飛は玄德の方を向き尋ねる。

「それは本当か」

確かに祖先は一郡の大きさとなる中山國の靖王である劉勝であり、その子の勝が三百年も前に陸城侯に封じられたが、その五年も経たず律により侯を失い、憲和の言うように食邑等の恩恵は一切無く、だからこそ京師へ遊学し仕官の糸口を掴む必要があったと玄德は内心で説いた。しかし、それを敢えてここで告げる憲和の意図を掴めないで居る。そう言った疑問を臆面にも出さず、玄德は落ち着きを保ったまま一言返事する。

「然」

それが切欠に憲和は続ける。

「そして故郷の涿縣へ帰って来た劉卿は、今、涿郡での治安の悪化を憂い、義兵を挙げ賊を討伐しようとしている。何故、劉卿が陛下の京師からわざわざ帰って来て涿郡で武を奮われるか判るな」

「陛下」を強く言う意味深な口調で話すと、飛は突如、玄德の方へ顔を向けた。玄德は自らの左右の耳へ交互に視線が向けられたと感じた。そうすると飛は神妙な面持ちに為り憲和に向き直り「唯(はい)」と答える。何故、飛が素直に応じたのか、玄德は暫し理解できずに居た。次第に何となくその意図を掴める様に為る。つまり、憲和が「陛下」を印象付け、加えて敢えて玄德を「卿」と言う敬称で呼んだ結果、あたかも玄德自身が皇帝の密勅により賊の討伐を行うと飛に誤解させている。つまり常人とは異なる容姿を持ち神々しさを感じさせる者、加えてほぼ偽りとは言え皇帝と縁の在る者がわざわざ詣で飛に願いを申し上げている形に為り、これが憲和の言う飛を初めとする豪侠の虚栄心を満たす行為かと納得する。

「では劉卿の力に為ってくれるのだな」

充分に間を空け飛に考える間を与えた後、憲和は飛に念を押した。対して渋い顔を見せる。

「是非、力を貸したいがそうは行かない事情が有る」

口調を見出さず憲和は質問を投げる

「それは何だ」

苦々しい表情と口調で飛は答え出す。

「今、涿縣へ關雲長と言う余所者が来てるんだ。そいつは我等涿縣の豪侠を脅かす存在に為っている。もし我等が義兵と為って涿縣の周辺を右往左往すれば、その間にその關雲長が涿縣を乗っ取るだろう。そんな結果を身は決して許さない」

声が出る度に表情が憤怒の表情を帯びていた。余程、關雲長を腹に据えかねているのだと内心で玄德は断じる。同時に表情に出るのを固く禁じつつ、義兵に参加すると言う大事を退ける程の飛が持つ縄張り意識に呆れ返っていた。しかし、それは飛が特別だと言う訳では無く、豪侠の典型だと感じ、余計に思いを強めていた。

堂上に沈黙が横たわる。軽快に話していた憲和が予想だにしない返事で語句を詰まらせている現状に、漸く玄德は気付く。禁を破り自らが語る時だと決意する。

「善かろう。今から我がその關雲長と言う輩に、足下が不在の間、権勢を奮わない様、確約させて来よう」

そう言い放った途中、飛より右隣の憲和からの視線を強く感じた。飛は悪戯をする前の子供の如く嘲る顔を向ける。

「それは面白い。是非、雲長をこの場へ連れて来て、その旨を誓わせてくれ。雲長の居る場は身の使に案内させる」

玄德はただ「善」と言い、立ち去る意で即座に拝する。遅れて憲和が拝する。雲長との交渉に失敗すれば飛等に二度と頼れないどころか、逆恨みを買う恐れがあると玄德は感じていた。

そのまま堂上を元来た階段へ歩み、階を降り履を付け中庭を横切り門外へ赴く。後から飛の配下が追い付き、道案内を始める。

その背中を見据え、暖かさに包まれる中、玄德は気を引き締め一步一步確かめる様に歩き進んでいた。

節四

半時も経たぬ内に至った所で張飛の配下は立ち止まり、そこが目的地だと告げ去って行った。後に取り残された劉玄徳と簡憲和は小さな門をしげしげと見つめている。

「門卒も居ないし、入るか」

憲和は左の玄徳に呼び掛けた。玄徳は戸惑う。

「先程は勝手な行動を起こして悪かった。あれは我なりに最善の申し出をしたつもりだ」

恐る恐る切り出した玄徳に、憲和は呆気にとられた顔を向ける。

「何を困惑しているのかと思ったら、そんな事か...」

憲和は門に視線を戻し発言を再開する。

「...確かに初めは怒りを覚えた。何せ事前の取り決めには無い動きを見せたのだから。だが、飛の使に案内されここまで歩く中途に考えた。仮に汝が取り決め通りに不動を維持していれば、吾が状況を打開できたと言う訳では無かった。そう言う点で寧ろ吾は汝に感謝しなければならない」

その発言の語句を受ける度に玄徳の表情が綻んでいた。

「では、張飛と交渉した時と同様に、關雲長との交渉も共に知恵を出し合い乗り越えよう」

その快活な声調とは裏腹に、憲和は怪訝な表情を見せている。

「それはどの様な意味だ。汝は雲長と知り合いではないのか。雲長を説き伏せる勝算が有るから飛にあの様な発言をしたのではないのか」

厳しい顔を向ける憲和に対し、玄徳は破顔し声を発てて笑う。

「關雲長なんて見た事も聞いた事も無い。だが、あの時は飛にああでも言わない限り取り留めが着かなかっただろう...」

一向に表情が緩まない憲和に気付いた玄徳は一旦、声を発するのを止め、顔色を正し改めて話す。

「確かに会った事も無い雲長を利害も無く説き伏せる自信は全く無いが、ならば飛と同じ様に義兵へ誘えば良い。雲長が余所者だか何だか知らないが、飛等が恐れる程の豪侠だ。間違い無く我等の義兵として力を奮うだろう」

目を伏せ熟考する憲和は暫しの沈黙の後、顔を挙げ言う。

「善いだろう。飛の所で交渉した様にやってみよう。但し雲長が在宅であればだが...」

そう言い門に手を掛けようとした時、左に気配を感じ二人は共に振り向く。視界に袴褶を着て帯刀し赤幘を被る、立派な鬚髯(ひげ)を蓄えた男を捉えた直後に、その顔の口は開かれる。

「愚(わし)の宅に何か用か。互いに長い間、話していた様だが」

よく見ると、その男は二十代程度で、屈強な体を有していた。そして馴染みの無い語句や発音が聞き覚えのある懐かしい訛りであり、相手が余所者だと先ず知った。そのため、それが關雲長だと玄徳は直感する。明らかに自身が雄弁に語っていた姿を見られ、飛の時の様に寡黙かつ無表情に振る舞えないと悟った玄徳は率先して交渉する覚悟をする。

「足下は關雲長だな」

姓字を告げると少し驚きの色を見せる。

「然。綬を帯びていないが、佩玉帯刀し一梁進賢冠を戴き官吏の姿をした卿は何者だ」

玄德の方を向き雲長は尋ねた。

「我は劉玄德だ。この涿郡を蹂躪する張角の残党を討伐するため、義兵を挙げようと考えている」

一呼吸置き雲長は言う。

「張角の残党とは黄巾賊の意味だな。郡縣に頼らず、それに義に従った兵卒で戦うとは殊勝な考えだ」

意外にも雲長は義兵について前向きな評価を下した。また、玄德の知らない語句にまで言及したため、只の豪侠では無いと一目置き、それを確かめるかの様に質問を選び出す。

「足下は何故、張角の残党を『黄巾賊』と呼ぶんだ」

「一度、張角の賊やその残党に会えばその名称に合点が行くだろう。奴等は皆、頭に黄色の巾を被り襲ってくる。そのため、『蛾賊』とも呼ばれている」

雲長によるその即答に、玄德は飛等の若い豪侠に無い知性と経験を感じていた。

「足下のその知識は我等の義兵に是非とも欲しい所だ...」

その玄德の声を遮るかの様に、雲長が声を出す。

「まさかその義兵に愚が加われと言うのではないだろうな」

呆れた様子を見せた雲長に、後から憲和が食い付く。

「然。足下の武名はここ涿縣まで轟いている。是非、吾等に力を貸して欲しい」

明確に雲長は眉を顰める。

「愚が他の地から来ているのは知っているようだが、一度も武名を挙げた覚えは無い。それだけで一喝し足下を追い返すのに十分な理由であろうが、ここは天下の往来だ。先ず愚の家へ入って貰おう。話はそれからだ」

野太い声が良く玄德の耳の内では響いていた。雲長は門を開け大股で中へ進む。二人は中へ入り、門を閉め後を追う。初めに躓いた事は明らかであり、この後、とても説得する自信を持たずに、返って怒鳴られるか長い説諭を受けるかと玄德の不安で満たされる。

一つの堂へ通され、雲長は右の階から昇り、二人は左の階から昇り、堂上で互いに拝した。雲長に勧められ、堂上の左側に敷かれた席へ奥に玄德、前に憲和が座る。先ず雲長は即座に尋ねる。

「足下を愚の所へ寄越した者は誰か」

雲長の質問は的の外れたものだったが、核心に迫ろうとする気概を玄德は感じ、小細工せずに本音を以て当たれば説得できると思い始める。

「ここへ来たのは誰かの指図を受けた訳では無い。だが張飛の一派を義兵に引き入れようとした際に、足下の噂を聞いた。義兵に加われれば足下が涿縣で幅を利かせるからと言って飛から加入を拒否された。そのため、義兵を挙げても足下が動かない様に誓わせると、飛に約束した。だが、もはやそんなのを足下に誓わせようとは思っていない」

玄德が言い終えても、雲長は真っ直ぐ見返したまま沈黙を保っていた。やがて慎重に選び出す

かの様に語句を紡ぐ。

「愚は張飛の一派から敵視されている。元々は、一度、飛の配下から因縁を付けられ争いに為り、配下を打ち負かした事が有り、それ以来、度々、威嚇される様に為った…」

雲長の顔に困惑と怒気が表れ、直後、話すのを止め、俯き溜息を吐く。面を挙げ再び言い出す。

「しかし足下にその様な戯れ言を吐いていたのか。異郷で武威を奮うとは、愚にそんな趣向は無い。他人を己の尺でしか測れないとは、全く困った小豎だ」

憲和が口を挟む。

「その様に考えているのなら、飛の下へご足労願えぬか」

唐突な願い出に、玄德は慌てて憲和に向かって声を出す。

「これは我と飛の問題だ。これ以上、迷惑を掛けてはならない」

その直後、言い返そうとする憲和とは別の所から声が飛んでくる。

「善いだろう。飛の所まで行こう…」

声の主は雲長だった。

「…但し、別に飛の前で不動を誓う訳では無い。以前より飛の一派と決着したいと思っていた…」

その声を遮るように憲和は言を発する。

「ご足労は有り難いが、争い事は困る。吾等の信用が無くなる。そう為れば義兵を集えない」

雲長は憲和に怪訝な顔を向ける。

「先程も申した様にこの地で武威を奮う気は無いし、飛と争う気も無い。義兵が言及されたついでに申すが、愚もこの地に来た時より、黄巾賊が頻出する治安の悪さを気に掛けていた。それを放置する太守や縣令に怒りを覚えたが、結局、割を喰うのはいつも庶民だ。愚はそれを看過する事はできずに居たため、今が好機だと捉えている。是非、義兵に加わりたく存じる」

憲和は咄嗟に声を挙げる。

「今、何と言った」

一呼吸置いて雲長は答える。

「愚が義兵に入るには力不足か」

玄德は首を左右に振り、喜びを顔に表す。

「とんでも無い。飛の一派を打ち負かす程の足下が義兵に加わると為れば、とても心強い。喜んで迎え入れる」

間髪入れず憲和は言う。

「決まりだ。では早速で悪いが、目下の課題に当たろうではないか。飛が納得しない限り賊と戦えない」

玄德も雲長も「諾(よし)」と応じ、三人は共に立ち上がる。それぞれ堂から降り、憲和が先導する形で歩き出す。

その背を追いながら玄德は右に横に気配を感じつつ、この雲長を信じ飛との交渉を託して良いものなのか思案していた。

節五

依然、日が高い位置にある頃に戻って来られたと劉玄徳は門前で一息付く。

「ではこれより踏み込むぞ。各々、覚悟はできているか」

先頭に立つ簡憲和の呼び掛けに後の二人は「諾(よし)」と応じる。前回、張飛の家宅に訪れた際は事前に綿密な計画を立てていたが、今回に至っては雲長だけを頼りとして飛に当たるのみだと言う事実に、玄徳は一抹の不安を感じる。

三人の足取りは着実に飛の所へと向かう。最後の門を開けると、前回と同じく各人が堂上で足を投げ出し座る光景だった。しかし、前回と大きく異なり、入ってきた三人に対し各人が強い関心を示していた。近づくに連れ、それらは三人全員に向けられたのではなく、關雲長だけに向けられていると玄徳は知る。

左の階から三人は昇り、それに合わせたように飛の一団は堂の右へ動く。堂上の左側で縦に敷かれた席に、奥から玄徳、雲長、憲和と膝を曲げ腰を自らの踵や足の裏に乗せ礼儀に則し座る。玄徳が口火を切る。

「約束通り、關雲長を連れて来た」

飛は眉を顰める。

「まさか一時も経たぬ内に關雲長を連れて来るとは驚いた。だが、それに加え、これから先、雲長が涿縣で下手な動きをしないと誓わせると足下は身(わし)に約束した筈だ」

まるで恫喝するかのよう荒々しく言った。努めて冷静に装いつつも玄徳は怯える気持ちを抑えつつ言い返そうとした矢先、雲長が発言する。

「漸く我と相對するに至ったか。我はここへ誓いを立てに来た訳では無い...」

雲長より発せられた低く重い声は辺りを響かせていた。飛の顔はより厳しく為り、雲長の言動を見守る。

「...一昨年に張角率いる黄巾賊は六州を席卷したがその多くは官軍に討伐され張角も死んだ。だが、依然、黄巾賊は健在で、それどころか活動を八州に拡げ、天下を脅かしている。この涿郡もその例外では無く、將に今、その脅威に曝されている...」

声に乗せ発せられた内容が飛にとって意外だった様で、顔の陰しさが若干、緩んだ事を玄徳は見逃さなかった。そして否応なく雲長が語気を荒らげている

「...それなのに爾(なんじ)は何だ。こんな天下の片隅の涿縣で自らの面目ばかりを気にし、意地を張るだけの毎日だ。縣城の周辺で民が黄巾賊に略奪される光景を目にしなかったのか。それを眼前にすれば、どうにかして助けよう安んじようとするのが侠と言うものだ」

雲長は内なる憤りを隠そうとはしなかった。既に怒鳴り声となった響きが辺りを満たす。その矛先はまるで己に向けられていると玄徳は感じ密かに胸を痛めていた。

飛の顔は激昂のためか見る見る内に赤らめている。ところが投げ出された両足が腰の下で折り畳まれ、やがて飛は口ごもりながらも声を出す。

「關卿の仰る旨は尤もだ。身のこれまでの行いは誤っていた...」

眉根を寄せた飛から当人以外の誰もが予想しなかったであろう発言が出された。堂上の誰もが

そうであるように玄德は飛からの次の発言について固唾を呑んで待つ。

「...実は卿の事を以前より知っていた。卿は司隸の河東郡の出身で、その地にて横領で百姓を虐げる官吏を懲らしめ、その後、逆恨みで追われ、この涿郡へ亡命したと聞いた。それ以来、密かにその侠気に憧れ尊敬してた。だけど、卿から罰を受けた配下の手前、尊敬している事を見せたくなかった。今、卿から恐れ多くも身の事を知った上で直にお叱りを受けた。なので今なら勇気を以て言える。どうか身と共に義兵へ加わって下さい。その隊で身は卿に仕えたい」

その声の主は追い詰められた様子を有り有りを見せていたが、それ以上に誠実に懇願する思いを示していた。雲長は注がれる眼差しから逸らさず真摯に見返す。

「爾が言う私のこれまでの行いは大まかには合っている。細かくは官吏の不正を上訴し、逆恨みで追われる立場になった。その頃から今まで相手が誰であろうと義を決して曲げようとは思わない。爾が義兵に加わり共に戦うのであれば、今までの唾み合いを水に流してやろう。だが、再び涿縣で意地を張るだけの日常に戻るならば、私の名に懸けてもこの縣城を二度と歩けない様にしてやる」

雲長が言い終わると飛は空かさず立ち上がり跪き頭を腰の高さまで下げ、承知したと言う意味で拝礼した。

目の前で余りに早い展開のため、自らは手を拱いているだけだと玄德は焦りを感じ始める。

「ではこの堂上に居並ぶ者は劉卿の義兵に加わったとして善いのだな」

そう声を出したのは憲和だった。まるで玄德の心を見透かした様な言動だった。

「然」

真っ先に承認の声を挙げたのは雲長だった。言うや否や立ち上がり玄德等と飛等の中央に出て、飛の方を向き一喝する。

「劉卿の前で箕踞するとは無礼だ。正しく座るのだ」

飛側の男等は飛び跳ねる様に立ち上がり、投げ出した両足を折り曲げ、跪き腰の下に踵を敷き正しく座った。それを認めた後、雲長は堂の奥へと歩き出し、右奥に畳んであった席を両手で持ち上げ、中央の奥へ丁寧にそれを敷く。中腰から立ち上がり玄德の方を向く。

「我等の主の席はここだ。配下に目が行き届く位置でないといけない。どうかここへ」

雲長の導きのまま、玄德は立ち上がり落ち着いて礼に則り小股で歩を進め、その席に座す。入れ替わるように雲長は元居た席へ戻っている。玄德はその背を見つつ、今は己を立ててくれているから良いが、先程の飛の配下を一喝で統率した光景を目の当たりにすると、実の所、自分が居なくても、雲長だけで義兵は巧く動くのではないかと疑念を持ち、内心、危機感を抱く。

気付くと、左右の者全てが玄德に熱い眼差しを注いでいる。そこで漸く何か発言するよう暗黙の内に迫られていると気付く。詰まりそうになる喉から辺りに気付かれぬよう静かに息を吐いてから発言する。

「未だ武器も防具も充分に無いため.....実際に黄巾賊を討伐するのは先になりそうだ。しかし、ここに居並ぶ面々は...何れも腕に覚えの有る者で、こうして一堂に揃うの自体が偉大なる一歩だ。この涿縣は元より幽州からも黄巾賊が一掃されるのは時間の問題だろう」

初めは語句を詰まらせながらも、次第に声に熱を込めてきた玄德が言い終えた後、奇妙な沈黙

の間が起きた。だが、それは飛の一派だった者等の歓声によって撃ち破られる。それが収まった後、空かさず憲和が声を挙げる。

「早速だが、これからの日程を詰めていく」

そう言って懐から筆や硯、版と呼ばれる一尺の木簡を出した。元々は飛の一派を義兵に入る承諾を得た後に、賊討伐の段取りに使う予定だったのだろうと玄德は納得する。

一同、「然」と返事し、その後、雲長が発言する。

「先ず武器や兵糧を含め出兵に必要な物資を挙げていこう。この隊は郡縣の後ろ盾が無いため、調達も我等が行わなければならない。勿論、その方法は合法的にだ。縣で寄付を募っても良い。諸君には劉卿の義兵だと言う自覚を以て行動して欲しい...」

雲長は熱心に皆へ語り掛けていた。その様子を見て玄德は思い始める。雲長がこれ程に力を入れるのは、義兵で黄巾賊を討伐し治安を回復させようと躍起に為る我に賭けているのだ、と。義を貫いた結果とは言え、故郷を追われこの涿縣に辿り着き、豪侠として生きていかざるを得ない状況で、将に自らを賭けられる対象と見なし飛び付いたのだ、と。それは玄德にとって非常な喜びであった。そう感じるのと同時に、その大きな期待に応えられるのか、と言った重圧も感じていた。

この堂上の者等に何の実績も名声も無いが、何時の日か涿縣や涿郡どころか幽州一帯で知られる様にしてやる、と玄德は内心で自身を奮い立たせていた。

真南から陽射しが降り注ぐ中、唐蝸(せみ)の音が耳に飛び込んできて、初めの義兵が集った日から随分、過ぎたと想起した。

五台の荷車をそれぞれ牽引する人馬五組みを乗馬で先導し、劉玄德は平野を駆けている。門下生だった際、娯楽としての狩りで嗜んだ馬術がこんな時に役立つのかと隔世の感を抱いている。

やがて左手の方の空で僅かに上がる砂埃に気付く。それが黄巾賊であり予定通りだとは雖も、玄德の胸は高鳴る。段々と内からの音より地を蹴る複数の馬脚の音が大きく為る。その音が飛んで来る方角へ目を遣ると、十頭程度の馬の一群と各馬に乗る者の一団が居る。關雲長から聞いた通り、その一団は各々、種々の武器を持ちまるで統一感が無いが、頭には全員が黄色の巾を被り、その異様な様子に背筋に冷たい物を感じていた。

玄德には後で荷車を引く人馬の速さに合わせる必要が有るため、直ぐに黄巾を被る一団に追い付かれ、進行方向を防がれ、荷車共々、止まらざるを得なかった。玄德の前を何度も馬で横切りながら、賊は皆、馬上で武器を構えこちらを威嚇する。武器は腰に帯びる刀のみで、兜鍪(かぶと)どころか鎧も付けず赤幘を被り袴褶を着る玄德は後続を置いて逃げざるを得ない。只、馬首を返しその場を離れるのに懸命だった。

荷車が目当ての乗馬の賊を容易に振り切り、玄德は右手へ逃走する。離れた安全な所から荷車の方へ振り返ると、そこへ走り寄る新たな賊が数十人に自らの足で走り寄っている。やはり馬と歩の二段重ねの襲撃だったかと認める。

玄德が真っ直ぐに向かった先は半里も無い所の林だった。到達する前にそこから見慣れた集団が向かい出る。種々の武器に種々の甲を付け、黄巾を身に着けない分、賊より統一感の希薄さが目立つ。その先頭には張飛が居て、力の限り前へ走っており、それを後続が振り切られまいと必死に着き走る。前進の意味で数人が走りながら鼓を叩き音を出し続ける。七十人程挟んだ最後尾に漸く簡憲和の姿が認められる。そこまで到達すると玄德は馬首を翻し、並進する。一団の行く先は荷車に群がる黄巾賊だ。

黄巾賊は荷車に手を掛けず、馬の操者を威嚇している状況だった。鼓の音が賊の所へ届く頃、荷車の屋下の幕が内側から外され、十人以上の男が外へ飛び出す。その先頭に關雲長が居て気迫の込められた声を挙げ、より効果的に賊を動揺させる。丁度、張飛等が荷車の所へ到達したため、内と外から賊を挟撃する形と為る。それを外側の馬上から眺め、玄德は極度の緊張の中、数でも作戦でも優る自隊の勝利を確信し、腹の奥から叫ぶ。

「進め」

この作戦の着想は軍資が揃った頃、先ず憲和から発せられた。大軍では縣城を攻め落とすと言った大胆な行動を起こす黄巾賊だが、涿縣周辺に居る様な少数では非常に強い警戒心を抱くと知られていた。また、食うに困る豪侠の多くは黄巾賊に身を賭し易く、飛の配下等の中には旧知の者も居て、噂が通り易い。そのため、憲和は飛の配下を通じ、護衛の居ない輸送が涿縣内を通ると言う噂を流した。そうして周辺の黄巾賊を誘き出すのを狙い、憲和や飛が率いる本隊を先回りさせ林に隠れさせ、荷車に財物では無く雲長を将とした兵卒の一団を乗せ、馬に乗る玄德が先導

し涿城を発した。その作戦が今、最高潮を迎えようとしており、玄德の心の臓は高鳴る。

荷車を検分しようと馬から降りていた賊は誰も戻らず、そのまま戦いに向かう。五十人程度の賊は雲長等十数人を包囲して居るが、来襲する憲和等の本隊に気を取られ浮き足立ち、殆どの者はどちらの側に向かい戦うか決め切れてない。対する玄德の隊は、陣形が整えられずその訓練も為されていなかったが、作戦により惟、目の前の敵を倒す状況に在り、迷う事無く個々の力を奮える利に在った。

遂に飛が手に持つ戈と呼ばれる長い柄の武器を振りかぶり戦いに突入する。順次、後続が敵を正面に据える様、横に動き、結果として縦の列が横に広がる陣形と為る。それに呼応するかの様に荷車を背に雲長等内側の自卒が攻撃を始める。辺りは怒号と悲鳴で満たされる。

乗馬する玄德は飛とは逆方面に敵の背後を突こうと左から回り込む。腰から刀を抜き馬上から敵を見据えると、殆どの者が飛や雲長側の兵卒に気を取られ、こちらへ一瞥もくれない。

「やっ」

掛け声と共に馬上から一人の敵卒の首筋を斬り付けた。喉から出る嗚咽の如く声を挙げその場に崩れ落ちる。両隣の者がそれに気付いたが、危険が迫ると判る前に玄德の刀の餌食になり、地に倒れる。その様に繰り返し一人一人斬り付け僅かながら黄巾賊討伐に貢献する。

ふと遠くまで周辺を見渡すと、玄德の目に黄色の中の殆どが地に伏す光景が映った。戦闘が終わった事を告げる様に、鐸の金属音が周辺へ響く。やがてその音に歓喜の音が混じる様になり、そこで漸く玄德は戦いが勝利に終わったと覚る。

興奮冷めやらず、玄德はそれを叫び声として吐き出し、皆と同じ様に大いなる喜びを周りに表していた。

節七

遅い朝日が覗かせる中、白い息を吐きながら涿城内の大街を劉玄徳は簡憲和と並んで歩いていた。

玄徳は依然、一梁進賢冠を戴き単衣を着て袍を重ね佩玉帯刀し、憲和は赤幘を被り袴褶を着る。しかし、二人は以前には無い自信を身に着けている様だった。

一人の袴褶を着た門卒が待機する大きい南門の前で立ち止まる。その門卒が二人に歩み寄り用件を尋ねたため、玄徳は謁と呼ばれる、差し出す相手と自らの紹介が書かれた木簡を差し出す。そうすると門卒はその場で拝した後、待つ様に告げ門内へと入って行く。

暫く経つと入れ替わりに別の単衣の上に袍を着た若い者が現れ、右手の上に左手を重ね胸から首の間に持っていき、立ったまま腰を曲げ頭を下げる動作、つまり肅礼を行い、二人を門の中へと招く。それに応じ二人は招いた者を右に並進し廊を歩き幾つかの門を過ぎ奥へと進む。玄徳に玉声が伴う。

四つ目の門を潜った後、広い堂の前の中庭へと出る。堂上の北東、北西、南東、南西の四方に燭では無く煌々と焚かれる苜が有り、玄徳の眼には異様な光景に映っていた。ふと右の憲和を見ると啞然とした顔を見せていた。気を取り直し真ん中へ目を遣ると、既に右手東側へ主人とその付き添いとなる僕者五人が同じ席に並んで座る。そのため率先し中庭を横切り玉声と共に堂に近付き、西階で共に履を脱ぎ礼に則り、来た事を示すため、声を挙げながら玄徳、憲和と順に堂へ昇る。

堂へ昇ると南西の苜からの熱気が伝わって来る。そこで漸く玄徳は贅沢にも苜を焚いている理由を知る。つまり冬の寒気を打ち消すためだ。その後に潜む財力を感じつつ、堂の中央へ進み出て、共に東席の南端に座る主人へ拝する。そうすると、主人は答拝し、西側の席へ座る様に勧め、二人はそれに応じ、北に玄徳、南に憲和が座る。それを認めて主人から話し掛ける。

「愚は南西の隣郡の中山國から来た商人の張世平です。愚の涿縣に在る邸宅までのご足労を有り難く存じます」

温和な表情を絶やさぬ肥えた初老の男は穏やかに告げた。玄徳は神妙な面持ちで言う。

「こちらから持ち込んだ商談ですので、労力は惜しみません。それに張卿の様な大商と商談ができて光栄です」

「勿体無いご発言です。卿のお気に召す物が見つければ幸いです」

掴み所が無い者だと内心、やや警戒しつつ、玄徳は話を切り出す。

「ご存知では無いでしょうが、僕は劉玄徳と申します。涿郡の治安が黄巾賊に脅かす現状を憂い、義兵を挙げここ半年間、兵卒を率い賊討伐や行旅の護衛に勤しみました。その間、賛同者が多く出てきており、有り難い事に、義兵に加わる者や軍資や兵糧を提供してくれる者が現れ、十数人から始まった隊も今や二百人程度まで増えました。ところが質の面で未だ黄巾賊に及びません。そこでこれから先、徐々に騎卒の割合を増やしていき、馬の機動力を活かし戦いを有利に進めたく存じています。そこで、まだ纏まった数を購入できませんが、これから先、軍馬の入手に卿のお世話に為りたいと存じます」

「僕」と言う謙称で自らを呼びつつ所存を口にすると、張世平と呼ばれる男は適時、相づちを打っていた。大した間も空けず発言が来る。

「卿によるご活躍の名声は中山國まで届いております。そして卿がその中山國の靖王の流れを汲むお方であるのも存じています...」

そう言った後、世平の眼光が鋭くなった様を感じ玄徳は背筋を冷やした。世平は発言を続ける。

「...先ず明確にさせたい事が有ります。愚は確かにこの縣城に馬を売りに来ましたが、だからと言って馬数十頭程度で商談の席に着いた訳では有りません。先ずこれを見て下さい。話はそれからです」

世平が右に合図を送ると、僎者全員が立ち上がり順に奥へ姿を消し、再び現れると皆、手に袋を持っている。僎者は順番に東西の席の間に袋を置き、中が見える様に袋の口を一斉に下へ降ろす。

そこには沢山の黄金が在った。依然、東の方角に在った日の光より黄金を通じ玄徳の顔が照らされる。

世平は緩やかな表情を保ったまま告げる。

「ここに千金が在ります。卿が涿縣だけで無く郡全体からの黄巾賊の一掃に動いて下さるのならば、これを全て差し上げても良いぐらいです。何故ならば一昨年に蜂起した黄巾賊により、愚が持つ商隊は百回近くも略奪に遭い、その被害により何度も廃業に追い込まれかけた程です。それが無くなるのであればこの程度の金は安いぐらいでしょう。どうかお納めになってください。そこから軍馬を含めた軍資を購入する金銭を出せば宜しいでしょう」

玄徳は唯、困惑するだけだったが、憲和は早速、発言する。

「これは非常に助かります。これを義金として活用し、黄巾賊の一掃に努め、必ず涿郡から賊の姿を消し去ります」

その興奮し尽くした声による宣言に、世平は満足げに頷いた。しかし、玄徳はこの会談の場で世平が始めから有利な立場に在る状況に気付き、それに違和感を抱き出す。そして、この千金を受け取る事で、それが弱みと為り、一生、世平の護衛として扱き使われるだけに為るのではないかと言う懸念を抱く。

「待って下さい。折角ですが僕はその千金を受け取る気は有りません」

玄徳は強く言い放った。右隣の憲和も向かいの僎者も皆、驚きと共に視線を注ぐ。ただ世平だけが一呼吸遅れて疑念の眼差しを向ける。

「何故でしょうか。若い内は己の権勢を認めさせたいが為に無意味な意地を張りたいのでしょうか、それで取り返しの付かない結果に為るのですぞ。今の発言は聞かなかった事にしますので、深呼吸してからもう一度、答えて下さい」

まるで世平は自らの孫に諭すような口調で説いた。それでも玄徳は怯まない。

「今でこそ兵卒を率い治安維持に尽力していますが、今年の春まで僕は市で履を売っていました。そのため多くの商人を見てきました。どの方も旨味の有る話や甘い発言を良くしますが、実の所、どの方も隙あれば相手から利益を貪ってやろうと言う下心が潜んでいました。並みの商人

でもそうならば、失礼ですが、卿の様な中山國の著名な大商相手であれば、もし千金を受け取ったら最後、言いくるめられ、名ばかりの義兵と為り死ぬまで卿の衛卒として仕えるだけに為ってしまう気がします。だとすれば、千金は安すぎます。それに僕は涿郡や中山國だけに留まる気は有りません。黄巾賊はその二郡だけで無く今や八州に蔓延っています。略奪を受ける者が居ればどこであろうと討伐しに行く気概に在ります」

玄德の声に熱が込められていた。それは自らが信じる所を堂上に居る者全てに伝えたいと強く願うと、自然とそう為っていた。

世平の表情は一瞬、非常に厳しくなり、突如、張り詰めた物が切れた様に声を発して笑い出す。それが収まる頃、打ち明ける。

「愚は卿をととても気に入りました。義だけを見て行動する無垢な男では無く、何より裏側をも洞察する知性も備えて居られます…」

掌を返したかの様な世平の発言に玄德は内なる緊張が解れる心地だった。そんな思いを知ってか、より腹を割った話を進める。

「…正直に申せば、義兵を挙げて黄巾賊を討伐するだなんて甘い事を言う者なんて、こちらからすれば、利用しない手は無いと存じました。しかしながら、卿の所存を聴き考えを改めました。愚からは千金を渡すなど申しません。誠意を示すため、軍馬なり甲なり兵糧なり、きっちりとした軍資の形でお渡しします。そして愚からは涿郡や中山國に留まれとは申しません。卿が意義が有ると信じる所へ遠征へ赴いて下さい。そうすれば結果的に商売を拓げる好機と成り得ます」

聴き終えるや否や玄德は立ち上がり、跪き頭を下げる。つまり承諾したと言う意味を込め拝礼を示す。それを目の当たりにして恐縮してか、世平も立ち上がり答拝する。座り直した頃、温和な顔のまま言う。

「愚だけでは軍資の後援として心もとないでしょうから、同じく中山國からの行商である蘇雙に声を掛けておきます。今、丁度、涿城に來ていると存じますので」

玄德の記憶に依ると、「蘇雙」は世平と並び称される程の中山國の大商であったため、喜びに奮える心地だった。しかし、だとすれば蘇雙は世平の商売敵であり、その相手に世平は頭を下げようとしている事に玄德は気付く。

「恐縮です。非常に助かります。どうか無理のない範囲でお願いします」

玄德にはその短い発言でしか気遣いを示せずに居た。しかし、まるで世平はそれを察したかの様に笑みを見せ何度も肯いている。その暖かい雰囲気冷ます如くに、右から憲和が一巻きの木簡を翳す。

「では早速ですが、ここに必要な軍資が書かれています。何時頃までにご都合が付くでしょうか」

発言の性急さに思わず玄德は憲和の方へ振り向いた。その直後、世平が嫌な顔をしていないか心配に為り、正面へ向き直る。その視線の先には穏やかな表情に一つも崩れた様子が無かった。

「詳しく照合してみないと判りませんが、ここ涿縣には愚の倉や困があり、大抵の物で有れば揃います。仮に無いとしても中山國から一日でも早く取り寄せる様に手配しましょう」

その返事に憲和は満面の笑みを浮かべ無邪気に喜びを示した。話の切り出し方の間の悪さに玄

徳は内心、呆れ返っていたが、その目的を見失わない性格が在ったからこそ、ここまで辿り着けたんだと思い直す。

やがて両者の間に在った千金は来た時と同じように、僕者によって片付けられる。

すっかり高くなった日から射し込まれ光が堂上を照らし、菅からの光を飲み込むようだった。

中空から弱く射し込む陽光を少しでも浴びようと堂の成る可く南の方で、劉玄德は着席していた。しかし地からの冷気が強く、一梁進賢冠の下にもう一つ黒幘を被り、単衣と袍の上からさらに袍を重ねたい衝動に駆られていた。

そんな折り、玄德が呼び出した者等が中庭を挟んだ門閤から次々と現れ、中庭を大股で歩き東階から順に堂へ昇り拝し、北面する席へ座る。

召還した総勢十人全員が揃った所を見計らってから玄德は切り出す。

「皆に集まって貰ったのは他でもない。烏桓族の叛乱についてだ。この涿郡に北東に隣接する廣陽郡で生じた叛乱だと聞く」

それを受けて堂上は一斉に騒々しく為った。

「烏桓族と言うと、北塞の外に居る異族の烏桓か」

真っ先に尋ねたのは最年少の張飛だった。口にした「北塞」は幽州の北の境界に在って、異族の侵入を防ぐ壁を指していた。

「益徳よ、その通りだ。本来は我等漢人が住む地には居ないが、或る理由で烏桓の騎卒が幽州廣陽郡に移った際に叛乱を起こしたそうだ」

「益徳」は張飛の字(あざな)であり、今年の初めに加冠した結果、付けられた。また玄德等は自らの族を「漢人」と称しており、それは國号の「漢」から来ていた。玄德が口にした語句の中で簡憲和は「或る理由」に食い付く。

「烏桓の叛乱については商旅から聞いていた。だが、理由についてはさっぱり伝わって来ない。どう言う経緯なんだ」

玄德は長く息を吐く。

「我も叛乱を知ってから状況を掴めないで居た。だが、或る書簡が届き、全容を知り得た」

そう言って玄德は足元に置いて居た書簡を拾い皆に見える様に掲げた。次に關雲長が質問を投げける。

「一体、誰からなのか。張世平や蘇雙程の大商でも叛乱の全容を掴み切れるとは思えない」

欲しい疑問が来たと思ひ玄德は思わず僅かな笑みを零し、雲長の方を向いて答える。

「騎都尉の公孫伯圭と言う者からの書簡だ。騎都尉と言う官職は陛下直属の羽林騎を監督する官職だ」

普段から立派な鬚髯(ひげ)に隠れ表情の見え難い雲長の目元に、驚きの表れを玄德は見て取る。

「それならば、全容を掴んでも可笑しくないが、何故、騎都尉が卿の所へ書簡を送るのか」

隠しもせず強い関心が雲長から返って来た。またも玄德は微かな笑みを見せる。

「公孫伯圭は我が師の下で勉学に勤しんだ際、兄事した人物だ。皆の知っての通り我は官吏の道に進まなかった。そのため、同じ門生と連絡を取るのを遠慮して疎遠に為っていたが、そんな我に公孫卿は書簡を送って下さった」

「門生」と口にすると、当時の向上心溢れる思いが蘇ってくる様で、今の殺伐とした日常が玄德にとって惨めに思っていた。

「そこに叛乱について詳しく書かれてあると言うのだな」

合いの手を入れる憲和に、玄德は複雑な思いを振り払うかの様に声調を勢いづかせる。

「然。そもその原因は黄巾賊だ。六州で黄巾賊が反乱を起こしたため、三年前より内郡から塞が在る辺郡への騎士、戍卒、車父等の派遣ができなくなった。だから辺郡での防備が甘くなり、遂に三年前の冬に西北の辺郡を抱える涼州で、恭順していた羌族が叛乱を起こした。京師より鎮圧の為の軍が派遣され、それに戦力として加えようと、一昨年、官軍は東北の異族である烏桓族を徴兵した。ところがその対価となる牢稟が支払われず、一部の烏桓が勝手に帰還したと言う事件が生じた…」

食い付く様な瞳を見せ、興奮した様子で張益徳が口を挟む。

「その恨みでそのまま烏桓が叛乱したって訳か」

玄德は片方の口の端を挙げる。

「それ程、事態は単純では無い。前の太山太守だった張舉と前の中山相である張純がそれに付け込んで烏桓を扇動したようだ。当然だが、張舉も張純も漢人だ…」

思わず玄德は発声を止めた。「太守」は一郡を治める官職であり、「相」はその國の王に代わり一國を治める官職であった。玄德が生涯を懸けてでも辿り着こうとする官職の経験者が治安を乱しており、しかもその相の任地は玄德の宗族の起源となる地だった、その事実に玄德は愕然としていた。一呼吸置き、気を取り直し報告を再開する。

「張舉は皇帝を僭称し名目上の領袖であり、実際は張純が彌天將軍安定王と自号し烏桓から成る軍を取り仕切っていると言う。今年の夏、先ず標的に為ったのが隣郡の廣陽郡に於ける薊城だ。知っている者も居るだろうが、その城内には廣陽郡の郡府と幽州の州府が在る重要拠点だ。だから襲撃したのだろうが、張純により陥落されてしまった。だが張純はそこに駐屯せず、東へ進寇したそうだ」

玄德は一呼吸置いて、皆の反応を待った。それに先ず応じたのが憲和だ。

「その追撃への協力が公孫騎都からの要望なのか」

率直な疑問に対し、玄德は肯定せずに言う。

「そう単純では無いのが公孫卿と我との微妙の関係を反映している。それを説明する前に言わなければならない張純の動きがある。張純は東に進み、丘力居、蘇僕延と言った烏桓の渠師に協力を仰ぎ、今、大軍で南へ進寇している。その行き先は冀州勃海郡だと考えられている」

玄德の発言で一斉に考え込む如く目を伏せる。ただ益徳だけは事情が飲み込めず左右を見ている。

「それはどう言う事だ」

周りとの理解の差に焦りを露わにして質問を投げた。雲長が横を向き答える。

「冀州の勃海郡はここより南東に在る地、つまり北塞から見て漢人の領土のより内側への進寇を許した結果と為る」

それを受け漸く益徳は考え込んだ。雲長は玄德の方を向き直り尋ねる。

「では公孫卿はどう言った要望をしたのか」

間を置かず答える。

「公孫卿は我だけで無く、同じ師の門下で知っている限りの者へ同じ内容の書簡を送った。それは既に官吏である者には張純の進寇軍と戦う討伐軍を出す、あるいはその軍に軍資を供給する等、協力を促し、未だ仕官していない者には何らかの形で仕官し討伐軍に協力する様に促す要望だった」

雲長は顔を紅潮させ応じる。

「では卿に先ず仕官しろと公孫卿は言いたいのか」

その様子に玄徳は雲長が持つ官吏への反抗心を感じ取っていた。官吏により故郷を追われ、亡命先の地では官吏の至らなさに治安が悪化すると言った経緯があり、官吏に対し雲長が良い感情を抱いていないのだろうと思出す。だとすれば、未だ伝えていない報告は雲長の気を逆撫するのに充分だと判り玄徳は密かに気を重くしている。

「仕官が目的と言う訳では無いのだろう。飽くまでも張純による進寇を防ぐのが…」

玄徳の発言を防ぐかのように雲長は声を重ねる。

「仕官せずとも今の隊だけでも十分に進寇軍と戦えるだろうに」

極めて落ち着いた口調だが、そこには明らかに当てつける様な不快感が込められていた。玄徳は怯まず言い直す。

「義兵を挙げてからこれまでの一年半、我等は数多くの戦闘や護衛を経験してきたが、一向に治安が改善する兆しは未だ見えていない。我は州郡の官軍と連携する必要性を薄々、感じていた。そんな折りに来たのか公孫卿の書簡だ。張純の進寇やその討伐への協力の要望以外にも我等に縁の深い涿縣について書かれてある」

「涿縣」の語句を口にした刹那、堂上の全員の顔付きが陰しく為る。憲和が反射的に口を出す。

「まさか叛乱する烏桓が涿縣に攻めて来るのではないだろうな」

それを玄徳は先ず否定する。

「叛烏桓が塞外からより内側へ向かって攻めてくる以上、その可能性自体を否定しないが、そうでは無い…」

一旦、発言を切り、自らを落ち着かせるため、深く息を吸った後に再び話す。

「…実は公孫卿は数年前から今秋まで涿縣の縣令だった。同じ縣城内に居を構えていたが、まるで雲の上の官位であったため、その事実を知り得なかったようだ。しかもそれだけでは…」

またしても玄徳の発言を防ぐかのように雲長は声を重ねる。

「では涿縣で黄巾賊の略奪が横行する理由は、縣令だった公孫卿の所為なのか」

語気を荒らげる様に為っていた。それに流されず玄徳は冷静に努めようとする。

「公孫卿は一昨年より軍を率い黄巾賊討伐に従事していた。それは涿郡内に居る少数の黄巾賊ではなく、南西の冀州の常山國に在る本拠の一つへの遠征だ。知っての通り、常山國は中山國の南西に接している位置にあるから、涿縣での治安維持の両立は難しいだろう。その後、次の任務に就く前に、張純による叛乱が起こったと言った流れだ。問題は、その事実より我等の義兵がこの一年半もの間に討伐してきた黄巾賊は軍勢と言うより群盗の類であり、その根元では決して無かったと言う事実にある」

その事実を知らされ一同、啞然とし、黙する。しかし、雲長だけは静かな憤怒を滲ませた顔のまま、やがて沈黙を破る。

「だとしてもこの一年半の義兵が無駄だったとは思えない。現に涿縣で何百回と感謝の言を頂いた。今さら仕官し、引いては官軍に編入しても義兵としての動きが取れず本末転倒だろう」
顎を前へ突き出し、見下ろした眼差しを見せた。玄德は反論する。

「勿論、無駄とは言えない。我等義兵の戦い方の向上にも繋がっている。だからこそ涿縣や涿郡を越えて州を跨いだ軍事活動に移るべきだ。何故ならば黄巾賊や張純率いる叛烏桓が州郡を越えた進寇だからだ」

雲長は引き下がらない。

「身近な涿縣を守れずに州を跨いだ遠征なんて誤っている」

穏やかな声ながら、その迫力が周りを圧倒しているようだった。緊迫感の有る沈黙が横たわる。

「それならば…」

予想外の方から声が挙がり、皆、そちらへ顔を向けた。視線の先には憲和が居て、告げる。

「…全体として一つに決められないのであれば、二つに分ければ良い」

玄德は怪訝な表情を向けた。反対に雲長は眉間の力を緩ませ発言する。

「善いだろう。劉卿が別の隊で叛烏桓の討伐に向かうならば賛成しよう。但し、多く見積もっても涿縣の義兵から五十人の兵卒しか割けない。それでも宜しいか」

堂上での皆の視線が玄德に集まった。例え寡兵で官軍に合流したとしても、戦闘で活躍すれば名声を得られ昇進し、ある程度、官軍を動かす権限が与えられ、後からでも涿縣の義兵を迎え入れられるだろうと言う打算が瞬時に心で浮かぶ。

「諾(よし)。叛烏桓とそれと戦う官軍の動きが判らない以上、こちらも下手に動けない。だとすれば、こちらも全員を率いるのは危険であり、先ず五十人だけでも参戦するのは理に適っている…」

玄德は話しながら、突如、雲長の方に向く。

「…では、涿縣の本隊を關雲長に任せる。我と簡憲和は兵卒五十人を率い、冀州の勃海郡に進軍する」

そう告げると、堂上が一気に騒々しく為った。雲長からは鬚髯の無い所からでも満足した様子が伝わった。対照的に、憲和は顔を引きつらせている。玄德の視線を感じとってか口を開く。

「何故、吾が遠征に従軍するのか納得しかねたが、よく考えれば、吾以外に軍資の管理を行える者も居ないだろうし、何より吾が義兵を分ける案を言い出したのだから、同行しようではないか」

それを認め、玄德は号令を発する。

「これで決まりだ。異論は無いな」

確認の問い掛けに、十人の口から一斉に「唯(はい)」と返ってきた。徐に雲長が話し出す。

「これより遠征に参加する五十人を選び出そう。兵卒の間では切り離せば士気に影響する程の繋がりが有るだろうから、慎重に人選したい」

「諾(よし)」と玄德は返し、手元に筆、硯や版を引き寄せる。
心の片隅で一年半懸けて築き上げた義兵の先行きに不安を感じながら、硯で墨を磨っていた。

寒風は四方に張られた帳幔でしか防がれていないが、温めた酒が劉玄徳の内側から熱を与えていた。

玄徳の下に、顔を赤らめた簡憲和が近付いて来る。二人とも赤幘を被り袴褶を着て地に向かい合う様に敷いた席に座り楽にしている。

「こうして祖道で酒が飲めるのも汝の運が良いお陰だ。まさかこんな良い機会に官軍から誘いが有るとは思わなかった」

憲和の言う「祖道」は縣城の外で旅の安全を願う祭祀であり、送る側にも送られる側にも酒が振る舞われ談笑する場が設けられていた。

「これも皆が義兵として一年半も励んでくれたお陰だ。その名声が青州の平原國まで届いた。そこで幸運な事に、軍司馬の劉子平が叛烏桓に対抗するため士卒を募っていた。同じ劉姓であるともあってお声を掛けて下さるに至った。元々、陛下より青州が叛烏桓を討伐する様、詔書を承けての上の動きらしい。兎も角、義兵を派遣しようとしていた我等にとって名実が揃う好機だった」

玄徳は遠い目をして語った。それに笑みを浮かべ大きく肯き憲和は言う。

「然。劉司馬からの書簡が来なければ、何も知らず、叛烏桓に蹂躪された勃海郡へ進軍し無駄死にしていたらうな」

劉子平からの書簡は従軍要請のみならず進寇を受ける郡縣の生の声を届けていた。そこには騎卒中心の叛烏桓は冀州勃海郡を通り過ぎ青州平原國に進寇していると書かれていた。それを思い出し心の奥に閉まっていた焦りが引き起こされ、玄徳は酔いが醒めるような心地で居た。

「ちょっと良いか...」

憲和はそう呟き、立ち上がって玄徳の左に座った。余りにも近くに座ったため、玄徳はそちらへ振り向こうともせず、そのまま空席と為った方を眺めていた。その先には豪侠だった義兵等が群がっている。目を凝らすとその中心に關雲長と張益徳が並んで座っており、憲和以外誰も周りに居ない自分より雲長は人望が有る事実を玄徳は痛感する。

憲和は小声で話し出す。

「...今さらだが、何故、汝は吾を連れて行き雲長を置いて行く事にしたのか。吾が居なければ雲長を止める者は涿縣に居なくなる。率直に言えば、吾等が遠征に出ている間に、涿縣の義兵は雲長に乗っ取られるかもしれないんだぞ」

「益徳では雲長を抑えられぬか」

質問に答えずはぐらかすかのように玄徳は言った。

「前の集いを良く見ろ。真ん中には雲長と益徳が仲良く杯を交わしている。益徳は雲長を尊敬し兄事しているそうだ...」

「兄事」の語句だけに飛び付くかの様に玄徳は遮るように声を重ねる。

「益徳は度々、同じ文言で雲長を評していたな。確か『七石の重さの弩(いしゆみ)の弦を軽々引ける程の膂力だ』と。それだけで無くその半生にも惹かれていると言う前提が有るのだろうが、豪

侠にとって臂力の強さは大きな意味を持つのだろう」

玄徳の言う「弩」は、先ず足で弦の肩を抑え両手で弦を引き、銅製の器で弦を引いた状態を固定し、何時でも引き金を引き弦を解き矢を放てる武器である。その矢の強さや射程距離やは弩の弦の強さに比例し、「石」の重さで表現されていた。五石の重さは益徳でも引くのに手間取る程だったが、雲長は七石の重さの弦を軽々と引いたのだから、益徳だけで無く他の者も尊敬に留まらず心服する程に為っていた。憲和は肯き発言を再開する。

「それ程、益徳は雲長に心服している。だからもし雲長が義兵を独占する様な恐れる事態となれば抑えるどころか喜んで雲長に協力するだろう。今さら汝を責めても仕方がないが雲長を残した理由を知りたい」

玄徳の両眼に、遠くに在って人混みの陰で途切れ途切れだが、確実な二人の固い仲が映っていた。玄徳の心に、遠い日の盧子幹門下での公孫伯圭との日常が浮かんでいた。憲和の根気に負けたと思い、言う覚悟をする。

「惟、雲長に誠意を示したかった。雲長からの信頼を得られなければこの先、義兵を涿郡の外へも連れ出せない。それに我も雲長が口にする義やら侠やらを心のどこかで疑っていて、それを払拭したいため、裏切らないかどうかを試してみたかった。だから、汝が涿縣に居ては試せない」

憲和は溜め息に似た物を吐いてから話す。

「それは危険が大きすぎる。吾等大夫士と彼等豪侠とは根本で違い解り合えない仲なんだ。再び涿縣に還ってくると、義兵は汝の所属で無くなっているだろう」

玄徳は右の地に置いた杯を持ち上げ、中を空にする。

「そうなれば所詮、それまでの人物だったって事だ。一年半前に我は汝と誰も居ない所から始めたのだから、それに戻るだけって事だろう。それどころか義兵五十人近くも配下に残っている」

そう言って玄徳は穏やかに声を発して笑った。

後には少し離れた所から届く談笑による多くの声と緩急織り交ぜての冷たい風だけが二人の近くに残っていた。

叛烏桓を避けるため遠回りした所為も有り、十二月に入って漸く目的地の青州平原國に到達した。

劉玄德と簡憲和は軍司馬の劉子平率いる官軍と合流すべく袴褶を着て騎馬で義兵を先導し、國府の在る平原縣に向かった。そこで劉子平の行方を尋ねると、東南に接する濟南國で募兵の最中だと聞き、道沿いに南下する。

頃合いを見計らってか馬上の憲和から玄德は話し掛けられる。

「冀州の勃海郡は東に大海と接している。そのため、叛烏桓は西に進むか、南のこの青州平原國へ進むしかない。迎撃は青州になりそうだ。平原國の東は大海では無く半島が伸びており、その半島全体が青州と言える。だから、東の方へ兵を集めに行ったのだろう」

憲和の洞察に玄德は納得した。

半日も経たず夕方に、それらしい軍營に遭遇する。それは二人が今まで見た経験の無い程、大規模で、二つの心を高揚させるには充分だった。牙門に立つ衛卒に玄德は謁を差し出し、取り次いで貰うと、二頭の馬を繋ぎ木である にそれぞれ留め置き、奥の帷幕に案内される。

左から西日に照らされる帷幕の前には鎧を纏った四十代の小さい男が立っていた。肅礼の後、内へ導かれ、玄德と憲和はそれに従う。中は帷幕越しに夕照が染み込んでおり、二人が思うより明るい。招いた男は奥へ座り、対面し敷かれた席に座る様に指示が有る。玄德と憲和は先ず南面する男に拝すると、男は立ち上がり答肅する。座った直後に話し掛ける。

「吾が劉子平だ。遠路遙々ご苦勞であった。こちらは今、募兵し兵卒を集め終えた直後だ。叛烏桓と戦うため北上している。早速で悪いが、そちらの兵数を教えて頂きたい」

劉子平と称する姓字の男は涿郡では聞かないその土地特有の発音で矢継ぎ早に告げた。それに違和感を抱きつつも勢いに流され玄德は間を空けず答える。

「僕が劉玄德です。軍勢の内訳は騎卒が四人で歩卒が四十五人です。この二人は卿を探すため先行して伺いました。軍勢は今、平原縣の西四十里辺りを行軍しています」

言い終えても暫し考える素振りを見せ、やがて子平は話し出す。

「良く判った。少数であるため、平原國の軍への編入はそう難しくないだろう。足下は引き返し軍を率い合流し、その後は安心し従軍して欲しい」

その早口で抑揚の無い口調に、玄德は生じた違和感の正体に気付いた。受け取った書簡に於いてその文面に平原國を守ると言う気概が溢れていた。しかし、目の前で話す本人にそうした情熱は感じられず、単に任務を遂行しているだけの様に見えていた。

「唯(はい)、では引き返しそのように致します」

玄德が返事を終えるか否かの時に憲和が唐突に言い出す。

「軍へ編入されると仰いますが、涿縣の義兵は引き続き劉玄德の指揮下に在るのでしょうか」

その質問に子平は率直に回答する。

「残念だが義兵は足下の配下から離れて貰う。何故ならば、新しく兵卒を入れる際は入れる元の隊を一度、解体し編入しなければ、全軍の統一感を保てないからだ」

子平の発言は玄德を酷く動揺させるのに充分だった。それを受ける前は見知った義兵を自らの手足の如く指揮し目立つ戦功を挙げ名を天下に轟かせるつもりだった。ところがその思いを甘い考えとして断念せざるを得ない物と為った。

「卿のお考えは理解できました。その意に沿いたいと存じます」

内心に在る絶望に抑え、玄德は承諾した。そのため、憲和からそれ以上、口に出す事は無かった。

「では話は終わったので退場願いたい。吾は一軍を率いる立場であるため、任務が山積みだ。足下が軍を率い合流した際、再び面会に応じよう」

そう言われ気持ちの整理が付かないまま、玄德は退席の意味で押し立ち去る。憲和もそれに倣い後を追う。依然、赤い日が姿を見せる中、二人は馬に乗り軍営を牙門から出て北へ駆る。

馬で右を併走する憲和が真っ先に強い調子で話し掛ける。

「汝はあれで納得したのか。義兵を解体すれば、戦場で思う様に動けないのは明白だ。公孫卿が望む状態だとは思えない」

馬上で玄德は右へ険しい顔を向ける。

「そんなのは重々承知だ。だが、あの場は承諾せざるを得なかった。もし拒否すれば、それっきりで我等が官軍に合流できないだけだ。劉子平にとって少しでも多くの思い通りに為る兵卒が得られれば良くて、我等の義兵は大勢の中の一隊にしか過ぎない。劉子平の思い通りに為らなければ相手にされないだけだ」

玄德の眼差しの先にはまるで鏡を見たかの様に、憲和の顰めっ面があった。

「そんな骨抜き状態で参戦する意味が有るのか。それに吾等に参戦する意欲が湧くのか」

自らの姿を省みて玄德は眉間に力を抜き答える。

「先ずは叛烏桓との戦いに参加する事実が有れば良しとしなければならないのかもしれない。次以降に権限を強めていく他無い」

風を切る音の中でも聞こえる程の溜息を憲和は吐く。

「依然、劉子平の軍へ合流するのに時間が有る。それまでじっくり考えると良い」

徐に憲和は進むべき北へ向き直った。

玄德はそれに返事せず、同じ様に北へ顔を向ける。依然、厳しい寒風が全身に当たっていた。

上からの弱い陽射しの中で等間隔に広がり維持に乘馬した兵卒百人余りは皆、北の敵陣に向いていた。

その中のやや後に居る劉玄德は、自陣に配される騎卒に視界を阻まれ見えない敵陣に漠然とした不安を感じていた。玄德は周りに居る騎卒と同じく命令系統に於いて指揮されるだけである最下位の兵卒であり、必要以上に遠くにある敵陣を見る権限は無い。涿縣から来た義兵もこの自陣のどこかに歩卒として別々に配される現状を思うと、居たたまれない気持ちとなっている。また、涿縣から乗ってきた騎馬四頭は玄德以外は能力不足を理由に簡憲和等騎卒三人から離され平原國の物と為っていた。それ等の編成について玄德は義兵に対し謝意を抱いていたが、自らも將から一兵卒に降格させられた編成で幾分、気は和らいでいた。

やがて鼓の音が陣内で鳴り響き出す。それは前進を意味する合図だった。騎兵隊は予め決められた様に敵陣を乱そうと馬を駆り速くに前進する。しかし、その速度は騎卒の隊列の前から落ち始める。その理由は直ぐに明らかに為る。玄德の視界に向かって来る騎卒を捉え、敵の騎卒による迎撃を知る。片手で持つ戟と呼ばれる長い棒状の武器を両手に持ち替え、接戦に備える。騎馬同士の戦いであるため、目まぐるしい光景であったが、その中でも自軍の騎卒が凶刃に伏す姿を目撃する。敵卒三人で三方からの攻撃を受けていた。瞬時にそれ程、騎兵の数に差が有ると理解する。また、敵卒は烏桓らしく、毛毳を纏い髪を括らず幘も巾すらも戴かず頭を露わにしている。

玄德も自らが乗る馬が勢いに押されるため、否応無く戦線へと放り出される。極度の緊張感により涿郡での今までの戦いを瞬時に思い出す。黄巾賊との戦闘に於いて歩卒としか対せず、しかも指揮する立場で在ったため接戦の経験が乏しいものであったと思い出し、その緊張が内心で何時しか恐怖へと変化している。それを振り払おうと、戟を握る両手に力を入れる。

正面やや右側に敵の騎卒が玄德の元へ迫り来る。一撃を加えようと戟を振りかぶり刃先を振り下ろす。ところが刃先は空を斬り、その上、簡単に戟の先を敵の長柄の武器である戈で叩かれ軌跡を変えられる。敵の戈の先はその弾みでそのまま玄德の左の肩口に跳んでくる。

「がっ」

殆ど声に為らない呻きが玄德から出た。驚く前に凶刃が左の胸と肩の間に突き刺さっており、振り下ろされる勢いのまま、玄德は自らの体がまるで物の様に力無く馬から離れ落ちるのを知る。

視界が回った後、玄德の正面には曇った空が在った。地に仰向けに倒れる男を気に懸ける気配も無く、近くに在るのにまるで別の地であるかの様に、怒号と悲鳴と鉄が打つ音が遠くから耳に届いている。

既に玄德の傷口から感覚の無い所が広がり始めており、立ち上がり戦うどころか、上半身を起こすのも出来る気がしないであった。例え立てたとしても叛烏桓の一兵卒に自らの命と戦功を差し出すだけの様な思いが有った。

玄德は覚悟を決める、このまま何もせずやり過ごそう、と。動かなければ死んだ者と判断され

、攻めて来る事も無いが、と薄れる意識で考える。

気付いた時には劉玄徳の正面に赤く染まった曇り空が在り、風の音しか耳で捉えられない。

動こうとするが全身が痺れて力が入らないでいる。そうすると生きていた安心感から忘れかけていた死の恐怖が蘇りつつあった。それは叛烏桓に殺される明確な恐怖から、血の気が無くなり衰弱死する、もしくは誰にも存在を気付かれずに動けないまま餓死する漠然とした恐怖へと移った結果だった。

玄徳は可能な限りそう言った絶望的な考えをしないでおこうとしたが、心で次から次へとその様な考えが浮かんで消えが繰り返している。やがてその考えも出来ない程、気が遠く為るのを感じる。

「...生きていたのなら何処か動かして見ろ。何処でも良い、動け...」

近くで繰り返し呼び掛ける声が劉玄徳の耳に届いていた。それを気付いた矢先に別の発言が来る。

「そうだ。それで良い。それ以上、動けないならそのままでも良い」

その後、暫くして玄徳は自らの身が持ち上がるのを感じる。やがて何かの上に乗せられる。

「今、汝を鹿車に乗せた。これより軍営に戻る。だから安心するんだ」

その声に聞き慣れた感覚が玄徳には有った。声の主が手押し荷車である「鹿車」を押していると解る。声の主が簡憲和だと確信する。目をゆっくり開くと確かに風景が動いている。憲和と思わしき者は話す。

「結局、劉子平率いる平原の軍勢は終始、騎卒を中心とした叛烏桓に翻弄され圧倒されていた。だが、何故か叛烏桓は軍営を攻めず引き返し、そのまま撤退した。そんな傷だらけの状態だから追撃もままならず軍勢の復旧に力を注いでいる」

それを聞き安心したのか、玄徳は再び気が遠くなるのを感じていた。未だ冷たい筈の風さえ感じられずにいた。

節十二

日が未だ東の地から離れていない頃、馬上から涿城の城壁を劉玄徳は目で捉える。

年が中平五年に改まり漸く帰還したと言うのに嬉しさより気の重さが生じている。その理由は二つ有った。一つは關雲長が義兵を掌握し玄徳自身の再任を拒否するかもしれないと言う懸念であり、もう一つは義兵五十人を引き連れ官軍と合流したものの傷を負ったため先に玄徳だけが涿縣に戻って来たと言う後ろめたさだった。体の傷は意外と浅いが、心の傷は意外と深いと感じている。

「馬だけで早いとは言っても、長い帰路だった。縣城を見ると一安心だ」

そう声を掛けた者は馬上の簡憲和だった。未だ傷が完全には癒えない玄徳の付き添いでの帰還だった。憲和が多く騎卒へ根回ししたため、劉子平には玄徳が活躍した上での負傷だと伝わっており、今回の帰還が滞り無く実現していた。

共に赤幘を被り袴褶を着た二人は縣城の南門で止まり馬から降りる。玄徳は通行に必要な符と呼ばれる木簡を紳から取り出し、そこで待機する門卒に手渡し、照合を願う。門卒は脇へ姿を消した後、再び現れ中へ入る様に許す。門内に入ると二人は分かれ各家へと帰る。

玄徳が自宅に着くと、誰も迎えない門閤が在り、馬を厩の 厩に繋ぎ、無人の廊を進み歩き、やはり誰も迎えない正堂に昇る。つい二月前に義兵の幹部が足繁くここへ集っていた過去を思うと玄徳の心に寂しさが到来していた。

その思いを振り切り、左の胸の上の傷口に有る鈍い痛みを辛抱し、奥の室に行き赤幘と袴褶から一梁進賢冠を被り単衣へ着替え踵を返し玉声を伴いながら厩へ行く。長旅の後だと言うのに、自らの心から染み出る怠惰で逃げ出したい気持ちを責任感で抑え付け、今度は馬車に乗り出掛ける。

馬に引かれた輿車が止まる所は玄徳が一昨年を訪れた思い出深い邸宅だった。当時と違い今は見知った義兵の一員が門卒として待機しており、先ずそれに声を掛け取り次いで貰う。その門卒はまるで死人を見たかのような驚いた顔を一瞬、見せたが胸の前に右手の上に左手を乗せて見せ、所謂、供手の礼を行い、その後、門内へ姿を消す。次に姿を現した時に肅礼し玄徳を小さな門の内側へ導き、そのまま同行する。

一つの堂へ通され、門卒は引き下がった。堂の上には昨年以来である關雲長が巾を被り袴褶を着て南面し座していた。

西の階で履を脱ぎ玄徳は堂へ昇る。一方、雲長は席から立ち上がり、西面するよう東へ行き拝する。それを見計らい玄徳は西で答拝する。二人は東西に在る席にそれぞれ主客分かれ座り対面する。

「この数月の間、良く我の義兵を統轄してくれた。先ず感謝する」

傷口が疼き背に汗が吹き出ているのに、それを面に出さず「我の義兵」を強調したのは玄徳の意地であった。それが伝わったのかどうか判らない、鬚髯に埋もれた無表情な顔が玄徳の眼前にあった。

「当然の務めを果たしたまでだ。それより早速だが還ってきた義兵五十人程度の再編成に向けて

の会合を今より行いたい」

雲長の短い提案は玄徳の心に於ける弱みを突くのに充分だった。だが懸命に無表情を装う。「我と簡憲和だけが帰還した。依然、叛烏桓の進寇は続いている。そのため、他の義兵は青州の平原國にて劉子平の指揮下で叛烏桓の討伐に従事している」

そう告げても雲長の表情は変わらず、只、黙するのみだった。自覚しながらも玄徳は対するその面に批判めいた物を過剰に読み取ってしまう。やがて雲長は口を開く。

「何故、義兵を残し足下と簡憲和だけが戻ってきたのか」

これこそが玄徳が一番恐れた質問であり、回答次第で玄徳は義兵の將士の地位を追われると覚悟した。しかし、平原國から涿縣までの道中でどう答えるか練っており迷わない。

「叛烏桓の戦闘で我は負傷し、従軍しても足手まといに為ったので、義兵は劉卿に預けて帰って来た。戻らざるを得ないのは非常に残念だ」

雲長は玄徳を凝視する。

「承知した。だが無理せず傷を治すのに専念した方が良い。その後に平原へ復歸すれば良い」

雲長が右手の指で玄徳の体の左胸辺りを指し示す。顎を引き咄嗟にそこを見ると、赤く染まっている。自宅で袴褶から単衣に着替える際、鈍い痛みの中に痒みが有り搔いた際に瘡蓋が取れ出血したんだと思い当たる。

「これは大事無い血だ。見た目は痛くない」

玄徳にとって何気ない一言のつもりだったが、雲長から凝視されていた。

「どの様な状況で負った傷か」

率直な質問に、玄徳は相手の意図が読めないまま反射的に答える。

「叛烏桓の騎卒に向かって、騎馬に乗って戟で戦った末、敵卒の戈が我を引き裂き、そのまま落馬した」

雲長は玄徳の傷口を一瞥し、またまじまじと玄徳の顔を見つめ告げる。

「やはり愚の目利きに誤りは無かった。一昨年より義兵として共に戦ってきたが、足下は馬に乗り後陣に居て常に指揮し、前陣に出て戦う気概を感じなかった。一隊を率いる將士としての動きとも思えたが、正直言って足下は保身に走ったと愚は疑った...」

一呼吸置き雲長は一旦、発言を切り、再開する。

「...だが、今、その疑いは愚の誤りだと知った。何故ならば、將士の立場でなければ足下は傷を負う程、戦いに身を投じたからだ。例え敗れ負傷したと雖も、愚は足下を評価する」

意外な発言に玄徳の感情では喜びよりも不意を突かれた驚きの方が優っていた。

「では我を涿縣の義兵の將士として再び迎えてくれるのか」

平原國を発ってから今まで思い悩んでいた疑問がそのまま玄徳の口を通じ外へ出ていた。雲長は肯く。

「当然だ。何より足下が居なければ多くの者が義兵から纏まりの無い一介の豪侠に戻るだろうからな...」

少なくとも玄徳は喜ぶ必要は無いが安心して良いと覚った。雲長は続ける。

「...それに足下に謝らないといけない事実がある。足下が来る少し前に簡憲和が訪ねに来て平原

での戦いを概ね伝えた。だが愚は知らない振りし、足下の口からそれを聴いて真偽を見極めたかった。それを謝りたい」

その事実を聞き、憲和の存在の大きさを知り、今度こそ嬉しさと有り難さを感じずにはいられなかった。

「我も足下に自らの口で伝えたかった。謝る事でも無い」

玄德に自然と笑みが浮かんでいた。雲長は肯き再び切り出す。

「帰って来て間も無い上に傷が癒えぬのに申し訳無いが、早速、足下に義兵の將士として或る任務に当たって欲しい」

不意を突かれた玄德は片眉を挙げ聞き返す。

「それは何だ」

「京師より来た校尉の鄒靖と言う姓名の者が涿縣の義兵に黄巾賊討伐の応援を書簡で求めてきた。戦場でどの様に勝利するかならば兎も角、そんな返答や交渉は愚には無理だ。劉卿でないとそれはできない」

本当に雲長や義兵から必要とされているんだと言う点と、京師である雒陽からの高官が自分の設けた義兵を指名して来たと言う点に、玄德は面に出さない様に内心で二重の喜びを噛み締めていた。

「善かろう。京師の者相手であれば我が適任だ。その鄒校尉は今、何処に居るのか」

逸る心を抑え平然と装い目前の務めに気を向けていた。雲長は答える。

「書簡には中山國の盧奴縣と書かれてあった。周辺から兵を募っていると言う」

盧奴縣であれば涿縣から馬で二日も有れば到達できる距離だと玄德は算段した。

「では書簡で返すのでは無く、明朝出発で直接訪ねに上がろう。その際は足下に同行願う。涿縣の義兵は張益徳に統べさせよう。他方、平原國に預けた義兵の管理は憲和に引き継がせるつもりだ」

玄德の命令に雲長は「唯(はい)」と答えた。

傷の痛みを忘れ、南から照らされる陽光に玄德は暖かみを感じていた。

靖は笑みを見せる。

「然。普段から黄巾賊と戦っている足下の兵力が必要だ。それに他の者と力を併せ、群盗と化す黄巾賊を根源から叩けるのだから、悪い話ではなからう」

平原國に派兵するのに反対した雲長はどう思うのか気になり、玄德はそちらを一瞥する。そうすると、真っ直ぐ眼差しを靖に向ける姿が在った。それは口を開く。

「愚等には愚等の戦い方が有ります。それは一人一人を分けて配属すると十分に発揮されません。そのため、劉玄德を頂点とした涿縣の義兵を分けずそのまま卿の軍勢に編入して欲しく存じます」

それはまるで平原國での経緯を雲長が知っているかの様な言動だと玄德は驚いた。靖は肯く。「善かろう。足下等の力を十分に引き出し活用したい。但し編入されれば訓練や設営等も含め官軍から戦い方を大いに学んで欲しい。それに正式な官軍では無いにしろ改善命令には服従して貰う。我等の足手まといに為っては元も子も無い」

玄德と雲長は口を揃えて「唯」と答えた。玄德は言い添える。

「では今の段階では兵数は約束できませんが、十四日後にはここに義兵を率い上がります」

靖の来客が後に控えていると気を遣い玄德は立ち上がり早々に退こうとした矢先、靖から声を掛けられる。

「足下が住む涿郡は幽州でも南端に位置するが、未だ叛烏桓の進寇はないのか」

声を出され途中、直ぐ玄德は座り直した。玄德の住む涿縣の治安状況を案じての質問と捉え率直に答える。

「未だありません。但し、ご存知でしょうが、叛烏桓は西の公孫騎都を恐れてか、東から大海沿いに南方向へ攻めています。そのため、冀州の東部や青州が進寇を受けています。それを思えば涿郡は黄巾賊については兎も角、叛烏桓に関しては平穏な状況です」

話していると玄德の左胸の上に在る傷跡が疼きだし、とても叛烏桓討伐に従軍したとは言い出せないで居た。靖は渋い顔で肯く。

「それは涿郡にとって幸運な事だ。今は張純の扇動で丘力居や蘇僕延と言った渠師が参戦し大規模な叛乱に至っているが、知っているかもしれないが、元はと言えば徴兵されたが牢稟を得られなかった烏桓突騎の不満が暴動に変わった事だ...」

次第に靖の顔は陰しく為り、愚痴めいた話を切り出す。

「...それ以前に、烏桓の徴発をすると為った際、我は烏桓が弱いため別の異族を徴発すべきだと陛下へ上言した。ところが或る程度の議論を呼んだものの、結局、烏桓を徴発した。その後、知っての通り、烏桓は張純の扇動に乗ってしまう等、自らの心の弱さを露呈した。あの時、我の上言が賛成され受け入れられれば、今程、官軍の戦力が東に西に分散する様な事態には無かった...」

話している最中に突如、何かを思いだしたかの様に都合の悪い顔をし、靖は話を切る。左右を見回した後、再び口を開く。

「足下にこの様な話を聞かせても仕方ないな。引き留めて悪かった。では十四日後にここで会おう」

その発言が切欠で再び玄德等は立ち上がりその場で一斉に拝し、順に堂を西階から降り去った

。

往きと同じく帷幕が密に並ぶ大街を東へ歩き、その際、玄德は雲長に話し掛ける。

「何故、鄒校尉が話を途中で止めたか判るか」

雲長は眉を顰めた顔を向ける。

「鄒校尉の仰った様に話す相手を誤ったのだろう」

表情に憂いを含ませ玄德は話す。

「単にそうかもしれないが、我はそう思わない。飽くまでも憶測だが、あの時、話すのを止めなければ『戦力を分散させなければ、義兵になんか協力を要請しなかつたらうに』と続いていたのではないか。途中で話す相手が正しくその義兵だと思い出し、語句を飲み込んだのだろう。そうだとすれば全く腹立たしい」

憤りを顔や声へ露わにする玄德とは対照的に、雲長は冷淡に言い放つ。

「例えそうだとしても、それを単に好機だと捉える気概で、黄巾賊を討てば良い。涿縣を含めた冀州常山國周辺の地域の治安が回復すれば良いのではないか」

その発言に玄德は只肯くしか無く、雲長の言い分を真摯に受け止め、早くも討伐へと気を向けていた。

玄德等は各自、馬に乗り、城門を潜り東へと駆った。

節十四

曆の上では依然、春だが、真上からの光の中、四方を山で囲まれた地で蒸し暑さが漂っていた。

周りを見回すと、五千人近くによる密集した隊列が成されており、そこからも熱気が漂っていた。劉玄徳は兜鍪(かぶと)を被り鎧を着け戟を持ち馬に乗り、三百人程の隊の中央に位置し、遠くから手前へ近付く軍勢まで見渡していた。

「こんな山深いのに冀州だとは信じられん」

同じく騎乗する張益徳は感想を零した。玄徳が初めて会った一昨年より腰回りや背が太く逞しく為り、顔に鬚や髯が目立つ様に為っている。

「ここ上艾縣は確かに今、冀州の常山國だが、故(もと)は并州の太原郡に属していたと聞く。足下の感覚も強ち誤認とも言い難い」

自らの高揚感が外へ漏れない様に、落ち着いた口調で玄徳は説いた。

「まあ、この縣がどの州に在ろうがああ黄巾賊を大破するには充分な広さだ」

言い終えると益徳は声を発して笑い出した。玄徳はそれを頼もしく感じる。

鄒靖の軍勢は上艾の縣城を背に西を向いており、その中で玄徳率いる涿縣の義兵は右端前方に配置されていた。義兵の隊の前部を關雲長が指揮し、後部を益徳が指揮し、隊全体を玄徳が指揮する。

玄徳が目を離さず見つめている黄巾賊の軍勢は、未だ弩から放たれる矢の射程距離に到達せずその行軍が予想を越える遅さだったが、着実に近付いて来ている。

官軍が不動で待つ状況で、陣内では絶え間なく命令や確認の声が飛び交っていたが、賊軍が近付く毎に不思議と静かに為っている。段々と敵勢の全容が明らかに為っており玄徳の目には総勢二万人程度の大軍に映っている。今まで涿郡で戦ってきた黄巾賊とは規模に違いが有り過ぎて全く別種の巨大な集団に見えていた。しかし、確かに涿郡で群盗紛いに為っていた黄巾賊の根源だと納得でき、これがそのまま小さな縣城を襲えば一溜まりも無いと身震いする気分だった。

丁度、陣内完全に静寂に包まれた時に、突如、けたたましく鼓が陣の幾つもの箇所から鳴り出す。それは戦闘開始の合図であり、陣全体が左右に展開し始める。玄徳の隊は最右翼に居るため急ぎ所定の位置へと行進させる。

黄巾賊の軍勢の歩調や進む方向に変化が無く、未だ弩の射程距離に入っていないため、余裕を以て玄徳は自らの隊を北の所定の位置へ移動させ得る。総じて官軍は東へ進む賊軍を東北、東、東南の三方から各二千人弱で迎撃する陣形を成す。

「放て」

その声と共に鼓の音の調子が速くなり、無数の矢が黄巾賊の方へ飛んで行く様を目にする。恐らく官軍は三方から賊軍に弩で矢を撃ったのだろうと玄徳は想像したが、それに反し攻撃された黄巾賊の進軍の速さは緩む様子は無かった。

やがて賊軍が東の官軍の所まで到達し接戦が開始される。それを認め玄徳は号令を出す。

「攻めるぞ」

それが合図と為り三百人程度の涿縣の義兵は西南の方への行進を開始する。平原國での叛烏桓との戦闘と違い、玄德の周りには見知った者が付き従い、それが己の力の様に感じ、次第に気分を高揚させている。

義兵が賊軍に近付いても最近の数十人が構えるだけで、それ以外の玄德から見える多くの黄巾賊は東への歩みを止めずに居る。

「突撃だ」

前方から雲長が号令を掛けた。そうすると義兵は前から順に走り出し、次々と黄巾の濁流へと飛び込んで行く。後続の者は横へと広がり戦線が長く為る。それを見た益徳は指揮し後部を右へと大きく導き、更なる戦線の拡大を図る。

「我は雲長の元へ行く」

玄德は益徳へ言い残し馬で前へと駆った。横へ広がり総戦闘に入る隊の前部へ後から達する。そうすると雲長も矛を奮って馬上から果敢に敵卒を次々と刺し倒している様子が玄德の目に入る。

そこで馬を止め玄德は慌てて周りを見渡す。義兵の隊を含む右曲の官軍は攻勢に出ているものの、賊軍全体の動きは未だ東方向から変わらない。このままでは二万人と思わしき黄巾賊の軍勢全てを官軍の中曲二千人弱だけで迎撃しなければならないと危機を抱き、積極策に出る決心をする。平原で受けた傷が疼き出していたが、身心共に在る痛みを振り払う思いで腹の底からの声を出す。

「一卒、一卒を倒していても大勢は変わらない。什長以上の指揮する兵卒を狙い撃て」

玄德は雲長にも聞こえる様に号令を掛け、馬で戦線へと突進した。

自隊の歩卒の合間へ入り込み、その先に居る敵の歩卒を戟で払い威嚇し道を空け、その一瞬を見逃さず奥で指揮する者に馬首を向け、不意を突き戟を振り下ろし一撃で地に倒す。怒号の中に一つの悲鳴が上がる。続けて右でも似た声が挙がったため、一瞥すると雲長が馬上から敵卒を矛で刺していた。

玄德も負けまいと駆っては次から次へと指揮に当たる敵卒を倒していく。通った跡、切り込んだ跡へ自隊の歩卒が続き、その勢いや士気の高さから敵卒が次々と倒されていく。玄德が突進を繰り返した後に心と気付くと、敵の陣形が乱れつつあると知る。一旦、戦線から離れ後方に行き、安全な所から戦局を見極める。先ず玄德が始めた、成る可く指揮に当たる敵卒を狙い撃つ方法が知らぬ間に浸透しており、総じて黄巾賊の陣形が三方から崩れ始めており、それは奥まで波及していた。それを見てまるで自らが認められた心地に為り興奮し、自然と次なる策が心に過ぎる。

「他の隊に遅れを取るな。敵勢の奥へ奥へと切り込むんだ」

大声で号令を発し玄德自らも再び敵陣へと飛び込んで行った。

戦闘が始まってから二時半程経つと、敵卒で武器を持ち戦おうとする者が玄德の見える範囲では居なくなっており、停止を意味する鐸の音が辺りから鳴り響いていた。玄德は戦場で雲長や益徳を探し出し隊列を整え、戦果を調べ報告する様に命令する。雲長から一言告げられる。

「この戦いは単なる局地戦の勝利では無く、并州から冀州への黄巾賊による進寇を食い止めた一

大転機となる勝利だ。今後、冀州常山國や中山國での黄巾賊が途絶えるかもしれない」
負傷者の救護や捕虜の連行が行われ、やがて官軍は東の上艾城へ撤収する。
夕日を背に汗だくの玄德は興奮冷めないまま、意気揚々と義兵を率い縣城へと進んでいた。

節十五

未だ強い陽射しが注がれない朝の内に、劉玄德は涿城に在る郡府を目指し歩みを進めていた。

玄德の姿は一梁進賢冠を戴き単衣を纏い佩玉帯刀していた。過去に何度か見た門の前で立ち止まり、近付く門卒に謁を渡し、中へ通して貰う。未だ暗がりの多い廊を歩き、途中で立つ小吏から誘導され、中門の前へ歩を進め、興奮した心を抑え慎重に立つ。

門閤の向こう側の堂上に南面する男の姿を見る。それが皇帝からの勅使だと理解する。

「謹んで謝します」

玄德がそう発声すると、左より勅使の従者が近付く。その間、別の従者が賛意を声に乗せ発する。銅の印と黄の綬を篋(はこ)より取り出し玄德に授ける。手に銅印の重みが加わり玄德の興奮や緊張は一気に増大した。何故ならば、事前に聞いた所によるとその印は捺すと篆書体で「安喜尉印」と記され、中山國の安喜縣に於ける縣尉と言う長吏に玄德が就任する事実を意味していた。またその就任の様子は、まるで以前、口伝に聞いた京師たる雒陽の御前を再現している様で、京師での就任を簡易にした様子を見ている様な心地だった。そうするとその従者は後ずさりする。

「前へ」

閤門の向こう側の堂上から声がした。それに従い、拍子が一定の玉声と共に玄德は廷を横切り、堂下へと歩み寄る。目を伏せるために視界の上端に辛うじて入った使者の口が開かれる。

「劉備は冀州常山國上艾縣に於いて三箇月前の中平五年三月に黄巾賊を討伐し多大な功を挙げた。因って冀州中山國安喜縣の尉の官職を授ける。その職責の下で、当縣の治安維持に従事して貰う」

児童の時に思い描いた方法と違うが、我は軍功を挙げ、遂に官吏に成り得たんだ、そう心の中で叫んだ。涿縣で履(くつ)を売って食い繋いでいた頃と、簡憲和に軍功を挙げ官吏に為ると宣言した事が一瞬、胸中に過ぎり、心を強く揺り動かされ両目が次第に潤う。加えて任地が中山國だと言う事実に運命を感じる。

「謹んで承諾します」

玄德は両目から零れ落ちる前に返答し、皇帝に対するのと同じ様に跪き地に頭を接し直ぐに上げる拝礼、所謂頓首を行った。その後、門閤の外へ出て新たな気持ちで歩を進めた。

本来ならば太守に冠を購入する際の証と為る「致」と呼ばれる木簡を授かり、市に足を運ぶ。しかし、玄德は盧子幹の門下だった頃から持ち続ける一梁進賢冠が有るため、依然、日が出て久しく無い頃にそのまま帰路へと就いた。

自宅には玄德の官吏就任を聞き付けた義兵等が集まっており、足を踏み入れると祝福の音が沸き上がり、満たされていった。そう言った雰囲気の中、右手に銅印黄綬を掲げながら気持ち良く玄德は廊を進み、やがて中門へと到達し、それを潜り正堂前の廷へと足を踏み入れる。堂上には東側に西面する簡憲和、關雲長、張益徳の他、中山大商の張世平とその介者五人が西側で東面し

座している。叛烏桓が青州平原國から一応の撤退を見せたため、簡憲和は生き残った義兵を引き連れ涿縣へ戻って来ていた。世平を認め慌てて玄德は東階を通じ堂上へ昇る。

玄德を認めると世平は立ち上がり拝する。玄德は答拝する。

「まさか卿がいらっしゃるとは思いも寄りませんでした」

率直に驚きを口にした。

「常山國での劉卿のご活躍により黄巾賊が一掃され、随分、旅商が楽に為りました。その感謝の意を伝えに上がりました」

肥えた初老の世平はいつもの様に温和な表情を絶やしていない。

「恐縮致します。何より一昨年より卿からの絶え間無い援助が有ったため、戦果を挙げられるに至りました。加えてその軍功によりこの度、僕はこの通り、冀州中山國安喜縣の尉に任命されました...」

話しながら玄德が銅印黄綬を掲げると、左右と前からどよめきと賞賛の声が挙がり、喜びをまた嘯みしめる。

「...そのため、感謝の意を示したいのは寧ろ僕の方です。有り難うございます」

謝意を示し返した玄德の目の先には、何かに気付いた様の顔が有った。

「卿に隠し事をしても仕方が有りませんので、率直に申し上げますが、実は常山國での軍功により卿が官位に就くのは明らかでしたので、何の官職に就くか探りに来ました。郡縣の高官あるいは長吏に就任ならば、癒着により権力の集中を未然に防ぐために昔より他の郡縣へ就任する不文律が有り、場合によっては涿縣の義兵の存否も左右しかねませんので」

世平の細い目から垣間見える眼光がまるで玄德を問い迫る様に感じた。言われてみれば長吏への就任に対し自分の進退しか見えていなかったが、涿縣の義兵にも少なからず影響が出ると思い知らされる。

「その通りです。縣尉は縣の長吏であり、涿縣どころか涿郡にも幽州にも着任し得ませんでした。それに涿縣の義兵の殆どは昔から涿縣に住みますので、なかなか他州他郡へ義兵の部分的な移転もできませんし、黄巾賊が一掃されたとは雖もその残党が他州から来ないとも限りませんし他の賊や何より叛烏桓からの脅威は未だ消失しませんので、依然、義兵は涿郡や卿が旅商する中山國に必要です。しかし、幸運にも僕の着任先は涿郡から南接する冀州中山國の安喜縣です。その縣は卿の本拠の在る盧奴城下の南隣の縣ですので、寧ろ卿や涿縣の義兵にとって好都合かもしれません」

相変わらず愛想の良い相貌を世平は崩さないが、疑問の晴れない表情が見て取れた。

「では、具体的にどの様に致すおつもりですか」

その率直な質問に対し真摯に答えようと玄德は深く考え、やがて告げる。

「涿縣の義兵はそのままにして、以降、關雲長に全任せます。それとは別に安喜縣で簡憲和を頂点とした義兵を新たに設けます。これで僕は表面上、義兵とは縁が切れますが、水面下で官軍の動向と照合しつつ義兵を指導していきたいと存じます。しかし、縣尉の俸禄では涿縣の義兵どころか安喜縣の義兵をとて養い得ません。そのため、厚かましいお願いですが、卿には引き続きの涿縣の義兵へのご援助に加え、将来設けられるであろう安喜縣の義兵へのご援助もお願いし

たいと存じます」

玄德は話しながらも憲和と雲長をそれぞれ一瞥していた。そうすると憲和は頷き、雲長は眉を顰めながらも頷いて見せた。そのため、義兵の内で合意を得たと安心し世平へ要求した。対する世平は玄德に眼差しを向け告げる。

「黄巾賊の残党や叛烏桓から守るのでしたら、従来より義兵の規模は小さく為ると存じます。それに愚が今まで以上の金銭や軍資を投じられると卿はお思いに為られます...」

その的を射た指摘に玄德は二の句を告げられないで居た。しかし、世平は次第に意表を突く発言を紡ぐ。

「...しかし、義兵について今の規模を維持し増強する必要が有るのかもしれませんが。何故ならば常山國や中山國は依然、脅威に曝されている様に存じます」

今度は玄德が疑問を呈する。

「まさか黄巾賊の別の集団が進軍しに来たと言う報せを受けたのですか」

新たな懸念に対し上擦った声を挙げた。顔色を崩さず世平は答える。

「その様子では卿をご存知では無い様ですね...良いでしょう、説明しましょう。并州の太原郡を進寇する異族の休屠各胡十万人余りは脅威と為ると存じます。丁度、卿が常山國で黄巾賊を討伐していた三月に、并州太原郡では、異族である南匈奴が官軍を助けようと援軍を差し向けました。しかし、南匈奴の渠師である單于と共に并州刺史の張使君が太原郡の晉陽城にて休屠各胡により攻め殺されました」

告げられた事実に堂上は騒然と為った。「并州刺史」は并州下の郡を監察する官職を指し、それに対する敬称が「使君」であり、玄德は并州刺史が張懿と言う姓名の者と記憶していた。元来刺史に監察の職務しか無いが、兵乱が頻発する近年では郡の太守を率い軍事に携わる任務の割合が大きく為っていた。その并州刺史の州府は太原郡の晉陽城内に在り、休屠各胡に攻め取られた事実が世平により涿縣の義兵へ伝えられていた。真っ先に反応したのは雲長だ。

「常山國の隣郡でそんな惨事が起きたと知っていれば、黄巾賊を撃破した勢いでそのまま太原郡に進軍すれば張使君の仇を討てたかもしれない」

低い声で穏やかに憤りを表明し齒軋りをした。玄德は悔しさを声に込める。

「縣城に籠もり守るなら兎も角、官軍五千程度で攻めても休屠各胡十万人余りを撃破するどころか、戦い続けるのも叶わなかつただろう。ましてや義兵三百人では足止めすらできない」

それに憲和が性急に口を挟む。

「これから先、休屠各胡を義兵で遠征しようなんて気を起こすのでは無いぞ。大敗するのは火を見るより明らかだ。攻められるまで決して関わるのでは無い。吾等は義兵を充実させ専ら守るのみだ」

憲和が突き付けた事実は痛い程、玄德の心へ重く響いていた。并州の百姓は進寇を受け今も苦しみ続けている、と玄德は強く意識する。

世平は咳払いをし衆目を集め話す。

「未だ議論は尽きないでしょうが、愚と致しましては今まで通り涿縣に義兵を配備して頂き、加えて中山國の安喜縣に新たに義兵を設けて頂ければ有り難く存じます。そうして頂けるなら今ま

で以上に必要な軍資を提供致します。休屠各胡はその名の通り涼州の武威郡休屠縣からの異族と聞きますが、そこから并州の太原郡まで郡境どころか州境も東へ越えて移動しています。これは騎卒中心だからこそできる進軍でありますし、そう考えれば冀州中山國も攻められても可笑しく無い距離です。今までは黄巾賊でも群盗紛いの集団しか到達しませんでした。仮に休屠各胡が来るとなるとそうはいかないでしょう。そのため軍備のより一層の充実を宜しく願います」

その要求に東側に座る玄德等は一齐に「是」と答えた。それを認め世平は話を再開する。

「もう一つ、劉卿にお願いが有ります。縣尉ならば縣の物資を或る程度、管理しますし、郡の物資についても口添えできるでしょう。そのため、何か物資を購入します際、出来れば愚に融通して下さいと助かります。それが回り回って義兵の為でもあります」

それを玄德は世平に向き直る。

「まだ具体的な職務を知りませんので、お約束は出来ませんが、可能な限り融通しましょう。後日、書簡でお知らせします」

それを聴き終えてから、世平は立ち上がり用が済み、去る意味で拝した。それが切欠と為り、東西の人々は拝し合い、西側の者は堂から降り去って行った。それを認めてから、玄德は北の席に座り南面する。他の者は堂の南側で席を東西に長く敷き、そこへ各人が座り北面する。

「張世平の手前、言えなかったし、自信は無いが、休屠各胡が冀州へ攻めて来る事は無いと思っている...」

玄德の切り出した話は皆を驚かせ注視させている。

「...考えてみる。三月前に并州太原郡から冀州常山國へ何故、二万人ものの黄巾賊が進寇して来たかを。異族の休屠各胡が并州で黄巾賊を攻撃し追い払った訳では無い。先に并州太原郡へ休屠各胡十万人余りが進寇したため、官軍による防衛力が低下し進寇し易いにも関わらず、黄巾賊は并州太原郡から一月も経たない内に出ていった。それは既に休屠各胡から食糧等の物資が略奪されていたからだろう。つまり拠点や兵站を持たない黄巾賊は略奪し続けなければ生きていけないため、無計画に消極的にも東に隣接する冀州常山國へ進軍したのでだろう。現に東の常山國へ進軍したのは別の集団は四箇月前に南下し州境を越え司隸の河東郡へ進寇したと聞く。逆に休屠各胡は騎卒中心で機動力が有るにも関わらず、五箇月前の一月に并州の西河郡、三箇月前の三月に同州の東隣の太原郡と并州を着々と攻略しており、黄巾賊の様な計画性の無さは感じらず、州境を越えてまでも常山國を攻めるとは考えられない」

言い終えるや否や憲和が意見する。

「では張世平から物資だけ貰っておくつもりなのか」

玄德は顔を顰める。

「そう言う意味で話した訳では無い。是非、安喜縣で義兵を設け、不測の事態に備えたい。その理由は誰も嘗て黄巾賊が并州に集結し、その一部の二万人が冀州へ進寇するだなんて予測していなかったからだ。徐州の黄巾賊、幽州の叛烏桓、涼州の叛羌、并州の休屠各胡、あるいは未だ知られていない反叛勢力がこれから先、幽州涿郡あるいは冀州中山國へ進寇しないとも限らない。例え今の休屠各胡の様に敵わないとしても、三箇月前の様に官軍と共同戦線を張るのは可能であり無駄にはならないだろう。各々、その旨を重々理解し、任務に当たって貰いたい」

玄徳の願いに対する三人は「唯(はい)」と一斉に返事した。

庇の深い陰から視界に入る堂下の中庭では未だ衰えない陽光を受け草木が青々と茂っていた。

節十六

縣府の正廷に粟が零(お)ちる様を横目で見ながら、劉玄徳の足は門閤の外へと向かっていた。

玄徳は腰から垂れる黄綬に左の指で触れる。官吏と為れば沐浴日以外、官舎に寝泊まりし職務に当たる。そう言った生活を一箇月間以上続け、漸く安喜の縣尉に着任したと言う実感が沸いていた。しかし先程、縣長が告げた噂に不安を募らせていた。

歩を進め尉舎に戻ると、堂上には待機する配下と為る、単衣に袍を着る縣吏以外にも一人、袴褶の簡憲和が混じっているのが目立っていた。それを視認しつつ堂へ登ると告げる。

「悪いが皆、暫し席を外してくれないか」

そう言うと直ちに縣吏全員が門閤の外へと連れ立って歩いて行った。それを見送ってから北面する憲和は話を切り出す。

「人払いする程の用では無かったのだが」

玄徳は堂の北で着席し応じる。

「汝に無くてもこちらにできた。先程、縣長より噂を聞いたのだが、汝にも耳に入れておいて欲しい」

玄徳の只ならぬ様子を見てか、憲和は間を置き慎重に返事する。

「それは何だ。聞こうではないか」

一つ深呼吸し話し出す。

「冀州や中山國が陛下より詔書を承けたらしい。その内容は軍功が有って長吏に為った者を沙汰せよ、と言う事らしい」

「沙汰だと。選り分けると言う意味だな。ならば縣尉からさらに昇進できるのか」

憲和の解釈に玄徳は苦い表情を見せる。

「それだとどれだけ嬉しいだろうか。その逆で職を辞めさせる意味だろう。本来ならばそれに相当する官職からの異動以外であれば、孝廉として郡の太守から推挙され、郎を経て長吏に任命される流れが常態だ。だが、軍功によって任命されるのは異常だ。陛下はそれを是正したいのかもしれない」

玄徳の不安と落胆が憲和に伝わった様で眉根を寄せていた。玄徳の言う「孝廉」はその名の通り「孝順」かつ「廉清」である者が推挙対象であり、年間二十万人に一人の割合で、郡内を本貫とする者、実質、主に人脈の有る官吏や門生から推挙されていた。それに選ばれると「郎」もしくは「中郎」と呼ばれる皇帝親衛の官職に選ばれ、その後、各地の縣の長吏に為るのが常だった。玄徳が盧子幹の門下だった頃、高官と為るため孝廉に選ばれる道も当然、視野に入れていたし、何より玄徳が兄事する公孫伯圭が孝廉に推挙されたと聞いていた。やがて憲和は意見する。

「だからと言って汝が免官に選ばれるとは限らない」

思わず玄徳は俯く。

「元々、官吏だった者が長吏に為るのなら兎も角、単なる義兵の一將がそう為るのは異常だったんだ。きっと中山國からの使者が安喜縣の長吏を碌に調べず只来るだけで我の免官が決まるのだろう。我だって今考えると縣尉に為れたのは可笑いと思う」

次第に声を荒らげるように為っていた。面を挙げると哀れみを懸ける様な憲和の顔が在る。「汝が嘆くのは良く判る。だがそう思い詰めるな。飽くまでも噂であって未だ決まっていない。今から共に考えれば道が開けると思う」

憲和の慰めに玄德は俯き肩を落とす。そのまま告げる。

「汝の気遣い、痛み入る。とても嬉しく感じている。だが、この件については先ずは一人で考えたい。汝に相談する際は遠慮無く招集する。だから今日の所は安心して帰ってくれ」

心にも無い事を玄德は並び立て憲和を帰路に就かせようとした。憲和は気遣ってか立ち上がり数歩進む。玄德は顔を挙げその去り行く背に声を掛ける。

「ところで汝の用は何だったのか」

憲和は首から振り向き告げる。

「汝の大事に比べれば取るに足らない小事だ。義兵を募集するのに意見を聞きたかった。だが汝が縣尉を免官と為れば、そんな事も論じてられないからな」

言い終えると、進む先に顔の向きを戻し、憲和は堂を降り去っていった。

この危機は越えられるかもしれないが、今はそれを考えずに縣尉の責務に没頭しておきたい、と玄德は強く念じていた。

それから五日も経たない内に劉玄德の懸念は現実化しようとしていた。

中山國の國府から督郵と言う官職の者が國內の各縣を順に訪ねていると言う。督郵は主に郡内もしくは國內を監察する職務を有しており、玄德が縣長から噂として聞いた沙汰に適合していた。

「いよいよ督郵が安喜縣に入るそうだ。配下に偵察させた所、今朝、東の蠡吾城を輿車で発ったそうだ。七十里の距離だから、今晚はその中途の伝舎に泊まるだろう」

日が中空を過ぎた頃、玄德の尉舎を訪ねて堂上に着席した簡憲和は開口一番にそう知らせた。玄德は暫し考えた上で傍に待機する縣吏に聞こえる様に言う。

「今より我は督郵を訪ねに行く。そのまま各自、任務に就いておく様に」

立ち上がり玄德は忙しない玉声と共に早足で奥へ行く。急ぎ袴褶に着替え、元居た所へ戻り憲和を引き連れ、厩へ向かう。後から続く憲和が背中越しに話し掛けてくる。

「今から行くと伝舎の到着は夕方に為りそうだが、そこまでして督郵に会ってどうする気か」

玄德は振り返りもせず廊を着々と歩きながら答える。

「何、噂が本当なのか、督郵に真意を確かめるだけだ。この時に備え、ちゃんと謁も用意している」

二人は厩からそれぞれ馬を乗り東へ駆る。

憲和の言う如く西の空が赤く染まる頃に漸く伝舎に到着し、門前の衛卒から聞き出し、督郵が居ると認める。前門を潜り歩を進めながら玄德は憲和に告げる。

「漸く来た。これで真相が判る。何も知らぬ間に縣尉を辞めさせられるなんてご免だ。例え我が免官と為ってもそれが陛下の御意志ならば謹んで承ける。だがその前に真意を知りたい」

二人はそれぞれ馬を厩の に繋ぎ、そこから徒歩で進む。門卒が言っていた門閤で立ち止まり

、そこで待機する小吏に聞くとそこに督郵が泊まると知る。早速、玄徳は小吏に謁を渡し、督郵との謁見を乞う。小吏は謁を丁寧に受け取り門内へと姿を消す。

小さい宿舎であるのに関わらず小吏はなかなか帰って来ず、その間に太陽は西の地へ入りすっかり辺りは闇に包まれつつあった。何か可笑しい、そう玄徳が感じた頃に、小吏は再び姿を表す。玄徳は痺れを切らしたと言わんばかりに、小吏が肅す前に門内へ足を踏み入れる。そうすると小吏が体で進路を塞ぎ入れない様にして言う。

「主は病に伏しています。今、謁見するのは叶いません」

玄徳は二、三步退き門外に出て、その見え透いた面会拒否に憤りを露わにする。

「先程、門卒から督郵が今日、ここに至ったと聞いた。そんな病の者が何故、ここまで馬車で来られたのか」

小吏の顔は睨み付けるような困った顔を見せる。

「兎も角、会う事は無理です。お引き取り願います」

玄徳は暫し顰めた顔を見せたが、あっさりと踵を返しその場を離れる。その後を憲和が追う。

「諦めたのか」

横に追い付いた憲和は質問を投げる。玄徳は振り向き顰めっ面のまま回答を返す。

「諦めてはいない。我に考えが有る。一旦、安喜城へ引き返す。我が軍功で立身した者だから督郵は我を軽く見ているのだ。その傲慢な心構えから目を覚ましてやらなければならない」

厩の泥濘に足を取られながら、吐き捨て如くに言い放った。

二人は夜道を駆け安喜城に帰還する。縣舎に戻ると着替えず乗馬で体が火照るまま玄徳は直属の配下が居住する室を回り、眠っていれば起こし、他の者に伝える様に言付けし、多くの吏卒を正堂へ招集する。燭の明かりの中で、堂上に座る官吏四人と憲和、堂下の廷に立ち並ぶ衛卒七人に向け命令を発する。

「我は府君の密教を承け、明朝にその任務に就く。諸君はそれに加わって貰う。夜が明ける前の戌夜にここに集合だ。馬での移動に為るため、袴褶に着替え帯刀しておく様に。以上だ」

「府君」は郡太守または國相の敬称であり、ここでは安喜縣の所属する中山國の相を指していた。無論、そんな密教は無く、玄徳による偽りであった。

衛卒と立ち上がった官吏とが去ろうとし、憲和もその流れに加わっていたが、玄徳に引き留められる。

「汝には別の頼み事がある」

吏卒が去る背を一瞥した憲和は聞き返す。

「何だ。汝が密教を承けただなんて嘘を付いてまで起こそうとしてる策に期待して居るぞ。吾に手伝えるなら何なりと頼んでくれ」

玄徳は視線を一旦、逸らし吏卒の耳に入らない所まで去ったと認めた上で話す。

「先ず汝は戌夜にここへ出頭しないで欲しい。その後、我が帰って来なければ、汝に安喜縣の義兵を任せたい。引き続き義兵を募り有事に備えて欲しい」

燭に照らされた憲和の顔に疑念の色が広がっていた。

「まるで汝が安喜縣から居なくなる物言いだな」

大きな一つの息を吐いてから玄徳は説く。

「全ては督郵の出方次第だ。それによっては汝の言う様に我は安喜縣に居られない恐れが有る」
「随分と悲壯な決心だな。具体的に何をするか聞いてはいないが、そんな危険が有るのだったら
良い策とは言えない。それに残念だが汝の頼み事は引き受けられない。吾もその策に参加する
為だ」

穏やかに言い放つ憲和に、玄徳は声を荒らげて応じる。

「これは我だけに留めたい事だ。汝を危険に曝せない」

憲和は相貌を崩すどころか笑顔を見せ告げる。

「吾は汝の尻拭いはしたくない。元々、安喜縣の義兵なんて殆ど集まっていないのだから丁度
良い。何、張世平には数少ない吾の配下に書簡を託しその旨を伝えておこう」

言い終える頃には声を発てて笑っていた。玄徳は口の端を挙げ肯く。

「そこまで言うのなら止めないが、それなりの覚悟をして貰おう。また我がこれから先、行う事
に口出ししないでくれ」

玄徳の願いに憲和は「諾」と返す。

そこで憲和は二人以外誰も居なく為った堂を降り、燭の光が届かない所へ出ていった。

節十七

漸く空が白み始めた頃に劉玄德率いる一団は安喜城東二十里程に在る伝舎に訪れた。

大声を出し門内の衛卒を起こし、前門を開けさせる。一団十人余りは馬に乗ったまま、前門を駆け抜ける。白い息を吐きながら玄德は厩へ先導し各々、に繋ぎ、駆け足で督郵の泊まる門閤の前へ行く。

「どうせ謁や刺を差し出して正面から面会を求めても拒絶されるだけだ。ならば強行突破しかない」

まるで独り言の様に、傍で待機する簡憲和へ告げた。直後、玄德は牆垣を乗り越え、中から門閤を開ける様に吏卒十一人に命令する。それに応じ薄暗い中、進んで台代わりに為ったり肩車をしたりして、二十尺程度の牆垣を四人が次々と乗り越え、内側から閤が開けられる。そこへ玄德を先頭に一団が中へ入って行く。全員が閤内へ入ったのを見計らって、体ごと振り返り命じる。

「ここで府君からの密教を皆に少し伝える。督郵に関係するご命令だ。先ず黒綬を帯びた者を探し出せ」

玄德は吏卒に手分けし督郵を探し出す様に指示した。宿舎に足を踏み入れ、片っ端から次々と戸内を確かめて行くと、間もなく玄德は背後から督郵を見つけたと報告を受ける。踵を返し吏卒の導きのままその室へ急行し戸を通ると、そこには既に一梁進賢冠を戴き単衣と袍を着て黒綬を帯びた四十代半ばで肥えた督郵と思わしき男が、地より一段高い木製の牀と呼ばれる座具に座っていた。男は泰然としよう。

「その姿を見ると爾等は縣吏や縣卒だな。こんな早朝に人の寝泊まりする室に無断で入り失礼であろう。爾は誰だ」

その声には怒気が含まれていた。玄德は後に居る吏卒に向けて左手を拵げ左腕を水平に挙げ「退け」と命じる。その後室の奥で悠然と立つ督郵へ二歩近付き、目を離さず玄德は言う。

「僕は安喜尉の劉玄德です。遠方より訪ねた者に応じず追い返すのとどちらが失礼なのですか。こうでもしない限り、卿は面会すらしそうに無かったため敢行致しました。卿が安喜縣で督郵としてどんな任務に就くのか、僕は縣尉として知っておく必要があり、教えて頂こうと参りました」

自分の不利な結果と為ろうとも明確に回答されると言う僅かな希望を込め、物腰の騒々しさとは裏腹に玄德は穏やかに告げた。そうすると督郵は顎を突き出し応じる。

「爾が安喜尉の劉玄德か。話には聞いている。豪侠の身分なのに軍功だけで縣尉に為った者が居ると。爾がその豪侠上がりか」

「豪侠」と言う発声に蔑んだ感情を玄德は感じた。

「不然(いいえ)、僕は豪侠だった事は無く、世々、大夫士の家です。それに例え豪侠だったとしても縣尉であるのに変わりはない筈です。どうか僕の質問にお答え下さい。卿は安喜縣でどの様な任務を行うのですか」

憤りを抑えようと話していたが、その声は次第に荒らげていた。督郵は態度を改めない。

「例え偽りだとしても、爾が大夫士と自称するのなら知っておろう。督郵は國內の縣を監察する

任務を有している。そのため、その内容を監察される立場の者に教える道理は無い。それに例え教えられる内容だとしても、正当な官途を踏まず軍功で成り上がった者などに教える気は無い。爾はどの口でそんな大それた質問をしているのか」

それを聞き怒りで血を滾らせ玄徳は決意する。

「陛下の御意志により我は縣尉に任命されました。そのため、何ら恥じる事は有りません。その様な縣尉として督郵に至上の礼を尽くしてきましたが、頑な態度での卿からの辱めに大夫士としてこれ以上、耐えられません...」

玄徳は後を振り向き命じる。

「入って来い」

再び戸が開き、憲和や吏卒が次々と中へ入ってくる。それを認め玄徳は督郵まで残り三步まで近付く。恐れを露わにし立ち尽くす督郵に玄徳は明確に告げる。

「我は府君の密教を被った。今、督郵を捕らえる」

見る内に督郵は顔を紅潮させ叫ぶ。

「陛下より詔書を承けた國により我は派遣されている。そんな我を捕らえればどうなるか判っているのか」

凄む督郵の座る牀の周りには何時でも取り押さえられる様に八人の吏卒が構えていた。玄徳は冷淡に言い放つ

「口から出任せを申しても無駄だ。我はその國の府君から密教を承けている。どちらが正しいか明白だろう」

話すと次第に督郵の面は青ざめていった。観念したのだろうと思い、玄徳の右手の合図により、周りの吏卒は督郵へじりじりと近付き、遂に牀に手や足を掛ける程までに為る。

やがて督郵は全く抵抗せず背中へ両手を捻り上げられる。玄徳は懐から縄を二本取り出し投げ渡す。遂に督郵は縛られ上半身の自在を奪われ、口には轡され声も奪われる。

「我の後に続き連れて来い」

そう命令を残し、玄徳は踵を返し大股に歩き出した。怒りで火照る額に冷気が当たる。振り返ると牀に置かれた履をそのままに督郵は室から抱え出されている。

門閤の外へ出て厩に至り、馬のような待遇を与えようとそこで命令を下す。

「督郵の首を 〇〇に繋ぎここで罰する」

その直後、玄徳は後から肩に手を掛けられる。振り向くと憲和が居て、間髪入れず小声で言われる。

「ここは伝舎の内側なので、督郵の従者に直ぐ止められる」

直ぐ玄徳は態度を改める。

「天にこの罰を見て貰うために、やはり場所を変えよう。馬で駆る。督郵を乗せ着いて来い」

改めの命令で、まるで何かの荷物如く縛られ声も出せない督郵は或る吏卒の馬の背に無造作に乗せられる。それを認めると玄徳は 〇〇から解いた自らの馬に乗り、勢い良く厩と前門から出ていく。それに乗馬の憲和や吏卒が続く。

道沿いに日が昇る方へと進む。督郵から言われた数々の侮辱を玄徳は心の中で繰り返し、憤怒

を維持しそれを活力へと変えていた。ある所で止まり道端を見遣り告げる。

「この辺りが縣境に在る。あの木の幹に縛り付けろ」

その命令通りに吏卒は白い息を辺りに漂わせ、長さの余った縄で幹に督郵を縛る。玄德は馬から降り、左右を見渡す。吏卒は次の命令を待っている。やがて告げる。

「未だ日の見えない頃から私の命令に良く従ってくれた。これで諸君の任務は完了だ。今ここで解散するため、各々、安喜城に帰還して頂きたい。我は今よりここで刑を執行する」

予想外の命令に吏卒は皆、呆然と立ち竦んだ。しかし、玄德が「解散」と強く言うと、皆、馬に乗り西へ去って行く。そこには玄德と憲和、縛りから逃れようとその場で激しく動き出した督郵が居た。憲和は玄德に眼差しを向ける。

「この先、どうする気だ。これでは安喜城には戻れない」

玄德は片眉を挙げる。

「元よりこう為る覚悟は有った。だが、そう為ったらどうするかは一切、考えていない。今は先ず督郵の傲慢な心構えから目を覚ましてやるのが優先だ」

そう言って玄德は督郵に近付く。自らが帯びる黄綬を銅印ごと外し、暴れる督郵の喉に食い込むよう木の幹ごと巻く。それを終えると督郵に囁く。

「動くときが喉に食い込んで呼吸が苦しくなるだろう」

それを実感したようで督郵は動かなくなった。玄德は督郵の轡と為った口の縄を解く。そうすると督郵は肥えた体を震わせながら睨んで告げる。

「我をどうする気だ。もう取り返しが付かないぞ。爾は軍功しか実績の無く粗暴だ。やがて中山國から追われる身と為り、間もなく捕獲され相応の重い罰を受けるだろう」

それを哀れむかの様に玄德は見下ろす。

「轡を取って安心した。未だその汝の腐った心構えが変わってないのだから、安心して良心の呵責無しに我は刑罰を与えられる。汝の喉に在る綬は安喜尉の綬だ。官吏に為るため、血の出る様な思いで勉学に励んでいた若き頃から欲しくて堪らなかった物だ。だが、汝の如く督郵の居る中山國での縣尉などこちらから願い下げだ」

言い放ち背を向けると督郵は罵声を浴びせかけてきた。そのどれも玄德の心を動かす事はできず、玄德は足元から落ちている太く長い枝を拾い上げる。

督郵に向き直り両手で枝を振りかぶる。その瞬間、督郵の口から罵声が止まる。玄德がその腹を打ち付けると督郵から悲鳴が出る。体を揺らした所為か綬が喉へ食い込んだ様で遅れて嗚咽如く声を出す。玄德は怯まずもう一度、枝で打つ。再び悲鳴と嗚咽の声が返ってくる。玄德は督郵を打つのを止めず苦しみの声を挙げさせ繰り返す。

百回余りも続き、既に悲鳴すら拳がらなく為っていた程だった。その頃に玄德は打つのを休む。そうすると嘎れた極小さな声が督郵から出る。

「このままでは死んでしまう。爾の気持ちを踏みにじった我が悪かった。我には悲しむ家族が居る。どうか助けてくれ」

そうすると止め留めの無い様な涙が督郵の両眼から溢れ出した。それを見て玄德は枝を地面に叩き付ける。

「今さらそんな謝辞を言って哀願をするか。もはや遅すぎる」

腹の底から玄徳は叫んだ。その後、督郵を幹に縛った綬と縄を解く。そうすると、督郵の体はその場で崩れ落ちて前から地面に伏し、殆ど動かないで居た。

無言で見守っていた憲和がそこに近付く。

「死んだのか」

眉を顰めた玄徳は振り返る

「まさか。気絶しただけだろう。我は肥えた所しか打っていない。痛み程は傷は無いだろう」

憲和は玄徳の顔を見る。

「もう気が済んだだろう。ここまですれば汝は刑罰を免れない。それを汝が甘んじて受けるとは思えない。だとすれば亡命するしか無いだろうが、行く先はどこか」

「話が早いな。考えてみれば我が縣尉に留まる道理は無く、それに天下は未だ我を不要とは思っていないだろう。残念だが、今までの私の経験を活かせる所は郡國府や縣府よりも戦場だ。また義兵を募って百姓を守る戦闘を行い、天下の役に立ちたい」

玄徳に憲和は口の片端を挙げてみせる。

「それならば残念ながら現状の天下は幾つも反叛を有している。并州の休屠各胡、幽州の叛烏桓、涼州の叛羌、徐州の黄巾賊と大きいのも四州で一州ずつ有る。青州平原國で黄巾賊と戦った時と違い、吾等には一兵卒も無いが馬が有るため、どの州でも行けるだろう」

玄徳は表情を緩ませる。

「關津を突破できるかに掛かっているだろうな」

玄徳の言う「關津」は關と津との二種の施設を意味していた。關は主に谷沿いの道を塞ぐ建造物であり、津は大河の前に在り向こう岸に渡す船の停留場でありその乗降を制限する建造物であり、共に人と物資の通行を制限し税を掛ける点で一致していた。通行に符や傳と言った官府が発行する木簡が必要と為り、出奔を志す二人は当然、持ち合わせていなかった。

「それは關津に阻まれた時に考えれば良い。義兵を率いている訳では無く二人だけであるため、身軽で気軽なものだ」

憲和が言うと、玄徳は頷き馬に飛び乗った。憲和も続いて自らの馬に乗る。

冷気が陽光によって抑えられる中、二人は朝日に向かって駆って行った。

軍勢の中で兜鍪(かぶと)を被り鎧を着けた劉玄徳は馬上より敵の陣形を見極めようとしていた。左右に小高い山が見え、まるでその間を吹き抜ける様な冷たく乾いた風が向かいから吹いている。その風に乗った血と汗の臭いは北から向かって来る黄巾賊の五千人程度から発せられている。

「そろそろ鼓が鳴り出すだろう」

まるで玄徳の心中を代弁したかの如くに左隣の馬に乗る簡憲和は言った。やがて戦場に於ける経験に裏付けられた両者の勘が的中する。辺りからの鼓の音が次第に満たされいく。

それを合図に先ず矢が前方へ飛んでいき、次に各隊が事前の作戦通り進撃する。

「進め」

玄徳は一隊を指揮する士吏と言う官職に就き、そのため号令を掛けていた。馬上の玄徳の周りに列する歩卒百五十人近くは徐に前進する。

玄徳の隊は官軍の左翼に位置し、山の麓での行進できる端を目指し左奥へと進んでいる。官軍は一旦、賊軍に正面激突を行うと思わせる動きを装いつつも、狭い平野での二方向からの突撃を加えようとし、左右二曲に分かれる。機動力において官軍の方に利が有る事を活用した結果だった。

黄巾賊の一群は正面から方向転換できないまま、その前方斜め二方から官軍に攻撃を加えられる。その左曲の中に居て作戦を忠実に施行しながら玄徳は自らの隊が活躍できる機会を伺う。官軍が敵勢より優れる点は機動力以外にも規律正しさと一人一人の勇猛さに有ると玄徳は見なしており、それ等を活かし自軍の他の隊より戦功を挙げようと考えていた。

自軍の総指揮は都尉の毌丘毅と言う姓名の者だった。京師たる雒陽で官軍の頂点に立つ大將軍の何遂高は黄巾賊に因る徐州での兵乱を憂い、配下の毌丘毅を派遣したと言う。先ず兵卒を募るため、徐州に南接する揚州に行くと玄徳等は聞きつけ、何所かで待ち伏せていた。そうすると揚州丹陽郡丹楊縣で募兵に応じ、玄徳等は毌丘毅に従軍するに至った。丹楊の兵卒は精兵として知られており、それが毅に抛る募兵の狙いと、玄徳は早々に気付いていた。今、実戦にて精兵の利点を最大限に玄徳は活かそうとしている。

募兵に応じた玄徳は成る可く軍内で上位に為る様に自らが経験した数々の戦闘を毅へ告げていた。それが奏功し士吏に成り得、徐州での討伐に参加できた。三年前より黄巾討伐のため徐州刺史に任命された陶恭祖と言う姓字の者が派遣されていたが、今年に入り黄巾の進寇が活発と為り雒陽に援軍要請をしていた。

毅の率いる官軍は揚州から江水を北へ渡り徐州に入り、北上すると下邳郡で十数に分かれて略奪を繰り返す黄巾賊と幾度か遭遇し、連戦を強いられていた。さらに北へ進むと、郡府の在る下邳縣の南、僮侯國の山間で黄巾賊と八度目の遭遇に至った。その布陣に際し玄徳は官職に応じ左翼の一隊を任されていた。

「突撃だ」

大声で玄徳は命令を発した。敵陣の乱れを感じ一気に崩そうと決断した。兵卒の多くは初戦か

ら八戦目とあって未だ経験が少なく、官軍に経験不足があったものの、それを補う勢いがあった。それが玄德を決心させていた。

「この調子だ。敵陣の手前から混乱が奥へと広がっている」

馬上の憲和は興奮を声に乗せ玄德へ向け叫んだ。それに強く同意するかの様に玄德は再び突撃の号令を発し、遂には自らも戟を両手に握り、敵陣へと飛び込む。

敵陣の左側面に楔を打つかの様に、玄德の一隊が接する所が深く刺さっており、混乱を伴うその罅が賊軍全体へと広がっている。やがて右曲からの官軍も勢い付き、玄德にとって戦っている最中でも敵陣の崩壊が実感できた。

午時前から始まった戦闘は西の空を赤く染める晡時には終了と勝利宣言を意味する鐸の音が鳴り響き、各隊は戦後処理に動き出す。それを終えた隊から順に昨日、南で設けていた軍営へと撤収する。

日が暮れ軍営の幾つもの箇所には設けられた菅が数千もの帷幕を照らしている。玄德が自らの帷幕に戻ると、そこに歩卒が待ち構えており毌丘毅が呼んでいると伝えられる。その場で兜鍪と鎧を脱ぎ、武冠を戴き袴褶のまま毅の帷幕を訪ねる。

衛卒の導きで中へ入ると、燭の光で薄明るい場の奥に、三十代で袴褶の上からも膂力を感じる毅が座していた。玄德は拝し、相手の勧めるまま対面する席へと座る。それを見て取ってか毅は話し出す。

「今日の戦いも足下は一隊を巧く指揮し全体の戦局を攻勢に変える程に活躍した。お陰で我が軍勢は連戦連勝だ」

毅の賞賛に玄德は顔を伏せ言う。

「僕へのその高いご評価、非常に嬉しく存じます」

「そこでだ。我は足下の軍功の数々を上表し、足下が縣丞に為る様にした。知っての通り徐州でも青州でも黄巾賊が盛んに為っている。官吏と雖も戦場に借り出される事例が多く為り欠員が多い。是非、足下を青州の縣丞に為って貰いたい。上表では青州北海國の下密丞に推薦しておいた」

毅の言う「縣丞」は縣の副官を意味しており、縣尉より高位の長吏であった。その事実を案じると玄德の気分は重く曇った事と為っていた。その思いを抑え込み口を動かす。

「折角ですが、縣丞に任命される詔書が下っても直ぐに辞めようかと存じます」

玄德の相手が暗がりの中でも疑念が見て取れるような表情を見せた。

「もしや我が軍勢に欠員が出ると心配している様だったらそれは不要だ。足下の活躍により徐州の戦況は良く為っており、それに比べ青州は散々たる状況だ。それならば足下如く優秀な將士は必要とされている所へ行って欲しい」

玄德は一呼吸置いて意を決し話す。

「不然。僕は依然、冀州で縣尉をしていましたが、罪を犯し亡命致しました。そんな罪人が戦場で軍功を挙げたからと言って再び直ぐに長吏に為るなどと恥晒しは出来ませんし、何よりそれだと僕は納得が出来ません。どうか卿に於かれましてはこれをお察し願いたく存じます」

「足下の考えは良く解った。そう言う事情ならば仕方ない。ならば引き続き我が軍に士吏として

居るのだな」

毅の声は冷氣漂う中でも暖かく響いていた。しかし、玄德はそれに甘んじようとしない。

「いえ、出来れば青州に行きたいと存じます。僕は自分をより必要とされる所へ赴きたいと考えます」

目に力を入れた顔を玄德は向けた。

「そうか、足下の義侠心には頭の下がる思いだ。だが、青州に行ったからと言って賊討伐に参加できるとは限らない。何か考えが有るのか」

感心を声に乗せた上で、毅は新たな質問を投げた。玄德は即答する。

「確信が有る訳では在りませんが、青州には当てが有ります。しかし、僕は亡命した身ですので、その前に先ず關津を通過できるかと言う懸念があります」

聴き終えると毅は膝を叩き元気良く言う。

「それならば、通行に必要な傳を我が作成しよう。これで青州まで気兼ねなく通れるだろう。そんな事で足下の能力を腐らせておくのは勿体無い。我にはこれぐらいしかできないが、どうであろうか」

その提案に玄德は伝わらないと判りつつも顔に喜色を見せた。その後、慌てて承諾した意で立ち上がり拝礼を見せる。

「有り難く申し出を承けたく存じます」

「ならば決まりだ。青州でも活躍するよう期待しておく。この徐州の黄巾賊は元々、四年前に西の豫州で蜂起した初年の黄巾賊が官軍に追われ流れ着いた賊だ。今、陶使君の活躍も有り徐州からは追い出されつつあり、その反面、北の青州へ拡がろうとしている。京師から見て東の方面はその様に為っているが、北の黄巾賊も活発に動いている...その辺りは我より実際に戦った経験の有る足下の方が知っているだろう。どうか」

毅の言う「陶使君」は姓に敬称を付けた呼称であり、徐州刺史の陶恭祖を指していた。そう言った刺史が殺された并州を真っ先に連想する。

「知っています。僕が戦った相手は徐州黄巾とは、別で冀州での初めの蜂起に因り群発した次の世代の黄巾賊です。それは并州に拡がったものの、西の涼州から来た休屠各胡に結果的に押し出され、冀州に戻ってきました。僕はそれと戦ったと言う流れです」

それを毅は両腕を前に組んで俯き聴いていた。そして面を挙げ言う。

「足下も知っていると思うが、その際、并州で休屠各胡に抛り南匈奴の單于が殺された。その後、実の所、南匈奴は休屠各胡に矛を向けず官軍に刃向かい、黄巾賊と合同で司隸河東郡へ進寇したと聞く。今は天下の各所で黄巾賊を始めとする反叛が拡がりつつあり、それを即座に討伐できない。全く嘆かわしいが、我等大夫士はより早期にそれ等を討伐し州郡を安らかにしなければならぬだろう。足下は言ってみればその先端を行っている訳だから、是非、奮闘して欲しい」

毅の考えを聞き、玄德は「唯(はい)」と力強く応じた。そして八箇月前に戦った并州から東方へ進寇した集団とは別の、もう一方の南方へ進寇した黄巾賊が攻勢を強めている事実焦りに似た強い驚きを感じていた。

「では、今晚はゆっくり休みたまえ。連戦の疲れも有るだろうし。明朝には傳を用意できる。残

念ながらこれからの軍事も有るため、祖道は行えないがな」

その毅の発言が合図となり、玄德は拝し退出した。

冷えた風の中で芭に照らされる軍営の道を歩いた。

向かい風の中で馬上の劉玄德と簡憲和は視界に東日で照らされる縣城を捉えていた。

それが目的地の青州平原國の平原城であると確信し、武冠を戴き袴褶を着た玄德は指差し進路を誘う。口には出さないまでも二人とも黄巾賊に遭遇せず辿り着けた結果に安心する。城門で毋丘毅により渡された傳を門卒に見せ、中へ入り、二人は國府へと向かう。到達すると同じく衛卒に傳を見せると、既に案内されそこから徒歩で國府内を案内される。

二人が案内され行き着いた所はある一室だった。戸が開いており、中から招く声が聞こえたため、履を脱ぎ内へと入る。その奥には武冠を戴き袴褶を纏った見掛け四十代の小さい男が席に座り顔をこちらへ向けている。それは玄德にとって忘れられぬ顔だった。軍司馬の劉子平だ。玄德と憲和はそれに向け拝礼する。

子平は着席を勧め、二人はそれに応じる。着席を認めた様で話し掛けて来る。

「劉子平だ。足下の耳の垂れ下がりや鬚の薄さと言った特徴有る顔を良く覚えている。そして今年に入り足下の名声も悪声も我の下へ届く様に為った。それにしてもあと一日早くても遅くても、吾は出軍しており平原城には居なかった。足下にとっては幸運だったな」

子平の言う「名声」が数々の軍功であり、「悪声」が督郵を私刑に掛けた事だと玄德は即座に気付き内心で不快に感じていた。それを押し殺し応答する。

「僕をご記憶に留めて頂き光栄に存じます。ところで昨年、叛烏桓に平原國が進寇されて以来、この状況はどの様に為っていますか」

玄德は本題を切り出す前に探りを入れた。子平は視線を外さず答える。

「足下も知っての通り、今、平原國は南の徐州から進寇する黄巾賊の脅威に曝されている。それ以前は叛烏桓の渠師である丘力居の軍勢が北の幽州から攻めて来た。この丘力居の軍勢は足下が平原國で戦った軍勢だったと言う訳だ。これにより國下の各縣が疲弊し治安が悪化した。この様に弱体化した平原國が復旧し終える前に黄巾賊が来てしまった」

子平は苦渋の表情を浮かべていた。玄德は今が本題に移る好機だと感じる。

「その徐州から来た黄巾賊ですが、ここへ訪ねに上がったのは他でも有りません...」

玄德の発言を遮るかの様に子平は話す。

「つまり平原國の軍勢に従軍し黄巾賊討伐に加勢したいと言う訳だな」

子平の理解の良さに驚きつつも玄德は「是」と答える。子平は眉を顰め口を真一文字に閉めてから答える。

「残念ながら足下を將士として迎えられない。足下は連絡を取れば將士では無く縣尉に任じる手続きをする様に府君から言われている者の一人だ。吾から報せ次第、府君は足下を縣尉に為す様に上表するだろう。丁度、平原國の高唐尉が空いており、確実にその官職に就くだろう」

その声には以前、義兵を引き連れて会った時の印象と違い、朗らかな感情が含まれている様に玄德は感じていた。毋丘毅の時の繰り返しに為ると覚悟する。

「恐らく悪声として卿のお耳にも届いていると存じますが、僕は罪を犯し縣尉を辞め中山國から亡命しております。そんな僕が高唐尉の如く長吏に為る資格が有るとは思えません」

玄徳の悲痛な声とは対照的に、子平は明朗な顔を崩さない。

「無論、それは知っている。それも含め敢えて足下を縣尉として迎え入れたい。これは吾だけで無く府君のご意志でもある。高唐尉は縣の長吏だが、平原國が黄巾賊に蹂躪されている今、長吏としてより高唐縣の將士としての活躍が必要とされる。昨年、足下が義兵を引き連れ吾を訪れた際、足下の能力に気付かず一兵卒として扱ってしまったが、各地で黄巾賊との戦いを勝利に導いた如く今度は將士として平原國に仕えて欲しい」

目の前の軍司馬だけで無く青綬を佩びる太守からも自分が必要とされている事実に玄徳は悪い気はしなかった。しかし、督郵を私刑に掛けたのを理由に卬丘毅からの下密丞への推薦を断った事実が心に癢りを作っており、前へ踏み出せずに居る。

「高唐縣とは確かここより南に在る縣でしたね。僕が徐州よりこちらへ上がった際に通り掛かりました」

返事を考える間を稼ぐために玄徳は話を逸らしたが、子平は眼差しを外さず喜色を見せていた。それは高唐尉への就任を前向きに考えていると子平が勘違いしているものと玄徳は気付く。その誤解を解こうとした矢先に、子平により話を続けられる。

「然。平原國の中央で西から東へ河水が流れており、その北側に平原縣が在り、逆に南には高唐縣が在る。そのため船を持たない黄巾賊は南の徐州から北上し河水以南で食い止められる。しかし、だからこそ河水以北より以南の方が黄巾賊からより略奪を受け易く、高唐縣は黄巾討伐に向けての重要拠点と為るのだ」

その説明に一早く反応したのが憲和だった。左の玄徳へ向く。

「玄徳、良い話ではないか。長吏の任務では無く將士の任務ならばこれまでの経験を活かせる。当に今、略奪の矛先と為る百姓を未然に守れる好機だ。勿論、汝は高官に為るのを諦めてないだろうが、依然、官吏に為るのは戸惑いが有るだろうから、実質は將士であれば今の着任に最適の官職なのではないか」

憲和の発言は的を射た物であると玄徳は感じ、何より「守れる好機」と言う語句は義を求める玄徳の心を強く動かしていた。玄徳は意を決し子平を見つめる。

「高唐尉の官職を謹んでお受け致します。微力ながら平原國のため最善を尽くしたいと存じます」

そう宣言し玄徳は拝した。顔を挙げると満足気に肯く子平の顔が在った。

「そうか遂に決心したか。では早速、仮の高唐尉として任地に赴いて頂く。後程、京師より正式に除する詔書が下るだろう。高唐縣は寡兵で加えて激戦が予想されるが、足下ならば善戦でき得るだろう。兵数の手助けは出来ないが必要な軍資が有れば遠慮無く言ってくれ。出来る限り助力しよう」

玄徳と憲和は揃って「唯」と言って拝し、その場を立ち去った。

室から出ると廊の先に在る堂が見え、その日の光が満ちる外へと二人は歩を進めた。

節二十

両梁進賢冠を戴き黒綬を佩び単衣を着て袍を重ねる劉玄徳は、朝に業務を始めてから半時も経たぬ頃に堂上で小吏から二枚の謁を受け取る。

その謁の文字を読むや否や玄徳は立ち上がり堂を降り、玉声と共に縣府の外へと足を運ぶ。前門を出ると、謁の書かれた通り、そこには懐かしい二人が袴褶姿で居る。

「關雲長、張益徳、良くここが判ったな」

玄徳は満面の笑みで再会と歓迎の喜びと予想だにできなかった事への驚きを表した。謁の文面を見ても半信半疑だったが、二人は間違い無くそこに立っていた。しかし、玄徳の心には依然、疑念が残っていた。どうして玄徳の場所を知り得たのか、知ったとしても何故に玄徳を見放さず訪ねに来たのか、この二つの謎が玄徳にあった。

雲長は照れた笑みを伴い応じる。

「徐州で黄巾賊討伐に従軍していると簡卿から書簡で知らされた。涿縣の治安が改善しつつあったため、義兵を後進に任せて愚は益徳と共に馬で馳せてきた」

玄徳が抱く一つ目の疑問が唐突に雲長により明かされた。涿縣に書簡で報せていたとは簡憲和から聞かされておらず、玄徳にとって腹の立つ事実では無く、寧ろ嬉しい驚きだった。しかもそれを看過せず、自ら馳せ参じると言う玄徳にとって最高の形で応じ、その行動力にも驚きを隠さなかった。

「では、一旦、徐州まで行ったのか」

驚きが先立って真に尋ねたい事柄からは程遠い質問に為っていた。雲長は依然、顔に照れを残したまま答える。

「然。涿縣から義兵を連れ出す訳にはいかなかった。だが返って二人だけの馬での移動だったため、軽く卿の足跡を辿れた」

そこまでの行動を起こす理由を訊きたいと玄徳は欲したが、縣府の前で立ち話をしているとふと気付く。

「そうかそうか。互いに積もる話も有るだろうから、兎も角、中へ入ってくれ」

そう言って中へ招いた。二人はそれに従い左側を歩く。玄徳は簡憲和を呼ぶよう衛卒に言伝する。

玄徳は右側を歩き、規則正しい玉声と共に縣府の正堂へ大股に進む。中門を過ぎ廷を横切り縣府の正堂に玄徳は東階から、二人は西階から昇る。堂上の東西で互いに拝した後、遅れて一梁進賢冠を戴き単衣と袍を着て青紺綬を佩びた憲和が現れ拝し、四人が席に着く。

「遠路ご苦勞であった...」

玄徳が言い終える前に益徳が口を挟む。

「何故、卿は高唐縣の縣令に為っているんだ。身は中山國から派遣された督郵を叩きのめし安喜縣の縣尉を辞めたのではないのか。それで一から都尉の軍へ加わり士吏として徐州での討伐に参戦していたのではないのか」

益徳の発言に思わず右隣に同席する憲和に振り向く。

「汝はそこまで書簡に書いたのか」

笑いながら憲和は「然」と答える。玄德は西へ向き直り話す。

「そこまで知っていれば話は早い。都尉の軍下で我は軍功を重ね青州の縣尉に任命されたがそれを辞退し、徐州より青州での黄巾賊が強大に為っていると知り、青州平原國の劉子平を訪ねた。そこで黄巾賊と戦う目的で高唐尉に為るための推薦を受け、任地に行ったが、実際に詔書が下ると任命されたのは高唐令だった。京師(みやこ)の朝廷でも今、能吏では無く將士が求められていると漸く覚ったのだろう」

真摯な表情を玄德は見せていた。益徳は食い入る様に見つめている。

「身も兄も、義に因り黄巾賊を討伐し、この地を平穩にしたいと願っている…」

益徳の言う「兄」は雲長であった。今こそ二つ目の疑念を晴らす機会だと玄德は感じ、口を挟む。

「勿論、この地に居れば黄巾賊と幾度も矛を交えるだろう。ところで諸君は何故、我の下を選んだ。常山國での黄巾討伐を話せば、諸君は何処でも厚遇で迎えてくれるだろうに」

意を決したその質問は雲長の表情を変えなかったものの、益徳を啞然とした顔にしていた。やがて益徳は笑みを伴い答える。

「常山國で黄巾賊と戦って身は良く判った。戦場での活躍では身は殆どの者に負けない自信は有る。だが、軍備や戦略ではやはり卿が居なければ、身や兄の力が発揮できないだろう」

その発言は玄德が抱く二つ目の疑問を解くのに充分だった。その疑念は何時しか大きな喜びに変わっていた。しかし、新たな疑念が玄德の心に湧き、今度は率直にそれが口から出る。

「それはとても嬉しいが、諸君は憲和の書簡で我が縣尉の公務を遂げられず亡命したのを知っているだろう。それでも呆れずに我の軍に加勢してくれるのか」

今度は雲長が応じた。

「卿が義を貫いた結果ならば何も呆れる事は無いだろう。寧ろ義を貫いての亡命は愚の方が先輩だ。愚はその過去を今でも誇りに感じている」

その発言に玄德は心底から安心し得た。そして、雲長の言う通り、本貫地である司隸河東郡から亡命した過去を思い出していた。雲長と益徳の二人が慕って涿縣からわざわざ来たと考えたと、玄德の胸で嬉しさが増していた。

それに賛同するかの様に益徳が語句を加える。

「郡國でも縣でも義兵でも兎も角、卿の軍に加わり戦えれば良い」

その若く覇気の有る発言を玄德は頼もしく感じていた。歡喜の感情に酔ってばかりも居られないと玄德は気を引き締め、具体的な軍事に気を向ける。

「勿論、それは我が願う事だ。汝等は將士として配属させたいが、それには先ず何らかの官職について貰う。それが官軍に入る第一歩だ。憲和と同様に縣令の門下吏に為るのが良いだろう。門下であれば今の縣吏に気兼ね無く任命できる」

玄德の提案に雲長と益徳は「唯」と答えた。ここで憲和が口を挟む。

「旧交を温めるのは良いが、黄巾賊の大軍が迫りつつあり、その軍議が必要だ。良い機会だから將士として雲長にも益徳にもそれに加わって貰おう」

その提案に玄德は「諾」と答えた。左右を見回した後、続けて告げ始める。

「では先ず戦況報告だ。先程、憲和が申した様に南から黄巾賊の大軍が迫りつつ有る。纏まりの無い集団なので、何日後にここへ攻めて来るか予測が付きにくい。また、実数を掴みにくいのが二万人は居ると思っても誤りでは無いだろう...」

亦も言い終える前に益徳が口を挟む。

「それに対抗する高唐縣の兵力はどれぐらいなのか」

やはり一番若く経験の少ない益徳でも真っ先に疑問を呈したか、と玄德は内心で納得していた。

「縣の兵卒は五百人弱だ。最近集めた義兵を合わせても八百人程度だ」

率直に玄德は答えると、対面する二人は苦い顔を見せた。雲長は発言する。

「その兵力差であれば平野での戦いは望めそうに無い。まともに考えれば高唐城に入っただけの防衛戦だろう...」

縣令として玄德が目下、直面している問題は、雲長に抛り明確化された。答えは防衛戦しか無い筈なのに、玄德は腑に落ちないで居た。そんな思いを抱く中、雲長は発言を続ける。

「...あるいは人命を優先し、吏民を挙げての高唐城からの一時的な撤退だ。幸い高唐城から西に半里も無い所に河水が在るため、船さえ手配できれば充分それも可能だ」

玄德にとってその提案は思いも付かない事だった。言われてみれば守るべき庶人さえ一時的にせよ避難できれば、圧倒的な兵力差に抛る全滅を免れられると玄德は考える。

「その案は思い付かなかった。妙案なのかもしれない。この戦況では検討の余地は充分に有るだろう」

玄德は話しながらも憲和に視線を遣った。そうすると憲和は立ち上がり言う。

「より具体的な軍議に移るならば、地図を持って来る。その間に玄德は北側の榻に座り、残りは席を南に移しそこへ座っておくんだ。何時までも雲長と益徳を客扱いし西に座らせるのも変だろう。もう高唐君の門下吏なのだから」

聴き終わると二人は「唯」と答え、早速、立ち上がり席を持ち上げていた。玄德は笑いで吹き出すのを堪えながら、ゆっくりと北に置かれた「榻」と呼ばれる一段高い座具へと歩きそこへ座す。

玄德の視界には北面する新しい門下吏二人が居て、その向こうに寒気の中で朝日を浴びる中庭が見えていた。

節二十一

縣府内で聴事と呼ばれる室で、袴褶を纏う劉玄徳が覚悟を決め兜鍪(かぶと)を被り鎧を着けていた。

丁度、軍装が整った頃に歩卒が血相を変え声を出し戸から中へと入り肅す。玄徳は手で指図して報告を促す。

「高唐君のご命令通り、縣城内の庶人を西の河水に誘導していますが、一人だけ頑なに自身の邸宅から動こうとしない者が居ます」

結局、玄徳は河水の近くの津に船を呼び縣下の庶人をそれを乗せ一時撤退させる策を選んでいた。

「それは誰だ。どんな者か」

「劉平と言う姓名の大商です」

玄徳は眉を顰めた。その姓名に聞き覚えは無かったが、劉子平と一字違いだっただけ印象に残り、何より商人で劉姓を有する者だと言うのが心に引っかかっていた。自分にもそう為る可能性があったのかも、と一方的な親近感を抱いている。

玄徳は急ぎ戸から出て外へと早足で歩き出す。小吏が後から追い付き、劉平が居る場所へ案内する。

縣府から南東へ暫し歩いた所の門に導かれ、玄徳は構わず奥へと歩く。何度か門閤を過ぎ、或る堂上で南向きの牀に座する男を見掛ける。それが劉平だと確信する。玄徳は履を着けたまま階を昇り、平の前に立ちはだかり言う。

「我は高唐令の劉玄徳だ。足下は何度も聞いたと思うが、ここに居ても黄巾賊に拉致され高額な金銭を要求できる質として扱われるか、その場で殺されるかのどちらかだ。命が惜しければ、皆と共に西へ逃れるのだ」

熱心に説く声に、平は小さい声で告げる。

「卿もこの広い邸宅を通して来たでしょう。それも愚が築き上げた財産の一部です。愚が心血を注いで貯めた莫大な宝をみすみすみ黄巾賊に譲りやる様な行為はしたくありません。それであればここで殺された方が良く考えています」

その考えに玄徳は全く同情する気も理解できる気も無かった。溜息を一つし話し出す。

「その財産は足下一人で築いた訳では無いのだろう。宗族を含め多くの者の協力が有って初めて成功する事だ。逆にそれ等の協力者は足下を必要としている。ここで黄巾賊に殺されれば人生の支えを失う者が多く出てしまう。それに足下は財産は失うだろうが、その様な人材は失わない。それさえ繋がりを持っていれば再び同じ量の財産を生み出せるだろう」

平は渋々、立ち上がった。玄徳に眼光鋭い顔を向けて言う。

「その言を信じておきましょう。人が居れば財産を復旧できると」

牀から降り履を足に着け、堂上を横切り階で降り、広い中庭を進み、平は外へと向かう。玄徳はその後を追う。

その背を見て、荒廃するだろう縣城の復興を早くも感じていた。

袴褶を着て兜鍪(かぶと)を被り鎧を纏う劉玄徳は慌てて楼の上へと昇り、北風を背に中空の日に照らされる遠くを望んでいた。

視界に多くに黄色の粒が遅々として押し寄せる光景が在る。それは黄巾賊の大軍であると知っていたが、玄徳自身の目で見えて改めて実感を抱く。他方、後方の眼下を見下ろすと、八百人弱の兵卒が待機している。急ぎ楼の階を下り城門の内側に立ち、關雲長に報せる。

「黄巾賊は遅速だが、西の船に乗り込む高唐縣の庶人に追い付くには充分だろう。庶人を誘導する簡憲和や張益徳が幾ら有能だからと言って如何ともし難い事実だ。時間稼ぎの必要が有る」

雲長は口の端を挙げ告げる。

「それこそ卿や愚の出番だ。大いに戦い足止め致そう」

その発言で大いに自信を持ち玄徳は決意した。玄徳は自らの馬に乗り号令を発する。

「出軍だ」

その命令に呼応し、一兵卒が城門に懸かる肩と呼ばれる横木を取り去り、急ぎつつも重々しく門を開く。

広がった視界の左右に軍勢が充ちていた。後方から鐸の音が鳴り始める。玄徳は旖を右手で持ち前方を指し示し、歩卒の動きに合わせて馬を前へ歩ませる。

高唐縣の全軍が城門から出たのを見計らい、玄徳は旖を左右に振り歩みを緩める。そうすると鐸の調子が変わり、後の足音が左右へ広がる。

やがて自軍の陣形が整い、再び前進する。徐々に敵勢の姿が大きく為り、玄徳は自らの胸の鼓動が高まりつつ有るのを感じていた。左を向き馬上の雲長だけに聞こえる一言告げる。

「この矛を交える直前が一番、緊張感が有って、或る意味、心地良い」

雲長は「然」と応じ、一言返す。

「それは単なる強がりから来るものかも知れないが、だからこそ怯まず戦える」

玄徳は笑みを含みつつ前に向き直った。

敵陣との距離を測りつつ機会を伺う。そして玄徳は或る時点で旖を前へ振り下ろすと同時に号令を発する。

「放て」

玄徳の後方の弩から前方へ矢の群が飛んで行く。少数であるため打撃を与えられないだろうが、敵卒の注意を引くには効果が有るだろうと玄徳は見なしている。再び距離を見て機会を伺い、旖を前へ振り下ろし号令する。

「攻めろ」

玄徳は旖を戟に持ち替え、雲長と共に馬を前へ駆る。それに自軍の前から順に走り出す。

敵陣へ玄徳と雲長は人馬一体と為り飛び込み戟や矛をそれぞれ振るい敵卒を刺し倒し掻き乱す。遅れてその混乱した敵陣へ自軍の歩卒が雪崩れ込み混乱の穴を拡げる。

目の前の敵卒を倒しつつ、玄徳は常に周りや戦況全体に気を向けている。見えている全体の状況は玄徳率いる官軍に賊軍が群がりつつある様子だ。敵勢は遅い動きだとは雖も包囲されない様に細心の注意を向け、一所に留まらない様に玄徳は自軍を誘導する。

丁度、向かって右、西方向へ戦線を移動させており、その玄德の狙いは敵勢が河水の津に向かわない様に注意を引き付けると言う事だった。官軍は攻勢に出ているものの、それが賊軍に響かず、次第に自卒の疲れが所々、露わに為りつつ有った。玄德は雲長に声を挙げ伝える。

「徐々に後退するぞ」

矛を巧みに突く雲長から「唯」と返ってきた。事前に決めた通り二つの集団が交互に出ては戦うと言う波状攻撃を行い、全体としては後退を始める。

しかし、その作戦が裏目に出て、返って敵軍を勢いづかせており、玄德は自軍の兵卒が倒される光景を数々目の当たりにする。そのため、焦りと無力感を募らせていた。

絶望的な考えに囚われていれば、十分な動きは出来ないと自らを叱咤し、目下の戦いに気をつける。幾度も前進し戟を振るい後退する動作を繰り返す。

気付けば賊軍の多くは高唐城への進路を取っている。官軍を攻撃するより城内で略奪する方が旨味が有ると感じたんだろうと玄德は判断する。雲長に近付き声を飛ばす。

「あれから一時は経った。もう全員、津から対岸へ離れただろう」

玄德の判断に雲長は「然」と返し同意した。それで意を決し声を張り上げる。

「撤退だ」

戦い抜いたと覚り、丁度、自軍の中へ撤退していた玄德は命令を発した。それと共に一つの鐸音が鳴り響く。しかし、馬上から見える光景は激減した自軍の兵卒の様子であり、愕然とした玄德は達成感とは程遠い感覚に落とされた。

依然、官軍に攻撃を仕掛ける賊軍が居るものの、害する程の勢いは既に無く、官軍の撤退は可能であった。

見る見る内に自陣は敵陣から離れていき、疎らに敵卒が追う状況だった。念を押し玄德と雲長は馬で繰り出し追って来る敵卒を一人一人攻撃を加え追撃を諦めさせる。

気付けば敵勢の殆どが高唐城の中へ入ろうと城門へ群がっており、玄德率いる軍勢はまるで無関係の様に距離を空けていた。それでも警戒を解かず、すっかり少数と為った官軍は賊軍の方を適度に向いて遠ざかった。

高唐城の庶人を黄巾賊から逃がす作戦は狙い通り成功に終わったが、予想外に自卒が凶刃に倒れた結果に玄德は自らの不甲斐なさに心を痛めていた。

寒風は依然、誰も分け隔て無く身体に吹き付けていた。

節二十二

まさか多くの者を失ってこの前門を潜るとは思わなかったと劉玄德は西日の中で見上げた。

鎧を外しただけで未だ袴褶から着替ええないまま、玄德は簡憲和、關雲長、張益徳と共に軍司馬の劉子平を訪ねる。玄德が平原城で聞く所に抛ると、黄巾賊に反撃するため子平は國府に待機していた。

決意し玄德は子平の居る堂を訪れる。謁を小吏に渡すと、直前の門まで僕者三人を引き連れた、頭一つ小柄な子平が出て迎え、より小さく為ったかの様に頭を下げ肅し中へ招き入れる。軍司馬より高位である縣令としての礼を尽くされ、立場が違えばこれ程に違うのかと密かに感心しながら玄德は中庭を左側で横切り堂下へ歩く。二つの集団は主と賓とに東西分かれ、各階から堂上へ昇り、東西の席で互いに拝してから対座する。

「高唐君に於かれましては軍務より無事のご帰還に及び喜ばしい限りです」

「高唐君」は高唐令である玄德への敬称であり、子平から聞き慣れない語句に照れつつも戸惑いながら、相手の認識の誤りを玄德は聞き逃さなかった。

「確かに僕は無事でしたし、何より高唐城の庶民を一時、避難させる目的は達成できました。しかし、高唐城の兵卒並びにこの作戦のため募兵した者の多くは黄巾賊の凶刃に伏しました。八百人余り作戦に従事していましたが、この平原城に達した者は二百人程度でしか有りません。とても無事だと言って喜べる状況に在りません」

玄德の感情を込めた吐露に、子平は同情したかの様に眉を顰めた。

「高唐君のご心労お察し致します。だからこそ、その悔しさをこれから先の高唐城を奪還する戦いにぶつけご尽力して下さい。今、その為の兵力が平原城に集結しつつ有ります。これより平原國の官軍は賊軍への巻き返しの戦端を將に開こうとして居ります」

次第に子平の声に覇気が帯び始めていた。それに対し申し訳無く感じつつも玄德は自らの決意を口に出す。

「残念ながら僕はそれに参戦できそうに有りません。何故ならば高唐令を辞そうと考えているからです」

それを聞き再び子平は顔を顰めた。

「高唐令の地位に不満でも有るのですか。望み通り將士としての官職ではないのですか」

子平の理解を得られないだろうが、憲和等と決めた事を告げなければならないと玄德は意識する。

「否、望み通りの官職でしたし、実際、高唐城に住む庶人を守るに至りました。しかし、高唐縣の多くの士卒を死なせてしまいました。そのため、僕に高唐令の資格は有りません」

子平もそれ並んで座る僕者も誰一人理解を示す表情を見せないで居た。

「賊討伐に犠牲は付き物です。高唐君は充分にご活躍されました。これからも平原國に高唐君のお力が必要と為るでしょう。お考え直しをして頂けないでしょうか」

以前と顕著に変わった子平の話し方に馴染めないと玄德は自覚する。まるでそれを元に戻すかの様に、玄德は徐に帯から黒綬を外しその端に付く銅印と共に前の地へ置き言う。

「卿も僕と同じ劉姓ならばお判りに為るでしょう。陛下と同じ劉姓の者にとって陛下より任地を授かり郡國や縣を統治する太守國相や長吏は特別な意味が有ります。縣城を明け渡し、その上、その士卒まで失ってまで縣令を続けるだなんて劉姓の大夫士として耐えられません。何より陛下に顔向けできません」

声で触れた劉姓についての理屈よりも、玄德自身が官吏の道を志し紆余曲折を経て縣令にまで上り詰めたものの、その職務とは無関係の將士として任務に就き敗戦してしまう状況に対し抱く複雑な思いが、玄德を免官に走らせていた。子平は苦い顔を向ける。

「卿がそこまで仰るのでしたら、高唐令を辞するのを敢えて止めようとはしません。しかしながら、將士として高唐城奪還に参戦して頂けないでしょうか」

この願いについても玄德は予め答えを決めている。

「僕が見た限り平原國には黄巾賊に打ち勝つのに十分な力が有り、僕からの微力は必要無いでしょう。それに僕は自分をより必要とする所へ行きたいと存じます」

真摯な眼差しを玄德は向けた。顔を顰めながらも子平は肯く。

「善いでしょう。平原國も卿を無理に引き留める訳にはいきません。愚から府君に報告しておきます。それに縣令の官位は陛下がお決めに為られます。平原國は関与しません。高唐令の印綬はお納めに為って下さい。再び平原國が賊軍の脅威に曝される時が来れば、卿には是非、ご加勢して頂きたく存じます」

玄德は心から力強く「諾」と答え、徐に銅印黒綬を再び帯びる。その後、玄德等四人は立ち去る意味で拝する。

早々に堂を降り縣府の外へと歩き出していた。途中、憲和が小声で話し掛ける。

「汝の信念は判らなくもないが、本当に『自分をより必要とする所』への当てがあるんだろうな」

玄德は眉を顰めつつも口に笑みを含み答える。

「汝は安喜縣から亡命する際に、残念ながら幾つもの州で兵乱が生じているため、どこでも我等を必要とするだろう、と言った旨を言った。今も同じ状況だ」

そうするとまるで呆れたように憲和は言う。

「徐州から青州へ入った黄巾賊と戦ったが、それ以外にも依然、并州の休屠各胡、幽州の叛烏桓、涼州の叛羌が横行していると言う訳か。青州以外に汝の適所があるとは思えない」

玄德は答えず惟、真っ直ぐ前を向くのみだった。

懐に在る自ら書き高唐令の捺印した傳を右手で握り締め、玄德は厩へ歩を進めた。

節二十三

所々雪が残る平野が闇に覆われつつある中、遠くで仄かに明るくなる場所を動く馬上から視界に捉える。

それが菅の灯りであり目的の軍営だと知ると、同じく馬で駆る他の三人に、袴褶を着るが両梁進賢冠を戴く劉玄徳はその旨を叫び伝える。赤幘と袴褶をそれぞれ身に着けた簡憲和、關雲長、張益徳の三人は「唯」と口々に答える。

軍営の牙門に到達し、内側を望むと各所で帷幕を建てる途中であり未だ設営を終えてない状況を玄徳は知る。それでも牙門では来訪者四人の存在に気付き、次々と歩卒が武器を携え集まる。敵卒と見なされ争いに為っては困ると玄徳は馬上から大声で話し掛ける。

「我は劉玄徳だ。この軍営に我と同門の公孫騎都が居ると聞く。誰か案内してくれまいか」

玄徳の言う「公孫騎都」は同じ盧子幹の門下であり兄として慕う公孫伯圭を意味していた。刃を向けた十数人集まる歩卒の中から、身長八尺で屈強な肉体の持ち主だが見た目が年二十未満の男が前へ出る。その男は声を出す。

「愚は公孫使君の親近将である趙子龍と申します。先ず馬から降りて下さい。そうしないと警戒を解けません」

趙子龍と名乗る男の言い分を然と感じ玄徳から順に降馬する。そうすると兜鍪(かぶと)と鎧を着用した趙子龍は肅し、四人は数歩、近付き答肅する。子龍は話し出す。

「公孫使君は今騎都尉では無く中郎将です。何か卿の身元が判る物は有りますか」

子龍の言う「中郎将」は皇帝の側近官である中郎が軍勢を率いる將士と為る者であり、皇帝の使者として尊重されているため「使君」と言う敬称が付けられていた。それを聞き真っ先に玄徳は四年前に蜂起した黄巾賊の討伐に当たった際に師の盧子幹が当時、北中郎将に任命された事実を思い出した。その公孫伯圭の昇進に驚き、懐から自らの身分を示す、刺と呼ばれる一尺の木簡を取り出して渡し、また自ら作成した傳を見せ、さらに帯びる銅印黒綬も見せて言う。

「そこには我が青州平原國の高唐令と記されているが、今は辞している」

納得した表情を子龍は見せていた。

「この傳にある印は卿により捺されたのですね」

その問いに玄徳は「然」と答える。子龍は肯く。

「善いでしょう。卿を使君の下へ案内致しましょう。着いてきて下さい。馬はこちらで預かります」

そう言って子龍は背を向け牙門内へ歩き出した。その発言に合わせ歩卒数人が近付き、玄徳等の馬は門内へ引かれて行く。玄徳は慌てて白い息を吐きながら子龍の後を追う。

菅の灯りに照らされ雪が目立つ中、ある帷幕の前で立ち止まる。子龍は振り返り言う。

「ここが幕府です。使君は依然、設営の指揮に当たられています。しかし、間もなくお戻りでしょう...」

いよいよ伯圭と再会できると思うと玄徳は自らの胸の高まりを感じ、逸る心で思わず子龍の声を遮り言う。

「気を遣って頂き有り難い。間もなく来られるのであれば我等はここで待たせて貰う」

それを聞くと子龍は肅し去っていく。

幕府の周りには幾つかの菅が配されており辺りを照らしているとは雖も、玄德は伯圭がどこから現れるか知らなかったため、忙しなく首を動かしている。他の三人は話もせず落ち着いて立っている。

やがて東の闇に人影が現れ近付いてくる。その人影は近づくに従い、菅の火に照らされ明確な姿と為る。それは玄德が心待ちにしていた者だった。玄德より十歳年上で、年を取っても依然、整った目鼻立ちがそこに在った。それが公孫伯圭だと確信する。やがて男は口を開く。

「劉備」

玄德は自らの姓名を呼ばれた。玄德等四人は一斉に拝する。再び立ち上がった頃を見計らった様に、公孫伯圭は肅した後、中へと招く。

帷幕の内側では燭が点されており、所々に席が敷かれる様が照らされる。伯圭は東側を北へ歩き、それに合わせ反対の西側で玄德等一行は歩く。伯圭は一番奥の南面する榻に座り、玄德等は対面する席に並んで腰を下ろす。それを認めたのか伯圭は話し出す。

「足下とは盧師の門下で学んでいた時以来だから、十三年ぶりに為るのだな。我と足下が共に学んだ時期は半年も無かったが、今でも昨日の事の様に思い出せる。それ程、印象的だった」

自らの師匠に当たる盧子幹に言及し、遠い目をして朗らかに語った。玄德は緊張を解せず、先ず必要な過程を踏むべきだとし、立ち上がり一尺の刺を差し出す。受け取られ燭の火を頼りにまじまじと読まれる。

「劉備、玄德と字(あざな)し、年二十八か。それに青州平原國の高唐令とは昇進したものだ。当時、足下は加冠しておらず字も無い年十五の使男だったと言うのにな」

刺を右手に持ちながら、顔を綻ばせながら伯圭は玄德の顔を伺っていた。玄德はここ数年の出来事を思い出しつつ照れながら応える。

「昨年、張純の乱が三州に広がりつつ在った際、卿が盧師の門下に出した書簡は、どこにも仕官していなかった僕の下へも届きました。それを見て一介の什長でも良いので何かしら反叛の討伐に加わろうと思ひ、青州で叛烏桓と戦ったり、黄巾賊を討ったり、その他の賊とも撃ったり歴戦しました。そうやって紆余曲折し何とかその官職にありつけました。しかし、赴任地と為る平原國は丘力居の軍勢に進寇を受けていて治安が悪く、結局、弱体化した縣の軍勢が強まる賊に敗れ、帰る宛が無くなり、こうして使君の前に数騎を引き連れ来ている訳です」

その発言に対し伯圭は口元を綻ばせながら目を細める。

「もう我が中郎將だと聞きつけているのだな。そう言った根回しの良さは懐かしい。して我にどうして欲しいのだ」

伯圭が口にした最後の語句で、玄德は漸く本題に入れると胸を躍らせる。

「そう仰って下さると話が早いです。是非、僕をこの軍の將士の末席にお加え下さい。僕も僕の配下も戦闘経験は豊富です。青州で烏桓とも戦った経験が有ります」

相手が承諾したくなる様な熱気を込め玄德は訴えかけた。伯圭はそれに乗らず冷静を装い返答する。

「善いだろう。我から上表し足下を中郎將の別部司馬に就けよう。任命の詔書が下りれば、その時に高唐令の印綬を返還すれば良い...」

その快諾に玄徳は心底で安心した。しかし、伯圭はそこで話を終えない。

「但しこの反叛が鎮静すれば、足下には職を辞して貰う。盧師の下で五経を学んだ者が一介の將士に就いてるのは、適材では無いし、何より盧師に顔向けができない。反叛が終わればこんな辺郡に留まるのでは無く、京師に行き世の見聞を広めると良い」

伯圭の言い付けに、玄徳は「唯」と即答しその場で立ち上がり拝した。頭を上げる頃に伯圭は笑みを見せ再び話す。

「では、仮の別部司馬である足下には後続の荷車の護衛に当たって貰いたい...」

具体的な話になると判断してか、玄徳は懐から版と呼ばれる一尺の木簡と筆を取り出し、書き留めようとする。その動作の後に伯圭に抛る説明が再開される。

「...先の戦闘で大勝したものの、張純を取り逃がした今、その行方を追っている。その過程で足下との因縁も深い丘力居の叛烏桓と遭遇した。連戦し連勝し目下追撃している...」

伯圭の言う「丘力居」は叛烏桓の渠師だった。昨年、丘力居は叛烏桓を率い南下し青州にまで進寇し、州郡の官軍の多くは激しく抵抗した。その際、玄徳は平原國の軍司馬の劉子平率いる官軍に騎卒として参戦したものの、初戦で傷を負い戦線離脱したと言う苦い過去が有る。そんな叛烏桓に今、伯圭率いる官軍は守勢に回るところか優勢に戦っており、主目的は丘力居への追撃だと言う。ここは玄徳の故郷である涿郡と同じ幽州であるが、そこより千五百里も東へ離れた辺境の遼東屬國であった。玄徳にとって状況も場所も異質に感じ馴染みの無く、把握するために気を引き締める必要が有った。

「...だが、騎卒中心の敵勢に対し、一般的な歩騎混成の自軍は追い付けないで居る。そこで一時的に自軍の騎卒だけを先行させようと考えている。足下にはその騎卒では無く後続の歩卒や荷車の部曲に着いて貰いたい」

伯圭が話し終えても、玄徳は要点を版に書く必要が有ったため、遅れて「唯」と返した。伯圭は頬を緩ませる。

「では、堅苦しい話はここまでだ。折角、盧門下の兄弟分が十三年ぶりに再会したのだから、この十三年間、どう過ごしてきたかお互いに話し合おうではないか。勿論、足下の配下も話に加わって貰おう。」

その提案に玄徳は満面の笑みを浮かべ「唯」と応えた。言われてみれば、状況把握に気を向けるのが過ぎ、自らの兄との十三年振りの再会であると言う事実を感慨も含め忘れていた。

伯圭は左右に顔を向け、暗がりの中でそこに居合わせた面々を一望し、口を開いた。

節二十四

夕闇の曇り空の下、別部司馬として兜鍪(かぶと)と鎧を着け軍勢の先頭に居る劉玄德は、馬上から半里程先の城門を凝視する。その官位の証である黒綬の一端は、動き易い様、腰に帯びる虎頭鞞囊と呼ばれる袋へ収められる。

玄德の後には歩卒と荷車が列を為す。先行する中郎將の公孫伯圭の騎卒だけから成る軍勢を追って、幽州の遼東屬國の境を北へ越え、遼西郡へと入り、遼西郡府が在る陽樂城へと至った。

既に陽樂城では中郎將の後続の軍勢が来る報せが届いている様で、南の城門から騎馬が四頭飛び出し駆け近付く。行軍を止めてはならないと、玄德はその四頭の元へ駆る。

行軍する軍勢と陽樂城の間で馬を降り互いに肅す。直後、軍勢と共に城内の駐屯地へと導かれる。南の城門を過ぎると、郡府の在る縣城だと言うのに庶人に抛る活気が玄德には感じられないで居た。だからこそ確かに叛烏桓の脅威が有るのだと感じていた。

辺りが闇に覆われる中で、それに抗う様に陽樂城の大街に苜を等間隔に配し着火させる。それ等の灯りの中で玄德は設営を指示する。その間にも後続の軍勢が来て、同じ様に各將士の指示で設営し始める。

自らが指揮する歩卒の設営を終え、帷幕に泊まり、次の日の鷄鳴時に、玄德は赤幘と袴褶を身に着け、後続の軍勢を統轄する將士を訪ねる。

その將士の帷幕を訪ねると、直ぐに外へ角張った体格を持つ男が迎えに来て肅し中へと招く。それが公孫伯圭配下の古くからの將士である田楷だと知っていた。

帷幕の中には既に他の將士も来ていて、薄暗い中で座り並んでいる。簡憲和、關雲長、張益徳の三人の他、公孫伯圭の従弟で人並み以上の上背を有す二十代の公孫越や、小柄で四十代の單經等將士が十七人が居る。

田楷は一番奥に南面する様に座り、玄德はそれより手前に北面し座る。それを認めてから楷は告げる。

「昨日は朝から慌ただしく、行軍初日だと言うのに碌に將士を揃えての軍議が出来なかったため、二日目に入り漸く遼西郡のこの陽樂城でそれを行う事に至った。近頃、使君の軍に参入した者も多い事も有り、知っている者にとっては回りくどいだろうが、丁寧な戦況を告げる」

一同は「唯」と答えた。それを見て取り、楷の合図で小吏により地図の書かれた布とあれこれ書かれた幾つかの碁が眼前の地に拵げられる。楷はそれを見つつ言う。

「前の中山相である張純は烏桓族の一部を煽り、昨年、幽州で叛乱を起こした。その後、烏桓の渠師も巻き込み、幽州遼西郡にて集落五千を領し王を自称する丘力居、並びに幽州遼東郡にて集落千を領有し峭王を自号する蘇僕延を自軍に引き込んだ。官軍との度重なる戦いで現在、張純は行方知れずだが、丘力居は騎卒を率い執拗に公孫使君の官軍に戦いを仕掛けてきた。しかし、公孫使君は連戦連勝で逆に丘力居の軍勢を追撃する立場と為り、それに追い付くため、歩兵や荷車を我等に一時的に預け、騎卒だけの編成で進軍された。一時とは雖も、我等としてはこの陽樂城にて荷車を守るのが最優先であり、使君からの召喚のご命令が下れば直ぐに陽樂城から発たなければならない」

楷の発言には歴戦の重みが有った。玄德はここより遙か南の青州平原國で昨年、叛烏桓と戦い、敵の騎卒によりあっさりと負傷し落馬したのを思い出していた。今まで戦った黄巾賊の軍勢で騎卒の割合が少なく強くも無かったため、気を引き締めて対さなければならないと考えた。

若い公孫越が真っ先に反応する。

「使君ならば間も無く丘力居の軍勢に追い付き、直ぐに加勢する命令を下すでしょう。そうであればこの全軍を以て討伐致しましょう」

その勢いと覇気の込められた越の声が場の雰囲気をよく表していた。玄德等にとって始まったばかりの戦いであったが、楷や越にとって長期に渡る連戦であり、遂に丘力居を追い詰めたと言う達成感を抱き始めているのだろうと玄德は察する。だからと言って与えられた役割上、それを惟看過する訳にはいかなかった。そのため、意見する。

「僕は昨年、青州の平原國で丘力居率いる叛烏桓の騎卒と戦い身を以てその強さを感じました。失礼ながら漢人で構成された官軍の騎卒で抗えるのでしょうか。それに官軍が数で優る訳では無かった筈です」

玄德の敢えての苦言に楷は動ぜず笑みを伴い答える。

「足下は使君と十三年も会ってないため知らないのだな。使君は烏桓等の騎馬に秀でた異族に拠る叛乱でも対抗できる様に、『白馬義従』と名付けた特選の隊を設けている。実際、今まで叛烏桓との戦いで大いに活躍した」

まるで自分の軍功の如く楷は得意気に為って話した。玄德は納得した意で肯く。しかし、何か重大な事項を見落としている嫌な予感が一瞬心を過ぎっていたが、それを心の中で否定し掻き消していた。

その後、今、判る事実から今後、どのような展開が想定され、それぞれどう楷が率いる後続の軍勢が動けば良いか地図で思案し合っていた。

やがて東からの日で帷幕の内側が明るく暖かく為り地図の上の碁を明確に見える様に為っていた。

未だ西の空が赤みを帯びない頃に馬上の劉玄德は軍勢の一部を率い軍営に帰還していた。

牙門を通る前に背後を一瞥し、叛烏桓の騎卒による追撃の無いのを認め、馬を配下に預け、急ぎ幕府へと向かう。日増しに暖くなる頃でもあってもか着けたままの兜鍪と鎧の内は汗だくだった。帷幕の中へ入り、目が暗がりに慣れる前に胸の前で右手の上に左手を乗せ組み頭を下げ肅す。顔を挙げると田楷が南面し、前に公孫越を始め將士が揃っている光景が視界に入った。

「良い機会に来た」

楷から玄德に向け落ち着いた声が放たれた。前まで歩き玄德は席の空いている所へ座る否や発言する。

「良い機会も何も今回も前回や前前回と同様、何も成果は有りません。それどころかこちらが攻め進めば攻め進む程、叛烏桓の騎卒に拠る奇襲に遭い、あるいは退路を断たれ集中した騎射を受け、その他も含め被害は増していきました。根本的に戦略を変えなければ、公孫使君を包囲か

ら救い出すどころか叛烏桓の包囲に少しも打撃を与えられないでしょう」

玄德が強い口調で言うと、將士からそれに賛意を示す声が幾つも挙がっていた。

昨年の冬に中郎將の公孫伯圭は叛烏桓の丘力居を打倒すべく、歩卒と荷車を田楷に預け騎卒のみで追撃を行い、丘力居が拠点としていた幽州の遼西郡内の管子城を奪還した。ところが直後に丘力居の軍勢の包囲を受け、伯圭が設けた白馬義従の機動力が活かさないまま管子城に閉じ込められた。総じて丘力居の罨で伯圭の軍勢は窮地に立たされており、後続の田楷は遼西郡の軍勢に拠る協力も得て、丘力居の包囲を攻撃し伯圭率いる官軍を解放しようとしたが、その兵力差から尽く失敗していた。その間に年が改まり中平六年に変わり玄德は年二十九と為り、義兄を救えないと言う悔しさと焦りを募らせていた。

後続軍勢の將士等の過度に期待する眼差しが楷に集まっている。ところがそれ等の意に反し楷は何時まで晴れない顔をしやがて開口する。

「諸君に告げなければならない。先程、書簡で幽州牧の劉使君より叛烏桓への攻撃を控える様に命令が下った。軍勢を陽樂城に引き上げるため明日にはここを発たなければならない」

一同は別の意味でさらに騒然と為った。

「幽州牧」は昨年、州下の監察の職務を持つ幽州刺史が現実に則し軍権を持つ様に改正された結果だった。その幽州牧に劉伯安と言う姓字の者が着任しており、楷への書簡はここに来て州内の軍事に口を出す様に為ったと意味していた。玄德にとって劉姓の者が自らの前に立ちはだかるとは思いも寄らないで居た。

真っ先に最年少の公孫越が異議を唱える。

「まさかそれに従って公孫使君を管子城に置き去りにするおつもりなのですか」

伯圭の従弟である越は声を荒らげた。楷は角張った顔に苦渋の表情を浮かべる。

「我に劉使君の命令を拒否する権限は無い。だからと言って、公孫使君を見捨てるつもりも無い。陽樂城に帰還しても斥候を絶えず常に管子城を監視しておく。公孫使君が撃って出る気配があれば急ぎ包囲の外より加勢する。どちらにしてもこのままでは包囲を打破できずに居るなら劉使君の命令を拒否する理由は無い。きっと劉使君に公孫使君を助けるお考えがあるのだろう。我はそれを信じたい」

楷の返答に越の明らかに不安を持つ表情は晴れないで居た。

「公孫使君は兵糧を積んだ荷車も後続に預けました。つまり丘力居は包囲に食糧を尽きさせる意図も含まれています。至急、包囲を突破しなければなりません」

感情を抑えたかの如く震えた声で告げた。ここで必要なのは地に足の着いた意見だと確信した玄德は発言する。

「真に公孫使君の命令を尊重するならば、荷車を守るのが最優先です。このまま闇雲に攻めても徒に兵卒を損なうだけで、引いては叛烏桓から荷車も略奪されます。そのため、田卿の指針に従うのが道理でしょう」

玄德の声は発した本人の意図とは裏腹に冷たく響いていた。しかし、伯圭の命令を議論の俎上に載せたのは効果的だった様で、越からの反論は無く厳しい顔でそのまま目を伏している。

その後、淡々と退却のための軍編成が楷より告げられ、反論等の大きな滞りも無く將士等はそ

れを手元の版に書くだけだった。

節二十五

未だ日が東にある巳時に遼西太守から招集が掛かり、陽樂城内に駐屯する田楷の軍勢の主だった將士等が郡府へと足を運ぶ。

劉玄德は戦時であることを考慮し、武冠と袴褶を身に着け馬で素早く同じ城内に在る郡府へ駆る。郡府の厩で に繋ぎ大股早足で正堂に急ぐ。

門閤を通り中庭を横切り堂下に至り、階から堂上へ昇り、席の所定の位置に近付き、南面する太守に拝し座る。両梁進賢冠を戴き単衣を着て青綬を佩びる年五十は越える太守とその属官以外は玄德が最も早く到着したようで、他の將士が到着するまで待つ。

やがて堂上に將士が揃う。最後に田楷が息を切らせながら来て、拝してから座り、それを認め太守が話す。

「公孫使君の將士諸君に集まって貰ったのは他でも無い。幽州牧の劉使君からの通達が有ったため、その旨を報せる。劉使君は張舉と張純の首に金銭を懸けるとの事だ。これはこの遼西郡を含め州下の郡縣に通達していると言う」

それを受け集まった將士等は騒然と為った。その意味する所は堂上に集う者にとって明白だった。その共通した認識を確かめるかの様に玄德が発言する。

「つまり劉使君は張舉と張純の討伐を庶人に任せ、州郡等の官軍は特に討伐へ動かないと暗に示しているのではないのでしょうか。そうだとすると管子城で包囲される公孫使君とその軍勢を劉使君は見捨てる結果と成るでしょう」

憤りが声に出ない様に話したが、それは失敗に終わり、多くの將士は共感するかの様に怒号を挙げる。そう言った皆の感情に楷は同調せず新たな事実を持ち込む。

「遂に丘力居の叛烏桓に抛る包囲に動きが有りました。管子城に一番近い包囲は依然、強固な物ですが、遠い所から順に、ゆっくりだが確実に北へ撤退しています...」

楷の報告を遮る様に、公孫越が強い調子で声を飛ばす。

「ならば公孫使君を助け出す好機です。叛烏桓の防備に緩みがあればそこを攻めるのみです」

その声が発端と為り口々に將士等は各々の願望や思惑を声に出し始める。そんな中で四十代の單經の小さい体から不釣り合いな大きな声が発せられる。

「待って下さい。可笑しいとは思いませんか。劉使君の張舉と張純の首に金を懸ける時期と丘力居の撤退の時期が合い過ぎるとは思いませんか」

その一言で堂上に静けさが訪れた。先ず黙考から脱したのは太守だ。

「劉使君の命令は叛烏桓と戦うなと言う内容だ。そして劉使君は金を懸ける策を講じた。これは何らかのお考えが有るのだろう。だとすればここは軍を動かし足手まといに為るべきでは無い。その内、劉使君に困り解決されるだろう」

太守の解釈を聞いて、玄德は閃いていた。その考えは自然と玄德の口から出始める。

「つまり、劉使君は丘力居と交渉したのでしょうか。公孫使君に追い込まれた丘力居は官軍との戦いを避けたい所であり、一方、劉使君は何より叛乱の首謀者である張舉と張純の討伐したい筈です。そのため、丘力居が張舉と張純から手を切る条件で、劉使君は叛烏桓を攻撃しない条件で

、密かに和平を結んだのではないのでしょうか。そのため、現在、叛烏桓と交戦中の公孫使君や明府には連絡していない恐れがあります」

玄徳の解釈は再び堂上を騒然とさせていた。それ等の声には叛烏桓の包囲を攻撃すべきか、攻撃しないべきかの両極端の意見だった。その中で越が意見する。

「一番、主戦を唱えていた愚がここで申し上げて事態を收拾すべきでしょう。ここは静観致しましょう。仮に劉卿の仰る通りの密約が有って叛烏桓を攻めれば、公孫使君の軍勢をより危険に晒してしまいます。二、三日経てば何らかの動きが有ると思います。その際に招集の上、軍議をお願い致します」

越の提案に次々と「諾」の声が挙がり、その後、決断を待つ視線が前の太守に集まる。太守は落ち着いて告げる。

「これで決まりだ。性急な出軍はしない。田卿、それで善いな」

次に檣に眼差しが集い、「諾」と返事が発せられる。

その後、解散と為り何か腑に落ちない気持ちと共に玄徳は縣府を後にしていた。

暑さを伴い西の地に日が落ちようとしていた頃、単衣を着て武冠を戴き座す劉玄徳の帷幕に、同じ服装の張益徳が駆け込んで来た。

「公孫使君が包囲を突破しこちらへ向かっているようだ」

拝礼も忘れ、益徳は興奮を声に乗せた。玄徳は思わず立ち上がり帷幕の外へ出ようと出口まで歩くが振り向き益徳に言う。

「それは田卿の所へ行けば良いか」

益徳は「然」と答える。玄徳は田卿の居る中郎將の官邸へ歩く。

途中、馬車が向こう側から来て、擦れ違うかと思ったが、輿車に単衣を纏い進賢冠を戴く骨張った田楷が乗っている。

「今から城門まで公孫使君を迎えに行く。卿も輿車に乗ると善い」

玄徳は供手する前にそう告げられたため、「唯」と答え、輿車に乗り込む。操者が馬を前に進ませる。

城門に着く頃には西の空が赤く染まりつつあった。開かれた門の向こうから確かに疎らに人馬が来る。その姿は誰もが兜鍪(かぶと)と鎧を着けているが、誰もが勇ましさより酷い疲れを見せている。その一団が近付いて来ると、先頭に見覚えの有る顔が見える。それは無精髭で寔れ強い疲労感を出しながらも両眼に確固とした覇気の有る精悍な物であり、公孫伯圭その人だった。

伯圭は十歩手前まで近付き馬から遅々として降り鈍々と歩き寄り、他方、楷は驚きと喜びが入り交じった顔で告げる。

「管子城で何やら動きが有ると斥候より聞き及びましたが、まさか使君が無事ご帰還されるとは思いも寄りませんでした」

その楷の一言に、伯圭は先ず端正な顔で笑みを作って返す。

「詳しい話は後だ。まず湯と餅を手配してくれ。腹を満たさなければ話に集中できない」

依然、声に力無く告げた。やはり丘力居に抛る包囲は官軍を飢えさせるためかと玄德は改めて悔しさを募らせる。楷は安心させようと笑みを見せる。

「用意しますが、急いで食べると体に毒ですのでお気を付けて下さい」

命令に応じ楷は輿車に乗る様、促し、官邸へ案内する。

輿車から降り官邸の正堂では既に燭が点されており、伯圭は気力を振り絞った様子を見せ、階を通じ堂上へ昇り南面して榻に座る。間髪入れず水と食糧の入った器が前へ出され、それ等を慎重に口の内へ運ぶ。その間に同じく包囲された管子城から帰還した趙子龍、嚴綱等が西の席へ座り、楷、玄德、單經、公孫越が東の席に座る。西の席に座る者にも少量の水と食糧が場に用意される。

四半時も経たない内に伯圭は食べるのを止め、楷に報告を促す。

「この陽樂城に駐屯する後続の部曲は遼西郡の軍勢と共に何度も管子城の包囲を破ろうとしましたが、圧倒的兵力差の前に管子城近くの包囲にすら到達できずに居ました。そんな折り、一箇月前に幽州牧の劉使君より攻撃を控える様に命令が有りました...」

「劉伯安が何故、私の任務に口出しするか」

楷の報告に、顔に精気が戻った伯圭は激昂し思わず報告を止めた。暫しして俯き一呼吸置き先を促す。

「続けて劉使君は張舉と張純の首に金銭を懸ける旨をこの遼西郡を含め州下の郡縣に通達致しました。その後、どう言う訳か管子城の周りから叛烏桓の軍勢が徐々に撤退し始めたのが斥候に抛り報告されました。憶測でしかないのですが、劉使君と丘力居等叛烏桓との間で何らかの取引が在ったように思えます」

楷が報告を終えても、伯圭は無言で俯く。やがて怒りで唇を奮わせながらも感情を抑えて言う。

「劉伯安が包囲されていた我等を見捨て、敵の丘力居と取引を行ったのは明白だ。それをこちらが知った旨を知らしめないといけない。幽州府に向け叛烏桓の使者を殺すよう書簡を送れ。また飽くまでも我等は武力で叛烏桓を駆逐する方針を示すため、これより散還した兵卒を収めつつ西へ行軍する。行く先々で兵卒を募る。今、戦いを止めては張純や叛烏桓等の敵に付け入られてしまう。それは十年以上、鮮卑と戦った我には解る」

命令を含めた発言に、伯圭の左右から一斉に「唯」と発する。

ふと外へ目を遣ると、燭の光で照らされた堂上と違い、暗闇が辺りを覆っていた。

今年初めての札の鳴き声が劉玄徳の耳に入り、例年より明らかに早いとは雖も、季節の遷ろう早さを実感していた。

玄德は、介者として他の四人と共に両梁進賢冠を戴き青綬を佩びる公孫伯圭に随い、右北平郡土垠城内に在る郡府内を歩き進む。右北平郡は遼西郡の西に隣接し同じ幽州に属していたが、玄德にとってその郡府や縣城も全く馴染み無い所であった。惟、右北平郡の長史に案内される中、伯圭に着いていくのみだった。

やがてある閭門へ近付き、両梁進賢冠を戴き青綬を佩びる四十代の男を見かける。青綬からそれが右北平太守と知る。伯圭に着いて門前に至ると、その男から肅され、内へ招かれる。正堂前で主客分かれ東西の階を昇り、互いに押し東西向かい合う席に座る。右北平太守が東の席の南端で伯圭と玄德等は西の席の北端に座る。

「卿とは仮の郡府が在った無終城以来だな」

太守から伯圭へ話した。無終城は右北平郡に在りそこが仮だったことから、ここ土垠城は叛烏桓に占領されていたのだな、と玄德は察する。悠然と伯圭は応じる。

「二年弱前、愚は無終城で騎都尉に就いたばかりでした。その後、平谷縣での張純との決戦を制した戦功に因り中郎將に為り、さらに先程、石門山での張純の大破と言う戦功に因り降虜校尉に為り、加えて都亭侯に封じられた上、兼行で再び遼東屬國長史を領する事に至りました。武冠を戴き青綬を帯びると言う見た目は何も変わりませんが、二回も官職が遷りました」

それは玄德にとって把握していない伯圭の戦歴ばかりであった。管子城で包囲を受ける前に挙げた軍功で現在の地位に就いており、玄德はそれに運命の皮肉を感じている。太守はそれに応じる。

「そう言えば、無終城から本来の郡府が在る土垠城へ復帰できたのは卿のお陰だ。感謝する…」

太守のその発言に伯圭は頬を緩ませる。

「…だが、卿は亭侯に封じられ、食邑を得て俸禄とは別の収入が約束された。加えて遼東屬國と領地も手に入れた。身には公私ともに充足したように思えるが」

太守の発言に伯圭の目は鋭くなったように見えた。

「その二つは良いとして、中郎將から降虜校尉へ遷ったのは納得できません。同じ比二千石の秩ですが、州郡を越えての権限と成ると中郎將の方に分が在るでしょう。加えて遼東屬國長史を領する様に課せられた意図は遼東屬國に留まれと命じられた様なものです。今は叛烏桓を討伐し、他方、張舉と張純を探し出し捕縛するのが最優先の任務です。遼東屬國に留まっていれば今まで如く郡境を越えた行動が執れません」

人事に関して伯圭の口から不満が漏れていた。青州の平原国内と、徐州内での郡境を越えての黄巾賊討伐に従軍した玄德はその権限を失った伯圭の不満を、実感と共に理解していた。太守の表情は何故か固まる。

「卿はもしや聴かされていないのではないか」

玄德にとっても太守の意外な反応に、伯圭は注意を向けた後、聞き返す。

「何をですか」

「張純が殺され、反叛が終結した旨だ」

太守の発言に伯圭と玄德も含めた介者は表情を強張らせる。やっとの思いで管子城の包囲を脱しこれから本格的に叛烏桓を討伐し二度と進寇させないと意気込む伯圭にとってそれは足下から崩される如く衝撃的な事実だった。太守は再び話し出す。

「卿が遼東屬國の石門山で張純率いる反叛軍勢を大破した際、その敵卒の多くは妻子を棄て塞外へ逃走したそうだ。卿が遼西郡の管子城で反叛軍勢から包囲を受けている時、幽州牧の劉使君は恩信を以て烏桓と接し、張舉と張純の首に金銭を懸け、丘力居等の叛烏桓は喜んで自ら帰還した

。卿がここ土垠城に向かう折り、劉使君の下へ張純の首が送られた。張純は烏桓の勢力下に逃げたのでは無く、鮮卑の所へ逃げていたそうだ。だが、その私客の王政に殺されたと言う。王政はその功で列侯に封じられたと言うから陛下もお認めに成ったのだろう。張舉の行方は未だ判らないが、首謀者が死に烏桓が撤退したのならば、反叛が終結したと言えるだろう」

太守の説明に、伯圭は次第に自らの顔を紅潮させていた。太守が言い終えると、伯圭の口から無念と憤りが漏れ始める。

「支援して頂いた府君に言うのは筋違いですが、言わせて貰います。では何故、愚は管子城で叛烏桓と百日も戦い、十人中五六人も行方不明者を出しつつも再度、歩騎一万を編成しそれを率いここ右北平郡の土垠城に上がったのでしょうか。全ては陛下の御威光の下で張舉張純や叛烏桓が二度と反叛を起こさない様、それ等を掃滅するためです。それを齟齬にした幽州牧の劉使君をこれから先、愚は許せるとは思えません」

やり場のない憤怒は堂上に放たれ沈黙を招いていた。それを太守が破る。

「卿の気持ちは判る。だが、もう時世は動いている。陛下が卿を降虜校尉に任命し遼東屬國長史を授けたのは、烏桓を掃滅する為では無く、漸く治まった反叛が再び起こらない様に辺境の治安を維持する為だ。一方、劉使君は既に各地に駐屯させた軍勢を退かせている。卿だけが今、場違いな歩騎一万を右北平郡に駐屯させている」

太守が発言を進めるに従い、伯圭は目を伏し頭を垂れていた。そのまま伯圭は話し出す。

「解りました、このまま東方の遼東屬國へ向かいましょう。しかし、再び反叛が起こる様であれば、再び歩騎を率いこの地へ戻って参ります」

言い終える頃には伯圭は面を挙げ真っ直ぐ太守を見ていた。続けて、押し立ち上がり、西の階へ歩み出す。玄德を始め残された者は同じく押し西側の者は立ち上がり後を追った。

前門を出ると、一層けたたましく札が音を発てていた。

節二十六

肌寒さが戻りつつある中、四方に張られた帳幔の内に居る劉玄徳は日光を有り難く感じていた。

遼東屬國長史を兼任する降虜校尉の公孫伯圭が任地に赴く前に土垠城の外で玄徳を送る祖道が開かれた。見送られる方の玄徳は赤幘を被り袴褶を着て杯を掲げている。

その席に公孫伯圭が訪ねに来て隣の空いた所へ座す。

「本当に京師に旅立つのだな。京師に赴き世の見聞を広めると良いと我が言ったのを足下が実行するとはな。ところで京師に行くに当たり誰か訪ねる当ては有るのか。もしや今、京師にいらっしゃる盧師を頼ろうとしているのではないか」

笑みを含んで伯圭が語り、手元の杯を玄徳に差し出した。それを受け近くの瓶から酒を勺で掬い返す。伯圭は飲み、その間に玄徳は笑みを伴い語る。

「卿と別れ再び会うまでの十四年足らずで僕も人脈を広げました。京師に知人が四、五人は居ます」

玄徳は得意気な顔を装う。それを目の当たりにした伯圭はうっすら笑い、再び杯に口を付ける。玄徳の当ては師匠の盧子幹しか無くそれを伯圭も承知していると玄徳は知っており、それを敢えて口に出さず楽しめる信頼関係が既に育っていた。

ふと面を挙げると、十数歩離れた所で公孫越、趙子龍、張益徳が同席し杯を酌み交わしている。それを見ていると、伯圭に話される。

「三人とも我や足下から見れば同世代だが、立場も属する部曲も違う。そんな三人がああやって席を同じくして杯を交わすのだから、これ程、楽しい事は無い」

玄徳は愉快的な気持ちに為りそれが顔から零れる。

「ああやって人との繋がり広がって行くものですね。共に京師に上がる益徳にとって将来、何らかの糧に為るでしょう」

それに伯圭は首肯しながら別の話題を振る。

「ところでまさか足下は京師に行つてまた勉学に励むのでは無いだろうな」

その端正な顔立ちを崩し悪戯をする児の様な笑みを含んだ。玄徳は破顔する。

「それは判りません。もしかすると勉学に励み、涿郡から孝廉に推挙され、そのまま京師で試を受け郎中に為っているかもしれませんよ」

そう言うと二人は声を発して笑い出していた。

内側からの暖かみ以外にも空からの暖かみも十分に存在感が示されていた。

朝日を背に初夏の爽やかな風の中、四騎は丘を下っていた。

駆る先に広がる大きな城壁が視野に入る。それを劉玄徳は雒陽城だと知っている。皇帝の居する京師(みやこ)と成る雒陽城は、その名に示される様に雒水の北側に在り、東西六里余と南北九里余に及ぶ城壁に囲まれる。その様な知識を持つとは雖も、何度見ても、その存在の大きさだけで

威風を感じる物だ、と玄德は行く先に目を遣っていた。その際に馬上から張益徳から声を掛けられる。

「あれが京師だろ。見る前まで大した事無いと思っていたが、途方も無く大きい」

興奮をそのまま声に出していた。言われてみれば司隸河東郡の關雲長はどうか知らないが、簡憲和と益徳は雒陽城を見た経験は無いのだ、と玄德は思い出す。

雒陽の城壁が視野に入る。玄德等の各人が持つ視界ではその城壁が徐々に大きく為っていく。城壁の前には穀水と言う河あってそこに架かる橋を渡ると穀門と呼ばれる雒陽城の北門に到達する。城の内側からの活気が耳に入って来ており、出迎えられた心地で居た。

門前で数人の門卒に符を渡し照合させ、城壁の内側へと入る。玄德は武冠を戴き袴褶を着ると言う軽装だが、高位であることを強調するために、虎頭鞞囊から黒綬を出していた。

玄德の第一に目指す先は現在、尚書と言う官職と為る盧子幹が住む尚書臺の官舎だった。尚書は皇帝が読み書きする文書を司ると言う重要な官職であった。

行く先々の官吏に道を尋ね、南宮の一角に行き着く。雒陽城の内側でも皇帝が居を構える区画は北宮と南宮が有って、名前の通り南北に在る宮廷であった。その南宮に尚書臺が接しており文書の授受が行われ易い様に為ると知識として玄德は知っていた。

尚書臺の前門で玄德は小吏に謁を渡す。暫し待つと中から単衣を着た五十代の背の高い精悍な男が僕者三人を引き連れ出てきた。玄德と同じ黒綬を佩びるが、その特別な官職に就く事実を示しているかの様に、より高位の者が戴く筈の両梁進賢冠がその頭に在った。それは玄德が良く覚えている盧子幹その人だった。

盧子幹等は肅し四人を中へ招く。四人は小吏に馬を預け並んで中へと入る。廊を進み、或る門閤を通り、中庭を横切り主客分かれ東西の階から堂上へ昇り、中央で互いに拝する。

玄德が西側の席の奥に座すのに対し、礼節に則り子幹は東側の席の手前に座し話し掛ける。「謁の文面を読んだ時は驚いた。あの劉玄德が降虜校尉の別部司馬と言う官職を伴って京師へ来るとは。より精悍に為った姿だけで無く経歴も立派に成ったものだ」

その表情から玄德は自らの門下生の昇進を心から喜んでいる様に見えた。それで安心し、軍功を得ての昇進、軍事で名を挙げての就任、旧交を頼っての今の配属等の恥ずべき経緯も玄德は話す気に為っていた。

全てを話し終えた後、子幹は年齢を重ねた顔に笑顔を浮かべている。

「吾の想定した学に拠る昇進とは違うが、塞内に多くの反叛が有る中での経緯であるし、何よりそれは足下なりの義を貫いた結果に思える。吾は足下を誇りに思う...」

その発言に拠って母の喪が明けてから今までの三年間が肯定されたように思え、玄德は体の芯からの喜びで震える如くだった。子幹は依然、話している。

「...何より同じ門下の公孫伯圭の下で今、別部司馬として仕官していたとは驚いた。それに伯圭も足下を良く見て良く思っていたのだろう。その証左に足下を自らの一將士に留めずこうして京師へ寄越している。伯圭と足下は共に北辺で良くそこまで陛下のため吏民のため戦った。残念ながら結果は充分に伴ったとは言えないだろうが、足下等が居なければ、叛乱した異族に抛り塞内が蹂躪された結果と為っていただろう。師としても陛下の一臣下としても感謝を申し上げたい」

思わず玄德は面を伏す。

「過分な言、痛み入ります。僕は公孫卿の下で微力を尽くしたのみです。やはり公孫卿に因る所が大きいでしょう」

そう言って視線を上げると、そこには子幹の優しい眼差しが有る。

「足下も知っているだろうが、吾は五年前に北中郎將として黄巾賊に因る叛乱を鎮静化する任務に従事していた。未だ黄巾賊の残党に因る反乱は収まっていないが、五年前に一応の終息を見せ、年号が光和から中平へと改元された。それは吾だけの力では無く幾つかの將士の尽力に因る。その証左に当時の將士は今も頼りにされており各方面でご活躍されている。その様な意味では全く吾にとって幸運な任務だった。人との繋がりも財産でもあろう」

子幹は自らの経験を引き合いに出し玄德の人脈も肯定したように思えた。そこで玄德は雒陽城に来た目的を告げる決心を付ける。

「先程も申し上げました様に、僕がこの地に来たのは見聞を広げるためです。師が仰った様に人との繋がりも広げていきたいと存じます。そこで先程、仰った五年前の黄巾討伐に従事した將士を手始めに訪ねようかと存じます。それ等の中で今、京師に居られる方を教えて頂けないでしょうか」

嫌な表情を一つ見せず子幹は肯く。

「善かろう。但し、惟教えるだけでは足下のために成らないだろうから、当時の担当や現在の状況も教えよう。当時、京師は三方から黄巾賊に攻められる危機に瀕しており、その全体的な守護に就いた方は大將軍の何遂高だ。その時から現在も大將軍だ。京師を含む司隸の北東に位置する冀州を担当していたのが吾だった。一方、南東の豫州に出軍したのが、左中郎將の皇甫義真と右中郎將の朱公偉であり、それぞれの麾下に護軍司馬の傅南容、佐軍司馬の孫文台が居た。皇甫義真が今、左將軍として北西の涼州で叛羌と対峙しており、傅南容は二年前に叛羌との戦いで陣没した...」

黄巾討伐での將士が戦死するとはやはり幽州の叛烏桓と匹敵するかそれ以上に、涼州の叛羌との戦いに激しさが有ったと玄德は認識する。また大將軍の何遂高は昨年、校尉の毋丘毅を冀州へ派遣した者と記憶していた。

「...現在、朱公偉は屯騎校尉として京師に居て、孫文台は南方の荊州の長沙太守に着任する。五年前、豫州の戦線で騎都尉の曹孟徳が加わり、それも有って豫州は一応の平穩を取り戻し、そこから北の兗州へ皇甫義真が遠征に行き、西の荊州へ朱公偉が行った。曹孟徳は今、京師で典軍校尉に着く。当時、吾の後任の冀州担当は東中郎將の董仲穎だった。董仲穎は今より少し前まで皇甫義真と共に涼州で叛羌と戦っていたが、今、并州で叛乱する休屠各胡討伐の為に并州牧に任命された...」

五年前の主要な將士で今、京師に居る者は朱公偉と曹孟徳の二人だと玄德は覚えた。また、依然、并州の休屠各胡が討伐されず、脅威のままで居ると知り強く動揺した。

子幹は何故か一旦、視線を外し意を決した如くに玄德を見据える。

「...この事を言うべきでは無いのかもしれないが、足下の為を思い話す。陛下は董仲穎に叛羌と戦った軍勢を涼州の皇甫義真に残す様に勅令を出したが、それに反し率いて赴いた。しかも任

地の并州に行かず司隸の河東郡に駐屯した。陛下の御様態が思わしく無い今、董仲穎が最も注意すべき人物だ...」

皇帝の体調が悪いと初めて耳にした以上に、自らの後任だった者を危険人物の如くに扱う子幹の言動に玄德は少なからず驚きを覚えていた。それは子幹に対してではなく、そんな重職に就く臣下にその様な人物が居ると言う事実に対してだった。

「...話を戻すと、吾以外では朱公偉と曹孟徳の二人が京師に居る。両者の内、足下と年が近いのは典軍校尉の曹孟徳だ。典軍校尉は西園八校尉の一つであり、昨年八月に塞内の反叛を鎮める目的で陛下により設置された。西園は南宮内の西に在りそれに接する所に八校尉の官舎が在る。先ず曹孟徳を訪ねるが良かろう」

玄德は「唯(はい)」と答え、話す。

「では明日、早速、訪ねます...」

これで一通りの用事を終えたと思い、玄德は連れてきた三人も交え、子幹に雑談をしようと話題を切り出す。子幹はその意図を承知した様に応じた。

子幹の職務もあって長い時を割けないだろうが、それでも玄德はその短い時を楽しんでいた。

節二十七

まだ日が西の空にある辰時に劉玄徳は武冠を戴き単衣を着て黒綬と玉を佩び、割り当てられた室を発った。

各州郡から京師たる雒陽城へ上がる郡吏の泊まる百郡邸を、玄徳等は利用した。馬車を手配させ、簡憲和、關雲長、張益徳の三人を介者とし、典軍校尉の官舎へと向かう。

一時も掛からず官舎に着き、前門で衛卒に謁を渡し取り次いで貰う。何も連絡せず突然の訪問だったため、会う事すら叶わないと覚悟したものの半時程、待つと小吏が出てきて、中へ案内される。

或る門閤に到達すると、年五程度上の精悍な顔の男が僕者五人と共に立っている。短身だがそれを感じさせない覇気と気品が同居しており、武冠を戴き単衣に青綬を佩ぶる様からそれが典軍校尉の曹孟徳だと知り納得する。五年後にその地位に自らが為れる自信を玄徳は少しも持ち合わせては居ない。

孟徳は肅し門内へと導く。主客分かれ階から堂上へ昇り東西の席に付き互いに一斉に拝し座る。孟徳が口火を切る。

「吾が典軍校尉の曹孟徳だ。盧尚書から書で足下が来る旨を聞いた。足下が幽州に在って数々の反叛鎮静に従事したと聞く。だが、根本的な疑問が有る。そんな辺郡の將士が、京師で任務に当たる吾と対面して何か意味が有るのだろうか。足下や盧尚書の意図が解りかねる」

孟徳は片眉を挙げた。玄徳は先ず相手の疑念を晴らすのが先決だと感じる。

「卿が五年前、豫州で黄巾討伐に將士として従事したと聞きます。幽州に比べれば内郡でしょうが、それでも京師から離れていたのは事実です。そして今、京師の重職に着任されています。五年前の他の將士は同じく京師でご活躍されている一方、依然、州郡で反叛を鎮静する任務に就いている方もいらっしゃいます。つまり、州郡で反叛が頻発する今、京師と州郡との区別無く塞内全土を総合的に把握する必要が有ります。その点を考慮すると、僕と年が近く且つ京師の内情にお詳しい卿との対面は有意義だと考えております」

熱心な玄徳の語りを聴き終えると孟徳は含みを持たせた笑みを見せる。

「善いだろう。その前に確認したい事実がある。足下は今までずっと武冠を戴く経歴だったのか」

痛い所を突かれたと玄徳は感じたが、その思いを振り切り率直に答える。

「否、軍功に因り縣尉や縣令に為った過去が有り、進賢冠を戴いた事が有ります。しかしながら、その殆どは兵乱の有った縣であり、將士としての活躍を期待されていました。また、ここに居る他の三人は主に僕の將士として従軍していました」

それを受け暫し考えた上で孟徳は告げる。

「それは微妙だな、吾との共通する部分を見出すには。吾は年二十で孝廉に挙げられ郎中と為り雒陽北部尉と為り、兗州東郡の頓丘令と遷任した。軍功に因らず縣令まで在り来たりの昇進だ」

若くして孝廉に推挙され試に合格し郎中と為り、縣の長吏にまで昇進する孟徳の経歴は、玄徳にとって正に若き時に目指していた理想的な昇進の道筋だった。しかし、それを「在り来たり」

と称したためか、玄徳の心に憧憬より先に嫉妬が大きく現れてしまう。その感情を抑え込み、知恵を使おうとする。

「では、五年前に騎都尉に為られる随分前に、縣の長吏に為られたのですね。だとすると騎都尉の際に黄巾賊相手に挙げられた軍功に因り、何の職に就かれたのでしょうか」

玄徳の真っ直ぐな眼差しの先には新たな笑みを見せる孟徳の顔が在る。

「それは良い指摘だ。吾は青州の濟南相に任命された。軍功で長官と為った点では共通している。その後、変遷が有り、涼州の叛羌の討伐を主目的に、西園八校尉の一である典軍校尉に任命された。その意味でも依然、軍功が活きている」

それについて、昨日の盧子幹との会談で沈黙を守っていた關雲長が西側の席に於いて玄徳の二つ右横で口出しをする。

「西園八校尉について昨日、盧尚書から塞内の反叛を鎮める目的と伺いましたが具体的な戦いは伺っていません。実際、叛羌と戦ったのでしょうか。愚には陛下が武威を示すためだけに設けた官職の様に存じます」

そちらへ孟徳は一瞥する。

「それは誤った解釈だろうが、着眼点は良い...」

続けて視線を玄徳の方へ戻す。

「...足下は賢明な配下を持った。西園八校尉を設立された昨年八月に引き続き十月に、陛下は自らを無上將軍と称され親征に臨まれた。そのため、西園八校尉は当初から塞内の反叛の制圧を目的としているのは明らかであり、実際、その校尉やその別部司馬が出軍し州郡の兵乱討伐に従事した。だがそれ等の討伐対象に叛羌は含まれていない。それに、今は陛下の御様態が思わしくないためも有って、この様に出軍が殆ど無く京師にて武威を示している状況だ」

両手を軽く広げ孟徳は諦めを表している様だった。雲長に触発されてか今度は憲和が話す。

「西園八校尉はその名称通り、陛下の側近くの校尉と言う位置付けなのか疑問に存じていました。仰る通りであれば、陛下の御様態が御回復されれば、京師から叛乱が起きる州郡へ出軍されるのでしょうか。愚等は冀州、徐州、青州、幽州と四州を戦い渡り、各地の惨状を目の当たりにして参りました。早々にこれ等の兵乱を終わらせたく存じます」

憲和の質問に片眉を挙げ間髪入れず答える。

「御回復されても水面下に在る勢力状況から考えると、なかなか出軍が実行されないのかもしれない...」

孟徳は発言を切り、俯き暫し考え、やがて面を挙げる。

「...足下等に伝えても問題無いと思うから京師での暗黙の了解を言っておく。西園八校尉を司るは、上軍校尉の蹇碩と言う姓名の宦者で、数年前より陛下の愛幸を被る者だ...」

孟徳の言う「宦者」は皇帝の側近くにありその妻妾と誤りを犯さぬ様に男として去勢された官吏を意味していた。特にその高位である中常侍や中黄門と言う官職に就く者等は、古来より陛下に対する顧問應對や、徴召に繋がる白や薦を発する特権を有しており、正に京師の一大勢力を築いていると玄徳は認識していた。

「...それに対するは臣下の最高位である大將軍の何遂高だ。既に軍勢の権限で干渉し合う所が出

ており水面下で激しく牽制し合っている。陛下にもしもの事が有れば、京師の臣下は二つに分裂するのでは無いかと想像を禁じ得ない」

悲痛な表情を浮かべた。そこに憲和は勢いを以て再び尋ねる。

「では、仮にそうなれば、卿はやはり蹇卿に付き従うのですか」

皆の視線を集める孟徳は眉を顰めるも口元を緩ませる。

「そうとは限らない。吾は雒陽北部尉の時に禁を犯した蹇卿の叔父を法に照らし合わせ殺害した過去が有る。恐らく蹇卿に好まれていないだろう。それが無くともどちらに与する気も無い。それに中軍校尉の袁本初は既に何將軍に靡いていると公言している。既に蹇卿側で崩壊の兆しがある...」

またも一旦、発言を止め、今度は玄德を見据え問いを放つ。

「...足下が吾の立場ならば蹇卿か何將軍かどちらに靡くか」

その眼差しを玄德は正面で受け言う。

「決めました」

玄德の脈絡の無い一言で堂上の沈黙を招く。適度な間を開け孟徳が訊く。

「どちらに決めたのか」

「いえ、そうではありません。蹇卿にも何將軍にも、それに卿にも義は有りません。そのため、誰にも付かず静観するのみです。それに決めたのは僕が卿の私客に為る事です。どうか僕とその介者をこの官舎に置いて下さい。僕が京師に来たのは見聞を広める為です。卿に従うのが一番です」

玄德の嘆願は堂上に居る皆の視線を集めた。玄德の眼差しの先を追って、多くの視線は再び孟徳に向けられる。孟徳は答える。

「善いだろう。吾を義では無いと言う足下の発想は実に面白い。但し、足下等には衣食住の提供ぐらいしかできない。それに吾の客に為るのなら、一つぐらい吾の役に立って貰おう」

「唯」と答え玄德は立ち上がり拝する。西側の席に座る他の三人も遅れて拝する。

「では、早速、僕者の指示で室に移ってくれ。吾はこれより職務に就く」

そう言って孟徳は立ち上がり、南面する榻に座り直す。玄德等四人は堂を降り僕者の後を追った。

中庭では初夏の陽射しを浴び青々と茂る木が有った。

劉玄德は四方を壁に囲まれた中で、西の窓からの暖かい光を浴び、涿縣では栗が零ちる頃かと思いを馳せていた。

そんな折りに簡憲和が何の礼儀も無く戸から入って来て、立ったまま話し出す。

「公孫卿の下へ帰ろう。ここに居ても月日の浪費だ」

唐突に勢い良く告げた。玄德はそれに流されまいと冷静を装って見上げて言う。

「急にどうした。何かあったのか」

憲和は右手を頭に置き、見下ろしたまま、直ぐさま言い返す。

「何も無かったから、帰りたいんだ。四箇月前に何かあると思い汝は曹卿の客と為った。そして次の日かその次の日の四月十一日、先帝が崩御され皇子が即位され、年号も中平から光熹と新しく為った。何將軍は百郡邸に兵卒を駐屯させ、いよいよ緊張感が高まった。そして何將軍を暗殺しようとした蹇卿は逆に返り討ちに遭い囚われ、二十五日に獄死した。続けて何將軍は驃騎府を包囲し、驃騎將軍は捉えられ翌月七日に獄死した。だが、変事もそこまでだ。何將軍に敵対する勢力は肅正されたが、それでも中常侍や中黄門の宦者の勢力は現存し、結局、大將軍の勢力と拮抗を保っている。吾に返り足下を見ると後は今日と同じ退屈で変わらない日々が続くのみだ。今日は何か起こり己の力を尽くす機会だと朝を迎えるが、何も起こらず夜を迎える。その繰り返した。汝は依然、降虜校尉の別部司馬のままなので良いだろうが、吾はただの客のそのまた客だ」

息を忘れ矢継ぎ早に憲和は告げた。言い尽くすと肩で息をし、玄德を見据える。

「汝の言い分は判ったが、我の一存で決める訳にはいかない。雲長や益徳とも相談しなければならない」

「では早速、そうするべきだ。二人はどこへ行った」

憲和は左右を見渡した。そこで漸く玄德は立ち上がり言う。

「二人は今朝早く、城外の上林苑に并州牧の董使君の軍勢を見に行った…」

それに憲和は声を重ね遮る。

「何故、そんな近くに董使君の軍勢が来ているのか。吾の記憶だと、司隸河東郡に駐屯していた筈だ」

玄德は一旦、視線を外し、また話す。

「もしかして、汝は知らないのか。曹卿から聞いたが、何將軍が并州牧の董使君や東郡太守の橋府君の軍勢を召喚し、宦者を掃討しようとしているそうだ。現在、董使君は雒陽城西の上林苑、橋府君は雒陽と同じ河南尹で、ここより東方に在る成鞏城に軍勢を駐屯させていると聞く」

「河南尹」は雒陽を内包する郡規模の区域を指していた。憲和は顔を強張らせ、沈黙の後に言う。

「水面下でそんな抗争が起こっていたのか。ならば公孫卿の所へ帰る必要は無い。このまま静観を続けよう。義を見極めなければ」

興奮気味の声を出した後、憲和は近くの席に腰を下ろす。気付けば、外の暗がり包む頃であり、玄德も腰を落ち着かせようとした時、外から漏れ聞く多くのざわめきに気付く。

「何事だろうか」

そう言った頃には憲和は再び立ち上がって居た。

「兎も角、外へ行こう」

憲和は戸から外へ出て、玄德はそれに続く。官舎内は慌ただしく小吏が行き交っている。その中で一人を引き留め聞き出す。

「城外遠方で火災が起こっている様です」

二人は驚き、小走りに前門の外へと急ぐ。大街に出て、周辺を見回すと、暗闇に染まりつつある東北の空に黒煙が上がっているのを見つける。何事かと思い、最寄りの観へと急ぐ。階を通じ

観の上へと登ると、そこには見慣れた人物が居た。

「足下も異変に気付いたか。礼は抜きに兎も角あれを見て貰いたい」

そう話し掛けてきた者は典軍校尉の曹孟徳だった。その指の先を玄德は目で追い、東北の煙を視界に入れ、地で煌々と燃えさかる様を認める。その激しい灯りは夕闇を押し分け、雒陽の城内を照らしている。自らの胸の鼓動が早く激しく為るのを玄德は感じている。想像外の出来事に玄德は発する語句を失う。

「足下は四州で軍事に関わったため、あの炎が上がる位置は判るだろう」

そう言われ玄德は見定めるに、火の手は三十里は離れている様だった。それでも炎の勢いを見て取れるため、非常な大火であると感じている。心に思い描いた雒陽城周辺の地図と照らし合わせ、その火元を即座に思い浮かべる。

「あれは孟津關ではないですか」

玄德は上擦った声を挙げた。孟津關は雒陽周辺に在りその内側を守護する八関の一つであり、他の關と違う特徴としてその名の通り河水を外側に面し津としての役割が有った。溜息混じりに孟徳は呟く。

「今朝、何將軍の命に抛り武猛都尉の丁建陽と言う姓字の者が兵卒を率い、京師の外へ出たとは聞いていたが、まさかあんな凶事に到るとは思わなかった」

憲和は玄德の横から問い掛ける。

「一体、何の目的が有るのでしょうか」

声を発した瞬間、何かに閃いた表情を浮かべる。恐らく目的に気付いたんだらうと玄德は見なす。その目的は雒陽を守る關を燃やし壊す事で、身に危険が迫ると象徴的だが具体的に宦者へ脅しを掛ける他なかった。孟徳は嘲笑うかの様に言う。

「宦者は今も昔も宜しく有るが、世の主が不当に権寵を貸せば、この様に為るだらう。既にその罪を治め、当に元凶を誅殺するなんて、一獄吏に足るのに、何をごたごたし董使君、橋府君、それに丁建陽等の外將を召す必要が有るのだらうか。尽くこれを誅殺するのを欲すれば、事は必ず露呈し近い内に吾は何將軍の敗北を見るだらう」

孟徳の不気味な予言に玄德は肝を冷やす心地だった。内心でこれから起こる惨事を見極める覚悟を決める。

三人は階を通じ観から降りた。未だ騒然とする大街の地をしっかりと踏みしめて歩み出した。

その訃報は唐突に劉玄徳の耳に届く。

「何將軍が殺害されました」

それは暗く為り始めた頃に典軍校尉の官舎へ小吏より届けられた報せだった。覚悟していた惨事の一つであるため、玄徳に意外と驚きは大きく無かった。それより惨事の連鎖が起こると危惧し、詳しい事実を確かめようと玄徳は武冠と単衣を纏ったまま戸外へ飛び出す。

そうすると行く先に曹孟徳の背を見掛ける。小走りに近付き、歩きながら肅す。頭を上げるや否や孟徳は早口に言う。

「どうやら足下は何將軍が殺されたのを聞いた様だな。偽って南宮に呼び出され中常侍の張讓を始めとする宦者等に暗殺された、そう吾は聞いた。残念だが何將軍の決断の遅さが響いた。これから先、さらに紛争が続くだろう」

「では典軍校尉として卿は如何に動きますか」

孟徳は玄徳の顔をまじまじと見てやがて答える。

「吾等は静観する。ここで出軍する等、動けば蹇卿や何將軍の二の轍を踏み、命の危険が有る。先ずは見極めよう...」

突如、孟徳は語句の発声を止め、左右を見渡す。何事かと玄徳は思うと、東から怒号と悲鳴が流れ着いていた。孟徳は再び最寄りの樓閣へ歩を進め、玄徳がそれに続く。

二人は高みから声の有る方角を望む。そうすると視界には南宮の東と西の数所で黒煙が上がっており、それらの根本は激しく燃えている。間隔の空いた炎の場所から作為が感じられたが、玄徳には誰が放火したのか見当が付かないで居た。

「誰が火を付けたか判りませんが、先の孟津関で引き起こされた悪しき方法を踏襲するとは何たる愚行でしょうか」

思わず憤りを口にしていた。孟徳は落ち着いた口調で言う。

「南宮には陛下や皇后等だけで無く宦者が居る。恐らく宦者を燻り出し報復しようとしている。つまり、火を着けたのは何將軍側に居た者だろう。やはりこの京師に戦禍が来るのは確実のようだ」

諦めとも取れる発言に玄徳は一瞬、語句に詰まる。その間に孟徳は樓閣から地へ降り始めており、それ以上、話を進められなかった。

次の日の鶏鳴時には南宮を放火した者が虎賁中郎將の袁公路であると典軍校尉の官舎へ報される。公路は、臣下の最高位の一角を担う司空に着いた袁周陽の子であり、西園八校尉の中軍校尉から司隸校尉に転じた袁本初の従弟であると孟徳は説明する。司隸校尉はその名の通り京師たる雒陽を内包する司隸を守る官職であり、皇帝を守護する重要な官職であった。対して、その従弟と為る公路が就く虎賁中郎將は皇帝を守衛する虎賁宿衛を司る重要な官職であった。本来、皇帝の側近に在って守らなければならない虎賁中郎將が逆に宮へ火を付けるとは、救いようの無い事態だと玄徳は心の中で嘆いていた。

孟徳の配下の斥候に抛り、何遂高の配下、呉匡と張璋が南宮の周りに駐屯し、兵卒を率い、遂

高の殺害に及んだ中官を捕獲しようと宮中へ攻勢に出ていると報される。だが、例え兵卒を率いどちらかに加勢しても、戦乱がより広がるだけだと孟徳は告げていた。

実際に静観を決め込む孟徳に何か晴れない物を感じながら、室に戻ろうと歩を進めると、後から声が飛んでくる。

「大規模な軍勢が北宮の南端に押し寄せている」

玄徳が振り返ると、その視野の真ん中に袴褶を来た張益徳が居た。その後から關雲長が大股で近付き、言い添える。

「司隸校尉の袁使君と亡き何大將軍の弟である何車騎が、北宮の南端にある朱雀闕に兵卒を率い駐屯している。そう現地の兵卒から聞いた」

「袁使君」は袁本初の敬称であり、「何車騎」は車騎將軍の何苗を示していた。思わず玄徳は聞き返す。

「南宮で無く北宮か」

雲長は「然」と一言前置き答える。

「兵卒の間で飛び交う噂に耳を傾けると、どうやら宦者の張讓等は陛下とその弟の陳留王を南宮から北宮へ連れ去ったそうだ。それを奪回する名目で袁使君と何車騎は軍勢を動かしたんだろう...」

興奮した声で玄徳はその発言を引き継ぐ。

「...そのまま北宮へ軍勢を投入し、亡き何將軍が成し得なかった宦者の肅清...それどころか宦者で有れば無差別に虐殺を行うのではないか...」

玄徳は語句を飲み込む。片方は天子たる皇帝を拉致し、片方はそれを口実に虐殺を行う、どこにも義は無いのではないか、そう玄徳は絶望するが、それを抑え込み自らを奮い立たせる。

「...実際はどうなのか、己の目で見極めに行こう。雲長、益徳、今から北宮の朱雀闕に行く。憲和も呼ぶのだ」

益徳が顔に喜色を漏らし言う。

「そうでないと。今から兜鍪(かぶと)と鎧を着けに行き、憲和を呼びここへ戻る」

背を向けた益徳に慌てて玄徳は声を掛ける。

「そのままの服装で良い。武装しようものなら、誤って危害を被るかもしれない。宦者も攻撃されるままで無く反撃をするだろう。そう言う意味では馬も使わない」

その発言に対する二人は「唯」と答え、憲和の室へ向かう。間も無く三人揃って帰ってくると四人は歩き出す。少しも時間を無駄にすまいと玄徳は雲長に話し掛ける。

「それで足下の視察はどうだったか。上林苑に駐屯する董使君の軍勢に動きは無かったのか」

行く先を見たまま、雲長は答える。

「軍勢の一部が将に出軍しようとしていた。恐らく京師に迫ろうとする軍だろう」

「宦者を倒そうとする軍勢か。いよいよ戦禍が大きくなる」

苦々しく玄徳は声を出し、内心でそれを止められない自信に苛立ちを感じていた。

四人が北宮の南の入口に当たる朱雀闕に到着すると、一つの軍勢が北宮側へ攻めている状況が在った。玄徳はやはり宦者側でも反撃が有ったのかと合点したが、そう把握するには違和感が

有り、考えを口にする。

「どうも亡き何將軍側の軍勢が宦者側を攻めている様に見えない」

それに先ず間を置かず反応したのは益徳だ。

「では身が偵察に行く。旗を見れば把握できるだろうから」

玄德の返事を待たずに、益徳は走り出していた。益徳であれば大事無いと残された三人は口々に言い後を追わなかった。

半時も経たずに帰ってきた益徳は興奮を伴って話し出す。

「南から攻める方の旗に『大將軍部將』や『奉車都尉』と有り、北の攻められる方には『車騎將軍』と書かれてあった」

その宦者側を含まない戦闘が、直ぐに誰と誰とのか玄德は知った。

「これは仲間割れの戦闘だ。如何なる理由が有るか判らないが、南のは何將軍の將と董使君の弟の董叔穎の軍勢で、北のは亡き何將軍の弟の何車騎の軍勢だ」

即座に憲和が疑問を投げかける。

「では、袁使君の軍勢はどこに行った」

それに玄德が応じる。

「聞く所に抛ると、亡き何將軍は自らの政敵だった上軍校尉の蹇卿や驃騎將軍を獄死させた後、二人が持つ軍勢を吸収したと言う。何將軍が亡くなった後はその軍勢を司隸校尉の袁使君がそのまま引き継いだ。ここからだ判りにくい明らかに北の軍勢がそれ程の規模だとは思えない。確実に袁使君の軍勢は既に北宮に踏み込んだ後だ」

その理屈は道理に適っていたが、玄德は腑に落ちない心地だった。それを代弁するかの様に益徳は叫ぶように言い放つ。

「では北宮の中では宦者が虐殺され、北宮の外では昨日まで仲間だった者が互いに殺し合っているのか」

それに対し、何ら返事をする語句を出せず玄德は議論を終わらせる様に告げる。

「帰るぞ」

その一言で三人の顔に不満があるものの、それを目にしなかった様に玄德は踵を返し進み出した。

まるで助けを呼ばれる如くに、飛んでくる怒号と悲鳴を玄德は背で受けていた。

結局、眠らなかった劉玄德は空が白むのを窓を通して見ていた。

それは一因として典軍校尉の官舎に次々と雒陽城内の状況報告が届けられていたためだ。玄德等四人が見た不可解な状況も説明付けできていた。司隸校尉の袁本初は南端の朱雀闕から北宮へ突入し、逃げ出さない様に門を閉じ宦者の虐殺を敢行し、その結果、死者は二千人余りにも昇ったと聞いた。一方、閉じられた門外では、大將軍の何遂高を殺したのは弟の何苗である、とした何遂高の部將の呉匡は奉車都尉の董叔穎と共に何苗を攻め、殺したと報された。その間に張讓等宦者は皇帝と陳留王を連れ北宮からさらに北へ出て、北に在る穀門を通じ雒陽城からも出て河水

に到ったと聞いた。

最後に届いた報告は、河南中部掾の閔貢と言う姓名の者と盧子幹が別々に張讓等を追跡中と言う事だった。まさか自らの師が渦中に居たと言う驚きと共に後悔に近い自問自答を始めていた。

白む空を見た後に閃いた結論は、兎も角、外に出て北の河水を目指そうと言う事だった。武冠を戴き単衣を纏い室から出て、廊を進むと後方から簡憲和に追い付かれる。顔を覗かれ指摘される。

「目が腫れぼったいな。その様子だと碌に眠れなかったのではないか」

玄德は不満ながら「然」と答え言い返す。

「自らの君主、つまり陛下が浚われ行方不明だと言うのに眠れる臣下など居ない」

二人が穀門に繋がる南北の大街に出た時に、多くの歓声を耳にする。何事かと思ひ声のする北を向くと大街の両側に多くの人が集まり並んでいる。目を凝らして大街の北の奥に目を遣ると、隊列がこちらの方向へ向かっているのを認める。

「あれを見ろ。あの歓迎した様子だと、陛下が御帰還されたに相違無い」

憲和は確信を以て声に喜びを乗せ叫んだ。

「あそこに行っても安全だろう。近づくぞ」

そう言って早足で玄德は前へと前へと歩き出した。憲和も追う。

随分と辺りが明るく為った中、近づく度に群衆の密度が高くなる。人々の姿を見ると、庶人より官吏の多さに気付く。大街の西側を歩き、前へ進めなくなった所で立ち止まる。

玄德はそこで皇帝と并州牧の董仲穎を称賛する多くの声を耳にする。それにより北から来る隊列が皇帝とその従者に拠ると知る。

事前に聞いた報せに拠ると皇帝を宦者より助け護衛し帰還する者は、閔貢か盧子幹である筈だが、眼前の光景はまるでそれを否定する様だった。そのため、皇帝が帰還した喜びより、さも董仲穎が皇帝を救い出したかの様に装っているのではないかと言う疑いが玄德の心で強く出ている。今さらながら子幹が「董仲穎が最も注意すべき人物だ」と言っていたのを思い出し、悔しい思いを募らせる。

その気持ちを抑え玄德は、皇帝を称賛する声を挙げていた。